古蹟調査特別報告　第三册

慶州金冠塚と其遺寶

本文上册

朝鮮總督府

西岳

古墳

金冠塚殘塚

Frontispiece

鳳凰臺より金冠塚を望む

（太田喜二郎君寫生）

序言

大正十年九月余等古蹟調査ノ囑ヲ受ケ、來リテ京城ニ在リ、將ニ慶尙南道梁山ニ於ケル貝塚ノ發掘ニ向ハントスルヤ、偶々慶州路西里ノ一古墳ニ於イテ重大ナル發見アリ、小川敬吉君ノ慶州ヨリ歸リテ其ノ詳報ヲ齎スニ會ス、乃チ古蹟調査委員關野貞氏ト余等ハ、新ニ此ノ古墳發見遺物ノ調査ヲ委囑セラレ、同委員ハ古蹟調査課員小川敬吉、野守健、山内廣衛等諸氏ト共ニ先發シテ慶州ニ赴キ、余等ハ別ニ林漢韶君ト共ニ先ヅ梁山ニ至リ、同地ノ橋本良藏氏ノ援助ヲ得テ、貝塚ノ試掘ヲ行ヒ、蔚山ヲ迂回シテ同十月十二日慶州ニ關野博士一行ト相會シテ、該古墳ト發見遺物ノ調査ニ從事シ、留マルコト十餘日ナリキ、當時關野博士等ノ慫慂ニ基キ、余等ハ遂ニ該遺物ノ調査研究ヲ繼續シ、其ノ報告ヲ作成ス可キノ命ヲ承ケ、爾來二閲年桔据事ニ從ヒ、此ノ間整理ト製圖トニ關シテ、小川敬吉君ノ熱心ナル助力ヲ得テ、今ヤ略ボ其ノ大體ヲ了スルニ至レリ、茲ニ先ヅ其ノ調査報告「慶州金冠塚ト其遺寶」上册ヲ提出シ、更ニ下册ヲ完フシテ、其ノ責ヲ塞グヲ得ル、亦タ近キニアラムトス。

余等ハ本古墳ト其ノ遺物ノ調査ニ際シテ慶州在住ノ官民諸氏特ニ博物館囑托諸鹿央雄、慶州郡守朴光烈、同普通學校長大坂金太郎、當時ノ同警察署長岩見久光等諸氏ノ多大ナル援助ト厚意トニ感謝ノ念禁ズル能ハズ、又タ當時同行調査ノ事ニ從ヒタル關野博士ヲ始メ古蹟調査課諸員、並ニ前古蹟調査會幹事小田幹治郎氏、現古蹟調査課長小田省吾氏等ノ厚意ト斡旋トニ感謝スルト共ニ、該遺物ノ京城ニ移置セラレテ以來、之ガ調査ニ際シテ鑑査官藤田亮策氏、囑托小泉顯夫氏、雇員神田惣藏氏等ノ懇切ナル援助ヲ忝クセルヲ銘記シ、更ニ本報告書作成ニ方リテ寫圖ハ上記小川君ノ技術ニ負フ所最モ多ク、ナホ小場恒吉君ノ助力ヲ得タルモノアリ、寫眞ハ田野七之助、澤俊一兩君ノ手ヲ煩ハシタルモノアルニ感謝セザルヲ得ズ、此ノ報告書ノ成ル實ニ前記諸氏ノ厚情ト援助トノ賜ニシテ、學界ハ此ノ報告ノ考古學的發見ニ對シテ是等諸氏ト該古墳偶然ノ暴露トニ感謝スルヲ禁ズル能ハザル可キナリ。

大正十二年十二月

朝鮮總督府古蹟調査委員　濱田耕作

朝鮮總督府古蹟調査事務囑托　梅原末治

挿圖目次

第一章　序說

第一節　古墳の現狀と其の復原　（圖版第一—第七）

大正十年九月慶州邑南路西里に於いて、偶然一古墳が暴露せられて、非常に豐富なる內容を示現した。(1)我々は此の古墳の遺物中最も顯著なるものゝ一によつて、之を金冠塚(或は金冠陵)と呼ばうとするのであるが、此の塚の發見物は實に從來南朝鮮に於いて發見せられた古墳の遺物中、最も豐富なるものであつて、其の質料の貴重なる、其の種類の變化ある、未だ曾て聞かなかつたものである。否な朝鮮全土に於て、斯の重大なる考古學的發見に比較す可きものは、僅に關野博士、谷井學士等が大正五年の秋に發掘せられた平安南道大同江面の漢式古墳があるのみと云つて宜しく、(2)又た東亞に於ける從來の最大考古學的發見の一と稱しても強ち過言であるまいと思ふ。たゞ此の金冠塚の發掘せられたのは、後述の如く偶然の事情から生じたので、豫め計畫を以て學者が發掘の鍬を下したので無かつたから、古墳の構造、遺物存在の狀態などに於いて、完全なる知識を得難いものがあるのを憾みとするが、其の遺物は幸にして散佚したものが少く、

存在の狀態も或る程度まで詳密に知ることが出來たのは、洵に幸福としなければならない。而かも遺物其者の重大なる價値は、此等多少の遺憾の點を償ひ得て餘りあり、一大貢獻を學界に寄與するものである。以下我々は遺物の調査研究の結果を記述するに先ち、其の古墳自身と、遺物發見の次第とに就いて述べることにする。

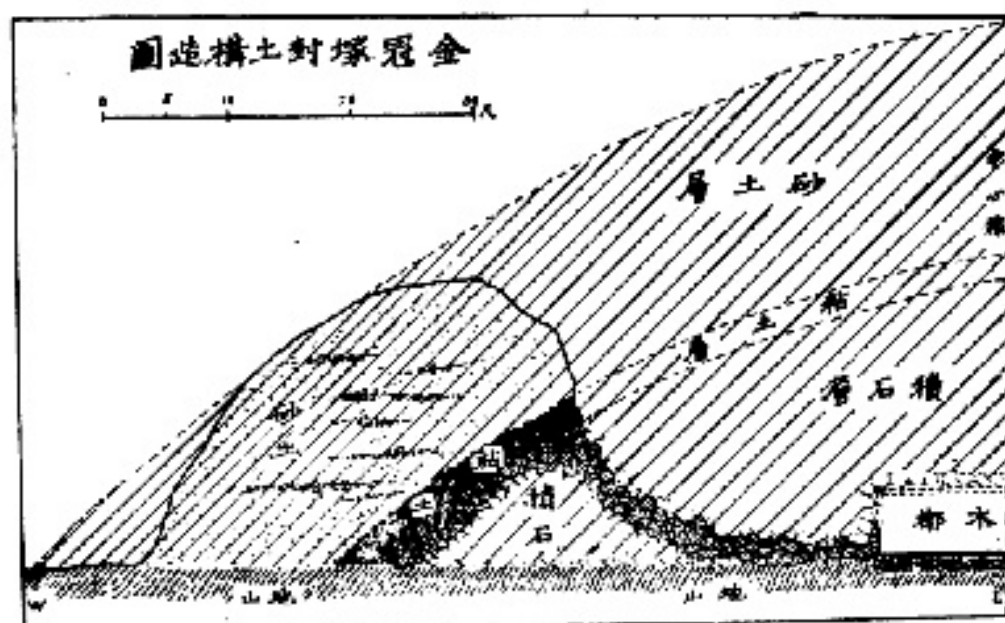
大邱から永川を經て順路慶州に入るものは、慶州邑南に近く、或は臥牛の如く、或は駱駝の脊峯の如く、大きな墳墓の累々たるを見るであらう。是れ即ち路西里から皇南里に亘る新羅古墳群の一である。而して我が金冠塚は此の群中の最も大きな古墳中の一であつたのである。[三]併し大正十年此の大發見が行はれた當時、否な此の近年に於いては、其の封土の大部分は剷夷せられて、慶州邑内に入る大道本町通に立並んだ飲食店などの朝鮮家屋の背後に殘骸を留めて、偉大なる鳳凰臺に相接し、[四]之に次ぐ可き大墳墓―金冠塚が存在して居つたことを、誰人も想像することが出來なかつた。

併し慶州の人々は我々に語る。此の南門外の大道が取擴げられた當時は、店舗など立ち並ばず、金冠塚は其の裾を削り取られて積石の一部を道

路に面して現はし、なほ塚の形狀が見られたと。又た關野博士、谷井學士等が往年慶州の調査に來られた時も、なほ同樣であつたとの事である。それ故今日の如く、人家の裏に小さく閉込められるに至つたのは、實に大正の初年新道の開鑿以來のことで、僅かに數年來のことなのである。併し更に古老とも云はるゝ人々は、此の塚が鳳凰臺古墳の裾と相接して、慶州邑內から南へ出るには、其の上を少し登つて彼方へ下らなければならなかつたと言ひ傳へてゐる。卽ち鳳凰臺の麓も一方に於いて切り取られると同時に、道路の擴張と之を平坦にする工事は、金冠塚の殘存封土を益々削平して、遂に今日の如き狀態に至らしめたものであつた。

扨て次に金冠塚の現狀は何うであるかと云ふに、今述べた通り、鳳凰臺古墳の西方大道を挾んだ西側の人家（朴文煥の家屋を中心として）の背後に、半月形の如き殘骸を留めてゐるので、其の西邊は侍天堂教會の境內に接し、東北端も亦た一民家の爲に若干切り取られてゐる。其の東邊は斷崖狀をなして、外部に土砂の皮を殘し、中核は一尺五寸位の玉石を空積にした所謂積石塚の特質を明に示してゐる。又た南邊は人家に侵蝕せられて、小い建物が其の中腹に設けられてゐるが、封土の頂上に雜草が生ねてゐるばかりで、何等の樹

木を見ない。残塚の大さは南北約百二十尺、東西約五十尺、高約二十尺位と

第一圖 金冠塚封土構造圖 (Fig.1.)

見るべきであらう（第六圖版）

拠てなほ詳しく封土の構成狀態を残塚に就いて觀察すると、石塊を積んだ周圍には、約二尺乃至二尺五寸の厚さの粘土卷きがあり、其の外方に約十尺の厚さの砂土を被ふたものであることが分かる。而かも此の土は單に上方から無造作に置いたものでは無く、大體砂利と粘土とを交互に水平に置いたものであることは頗る注意に値する。之と略ぼ類似の構成は既に慶州皇南里の劍塚に於いて認められた所である。而して此種の所謂積石塚なるものゝ多くが、比較的高い封土を有してあるのは、此の樣な構造から水分の

内部に浸入することを防ぎ、且つ其の後自然の陵夷からも能く堪へたこと云ふことが、其の源因の一をなしたものと思はれる。(圖版一)又た現存の部分から推すと、此の中核の積石は槨を中心として、其の形狀に應じて、稍々東西に長い楕圓形をなして居つたものらしい(長徑約百二十尺、短徑約九十尺)。併し全封土の外形は之に係らず、略ぼ圓形に近かつたものと想像しても差支は無からう。

金冠塚の現狀に就いて記した我々は、次に此の現狀と過去に於ける狀態の記臆とからして、其の本來の形狀と大きさとを復原し度いと思ふ。今ま殘塚の西邊侍天堂の境内に於ける、封土切取りの狀況から考へると、其の塚麓は元となほ十數尺西方にあつたと見、又た鳳凰臺の西邊の切取りを復原して以前に於ける金冠塚との接觸點を、略ぼ大道の中央線上にあつたと考へる時は、金冠塚底部の直徑は約百五十尺と推算することが出來る。(圖版二)而して這回遺物の發見せられた地點から、侍天堂境内に於ける塚の端に至る距離は約七十尺である。今ま此の遺物埋藏の地點を塚の中心として等距離を東方に求めると、矢張り略ぼ道路の中央部に落ちるので、以上の推定は大體に於いて誤謬の無いことが分かる(二)

金冠塚並鳳凰臺想像斷面圖　(Fig.2.)

此の復原せられた金冠塚の底徑百五十尺を、鳳凰臺古墳の底徑二百七十尺と比較すると、之よりは大分小さいものであることが知られる。そこで今ま封土の高さと底徑との比例を假に同一とすれば、鳳凰臺は高さ七十一尺に對する底徑二百七十尺であるから、金冠塚は底徑百五十尺に對して高約四十尺と概算することが出來る。即ち今ま侍天教會の直ぐ西南にある半壞の一古墳の原形よりは稍〻大きく、更に西方二十餘間にある大古墳に次ぐ大さのものとなるのである。されば往古に在つては、此の路西里に於いて、東西の兩端に各一基の大墳塋があり兩者の中間に大小の二古墳が存して、恰も姉妹の相並ぶが如き形勢を以て連なつて居り、なほ南方の大小古墳と相應じて居つたことが想像せられるのである。而して鳳凰臺古墳の基底と相連續して、稍々馬背狀をなして居つたことは、當初から兩者が斯樣に聯達つて居つたのでは無く、一方に於いては兩古墳の封土が陵夷して、其の土砂が此處に推積したことゝ、他方に於ては市

街道路の建設によつて、地面の他の部分が低くなつた結果であろう。(圖版二)

我々は斯の如く鳳凰臺古墳と相接した此の金冠塚が、鳳凰臺とは特に年代等に於いて相等しい關係に在り、或は其の被葬者の間にも親密なる因緣が存在して居つたことを想像するを禁じ得ない。之と同時に又た路西里から皇南里に亘る古墳群全體も、略々相近い時代に築造せられたものであつて、古新羅の或る時代に於ける墓地として、此の處が選まれたものであることを推察するのである。なほ此等に關しては、遺物を敍述した後に再び論ずることゝする。

【註】

(1)本古墳發見に關する朝鮮及內地の新聞紙の報道は、一々列擧する遑がないから之を省略する。たゞ就中關野博士が同年十一月七日總督府に於いて、同八日中樞院に於いて「慶州發見遺物に就いて」と題し、主要なる發見品を示して講演せられたことゝ、濱田が同十一月「大阪朝日新聞」紙上に「慶州の新發掘品」の題下に略述する所があつたことを記して置く。

(2)平安南道大同江面の古墳に就いては、關野博士の「新に發掘せる樂浪の古墳」(考古學雜誌第八卷第一號)及び總督府「大正五年度古蹟調査報告」同「古蹟調査特別報告」第一冊(大正八年刊)等を見よ。

(3)慶州の古墳に就いては「東國輿地勝覽」「東京雜記」等の諸所の外、關野博士「韓國建築調査報告」(明治卅七年東京帝國大學)今西龍博士「新羅舊都慶州の地勢及其遺物遺跡」(東洋學報第一卷第一號)同君「慶州に於ける新羅の墳墓及其の遺物に就いて」(東京人類學會雜誌第二百六十九號)「朝鮮古蹟圖譜」(第三冊)等參照。

(4)鳳凰臺に關しては前註諸文獻等多く其の記述を缺くが、其の古墳たることは疑ふ可くもない。たゞ「東京雜記」(卷一)勝地の條に「鳳凰臺在府南門外、津之邊周回十五里、如鳳凰臺形若臺」とあり。又た李渡の詩に「鳳臺賞月圖」の句がある。

(5)「朝鮮古蹟圖譜」第三冊、圖版第三三八圖參照。

(6)杉浦明君實測圖と小川敬吉君撮影圖等に據る。

(7)金冠塚の現存封土は其の東邊の人家の大部分と共に、地籍圖に於いて官有林野となつて居る。其の詳細は圖版第五を見よ。

(8)慶州附近古墳で積石塚の確證あるもの、積石塚と推定せられるものに就いて、其の封土の底徑と高さとが分るものを次に擧げて見よう。

	長徑尺	高尺	長徑ヲ百トシタ高比	
一、鳳凰臺	二七〇	七一	二六・三	
二、金冠塚	一五〇	四〇	二六・六	（本報告書）
三、皇南里瓢塚	一四七	三二	二一・七	（古蹟圖譜第三）
四、同　南塚	一六〇	五五	三四・三	（同　上）
五、同　北側塚	二一〇	七〇	三三・三	（同　上）
六、普門里古墳	八五	二五	二〇・九	（原田委員報告書）

第二節　遺物發見の顚末と其の整理

金冠塚は前節に述べた如く、次第に削夷せられて、此の一兩年人家の背後に隱れ、其の平面に於いて殆んど塚の中心を越ゐ、立面に於ても地平に近くまで切取られたが、其間何等遺物の發見は無く、否な少くとも人々の注意に上らずして大正十年九月に至つた。然るに慶州邑の發展と共に更に其の封土の殘部を掘り崩して、之を附近の低地に移して、家屋建築の爲め地面を平かにする工事が著しくなつて來て、終に同月廿二三日頃に至つて、棺槨遺物の存在する處に達し、その一部分を露出する樣になつた。而して之が世間に知れらたのは、同月廿四日のことで、實に慶州警察署巡査三宅與三君の周到なる注意に俟つことが多い。

今ま同氏の岩見警察署長に對する報告書に依ると、氏は同日午前九時頃鮮童三四名集合シ、頻リニ何物カ搜シ居ル樣子ニ付キ、之ヲ取調ブルニ、鮮童ハ何レモ青色硝子玉三四宛ヲ手ニセルニヨリ、之レハ古墳ヨル出ツル玉ニアラザルヤト思料シ、埋立土ノ出所ヲ尋ネタルニ、鳳凰臺下朴文煥ノ宅地內ヨリ運搬シ來ル旨申立ツルニ付、直ニ現場ニ付キ見ルニ、數人ノ

鮮人夫ハ頻リニ土砂採取ノ爲メ、古墳跡ラシキ場所チ發掘シ居ルチ以テ、直チニ中止セシメタリ」とある。其の現場の模樣は「前記朴文煥後方ニテ、古墳ノ崩壞採土セル跡ニテ、約地平線ト覺シキ處ニ、已ニ古銅金製品、硝子玉等遺物ト認メラルヽモノチ認メタリ」とのことに、同氏は其の「遺物出土ノ狀況ヨリ見テ、王陵又ハ貴族ノ古墳ノ中心ナリト認メ、直チニ採土チ中止セシメ、遺物ハ現場ニ保管シ、此旨チ急報シ其ノ指揮チ仰」がれると云ふ臨機の措置を取られたのである。若しも三宅氏の此の注意が二三日も遲れたならば、貴重なる遺物が如何に危險なる運命に遭遇したものがあつたか、想像するに足るものがある。否な此間に既に幾分散逸した形跡が認められるに於てをやである。

此の報告に接した警察署長岩見久光氏は、直に之を慶州在住の本府博物館囑託諸鹿央雄氏に通じて、共に現場に赴いて出土狀態を取調べ、其の半ば地中から現はれつゝある遺物が非常に多數であり、其儘に放棄して指令を俟つことの出來ない事情を認め、協議の結果諸鹿氏主任となり岩見氏立會の上、更に慶州普通學校長大坂金太郎氏、古蹟保存會囑託渡理文哉氏其他諸氏の助力を求め、二十七日から遺物の採掘に從事した。斯く

て廿七、廿八日の兩日を以て、最初に出た棺の東半部の副葬品を取出し、廿九日には主として棺內主要部の調査を行ひ、各種貴重なる遺物を發掘し、三十日に至つてなほ遺漏なきやを確めて、終に作業を了つたのであつた。

一方此の金冠塚に於ける遺物發見の報告が、郡廳を經て慶尙北道廳に達するや、知事は直ちに之を總督府に上申すると共に、道屬針替理平氏を遣して發掘に參加せしめたが、總督府に於いては古蹟調査會幹事小田幹治郎氏は、博物館囑托小川敬吉君を慶州に急派し、其の發掘と遺物の調査とを命じた。針替氏は廿八日現場に到著し、翌日に亘つて發掘に協力することが出來たが、(8)小川氏は期に遲れて、既に發掘の終了した後二日、十月二日慶州に到著したので、充分調査を遂行することが出來なかつた。併し當時慶州警察署に保管してあつた遺物を撮影し、其の發見品の數量と性質とに於いて、容易ならざるものがあつて、到底單獨に短時日を以て調査を完了することが出來ないことを察し、之を報告旁向後の方針を決定する爲に、十月七日一先づ京城に歸來した。

此の際恰も關野委員と我々とは、內地から京城へ來著したのであつたので、新に古蹟調査課長に任ぜられた小田省吾氏と相談して、我々は關野

博士と共に慶州に赴いて、此の未曾有の發掘品の調査に從事することになつた。そこで我々は已に此の以前調査に決して居つた慶尚南道梁山に赴き、其の貝塚の試掘を行つてから、彥陽、蔚山を經て同月十二日慶州に著した。而して先著の關野博士及び小川敬吉、野守健、山內廣衞諸氏と、余等に隨行した林漢韶君と共に、一方警察署に保管せられてあつた遺物を、慶州古蹟保存會の一室に移して、連日調査整理を行ふと同時に、又た他方其の埋藏狀態や發掘地の現場と古墳其物を調査し、林君には專ら測量の事に當つて貰ふことにした。

斯くて十月二十一日に大體の整理と調査とが終了したので翌日關野博士、小川、野守兩氏は慶州を出發し京城に歸られたが、我々は山內廣衞君と共に殘務を處理して、同廿四日慶州を去り、濱田は大邱の道廳に立寄り直に內地へ歸ることになつたが、梅原は再び京城に赴き、次いで慶州から該遺物の移送せらるるのを俟つて、其の整理を續行して十一月下旬に至つて朝鮮を引き揚げた。

・　・　・　・　・　・　・

以上は大正十年九月金冠塚發掘の顛末と、當時に於ける調査の概要で

あるが、余等は引續いて該遺物の調査研究を委囑せられたので、大正十一年四月から六月に亘り、梅原は約一ヶ月半、同年十月濱田は二週間、京都帝國大學助手島田貞彦君と共に京城に赴き、更に十二年五月梅原は約一ヶ月間京城に出張して、博物館の諸員殊に小川敬吉、小泉顯夫、神田惣藏三君の援助を得て、其整理調査を繼續し、終に略ぼ其大體を終了するに至つた。

さて金冠塚發見の遺物に關しては、出土當時から慶州邑民の熱心なる希望があつて、之を慶州に置き實地の環境と共に、此の新羅の考古學的大發見物を保存しようと云ふ議があつたが、終に此の希望は容れられて遺物の調査完了すると共に、之れを慶州に返還することゝなつた。又た一方慶州邑民の熱誠は此の貴重なる遺物を藏置する目的を以て、不燃質の堅固なる建築物を造り、博物館分館の設置を計畫し、有志の寄附金によつて終に大正十二年十月其の建築の落成と共に、已に調査研究の完了した遺物の大部分は慶州に送還せられ、今や朝鮮建築の樣式を參酌して建てられた新しい陳列館中に、金色燦爛たる金冠腰佩其他の遺物は安置せられて、鳳凰臺下古墳の殘骸と相對照して、驚異の眼を以て之を眺め、新羅古都の風物と併せ感懷を深くすることが出來る樣になつたのは、吾れ人の心

から欣ぶ所である。又た金冠塚の遺跡其者に對しても、保存の方法確立して、土ら小場恒吉君の設計に依つて、其の改修建碑の日を見ること亦た近きにある。

【注】

（１）此の鉄貨氏の持主は金致燮と云ひ、之を朴文楨に貸與してゐたのである。

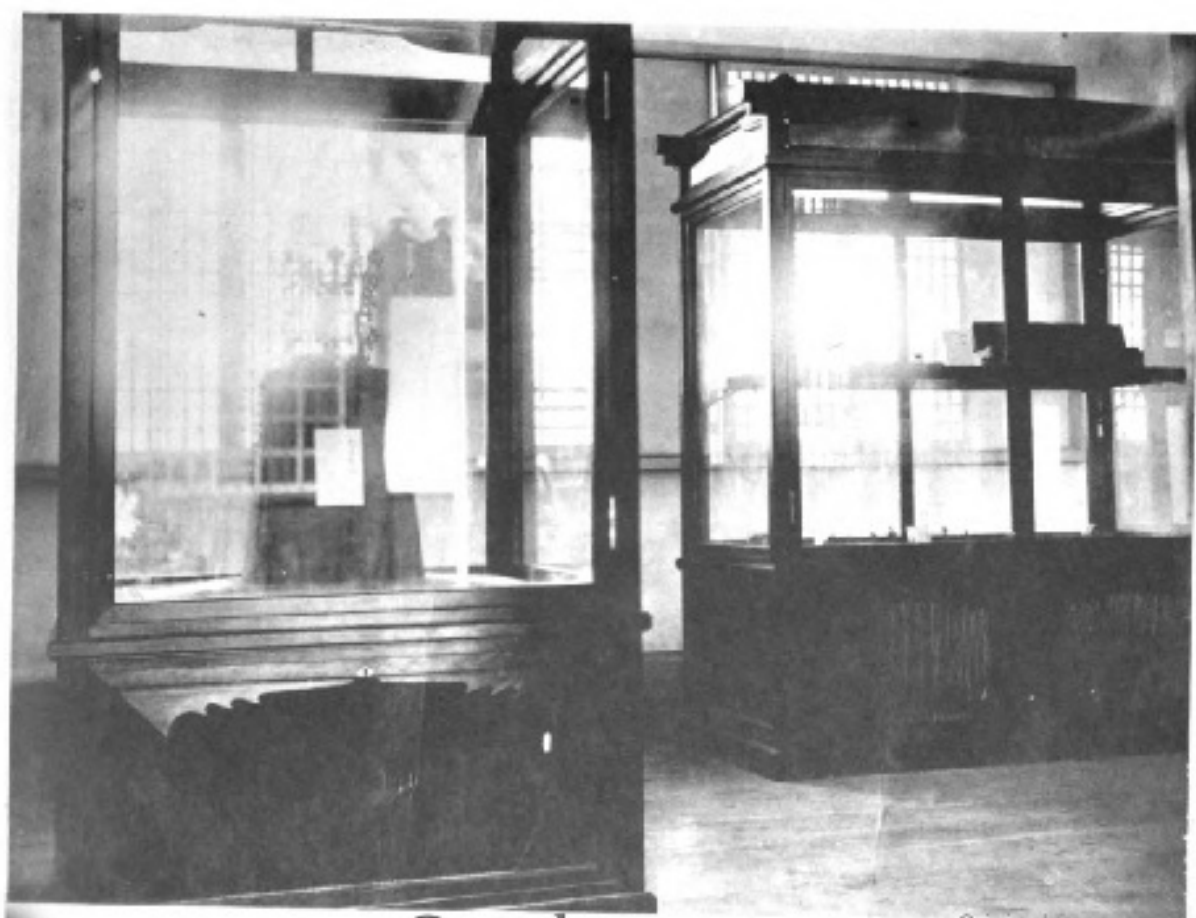
（２）大正十年九月廿五日附三宅視學の報告の、殆んど全文を此處に引用した。

（３）諸鹿氏は「慶州古墳發掘記事」と題して、此の調査の結果を録した印刷物を頒布せられた。

（４）此の發見物を慶州に保存する邑民の希望と、之に關する有志の運動の經過に就いては、頗る紆餘曲折したものがある。今ま故らに之を省略に附する。

慶州古蹟保存會內金冠塚遺物陳列館

內上內部陳列室

第三圖

第三節　遺物出土狀態と古墳構造の概要

金冠塚に於ける遺物出土の狀態は既に述べた樣に、邑民が偶然土工の際に發見したのに始まり、次いで諸鹿央雄君の監督の下に、主として遺物の發掘を見たのであるが、何分にも混雜の際であり、且つ發見地點は飲食店家屋の狹苦しい裏庭であつて、充分なる用意を以て發掘を遂行するに不便があつたのみならず、遺物其者の數量と種類とは非常に豊富で、それが僅に一二坪許の處に相累なり相接して存在して居つたのを、短時日中に掘出さなければならない事情にあつたことは、墳の構造と共に遺物出土狀態に關して、精確なる觀察を豫期することが出來ないものがあつた。それで諸鹿君自身の覺書及び記憶と、發掘に關與した大坂金太郎君其他の人々の所見との間に往々一致しない點もあり、全く存在狀態の分らない遺物の少くないのは遺憾とする所であるが、これ亦た已むを得ない次第である。我々は以下遺物に關する記載を終つた後、再び棺槨の構造と副葬品配置の狀態に就いて詳論する積りであるが、今ま古墳の遺物包藏部の構造と、其の遺物出土狀態の概要とを、主ら諸鹿君其他の實地關係者の

見聞によつて略述し、此の報告書を讀む人の爲に豫備的知識を供給し度いと思ふ。

(一)**遺物出土の地域**　は概括的には正確に分つてゐる。卽ち朴文煥の家屋の前面道路敷から西方六十尺、侍天敎會堂側に於ける古墳殘土の東方六十尺の點を中心として、東西約十六尺、南北約七尺の長方形の區域である。是が卽ち古墳の中心であることは、旣に前節に述べた所である。又た此の地域の水準位は、略ぼ道路面と同一で、遺物は之れより以下深さ約一、二尺の間に存在して居つたと言はれる。

如上の地域には發掘の際木材の遺つてゐたものが夥しく、其の一部分は採取して今なほ保存せられてゐるので、是が卽ち木造の棺槨を形成して居つたものであることが明かである。但し此等の構造部は木材の腐朽と共に上部の積石の落下を來し、爲に發掘當時既に其の立面形(エレベーション)を見ることが出來なかつたが、諸鹿、大坂等諸氏の調査と、吾々の調査の際一部分を再掘して得た知見、及び殘存木材の形狀とからして、其の構造の一般を窺ふに近いものがあるのは寧ろ幸としなければならない(第一圖參照)。

(二)**槨の構造**　本墳の棺槨部は積石の略ぼ基底面に存在したものである

が、其の底部は約一尺三寸許黄色の粘土層下に掘り込んで、此處には周圍の積石の石塊よりは遙かに小さい徑五六寸の石塊を疊んで地固めとし、厚さ三寸の木槨の底板を敷くに便にしてあつた。次に槨の四周は大きな丸石が、略ぼ內側の面を合せて一列に積み並べられて居つたことを認められるが、該石並びは諸鹿氏に從ふと、直ちに木部には接しないで、若干の間隔を有し、其の間には底敷と同じ程の小石が置かれてあつたとの事である。

木槨の平面形は細長くて、內法は其の間に於いて六尺六寸を示して居つた。其の側板は本來六寸角程の木材を橫積みにしたものと覺しく、上記の小石積に沿ふて、粉末狀になり乍らなほ明に認められた。次に其の長さは西端から十尺迄は確實に跡付け得たが、最初の發掘部分卽ち東半の調査が不充分であつた爲め、全體を究め難かつた。但し右の東半部に存した銅製蓋附四耳壺の底に、厚さ三寸許の木材が附存して居る點から推すと、槨はなほ此の部分にも續いて居つたと見て誤りが無い樣である。して見れば槨の長さは正に十六七尺に達す可きである。

(三) **棺の構造**　さて棺は如上の槨の西半部に置かれたもので、其一端は西

壁に近接し、左右兩壁との距離は各一尺六寸あり、槨內中線上の正しい位置にある。大さは長八尺三寸、幅三尺三寸あつたことは、發掘の際諸鹿氏の測定に依つて確められた。棺の立面も亦た其の形を見ることが出來なかつたが、同氏に從へば西端にあつては、側材を底板の外側に置いて打付けにした構造部が遺存したと云ふ。なほ現存の遺材から推すと、底蓋共に厚い一文字板で造つてあつたと思はれ、表裏共に漆を塗つた痕が明に認められる。此等から幽かながら原形を髣髴することが出來、一種の木心の漆棺とも云ふべきものであつたことが分かる。

なほ棺槨と共に記す可きものに、上述の棺の兩外側槨壁に沿ふて置かれた鐵片の並列がある。是は長さ九寸、幅二寸內外の薄い鐵板や、稍三角形の楔狀の鐵片七八箇を重ねて、五寸位の厚さにしたものから成つて居つて、槨の西端から棺の置かれた部分を通じて、更に東の方一尺五寸の邊にまで達し、長さ約十尺の間に亘つて兩側に在つたとは、槨口の一致する處である。是れが如何なる必要から來た設備であるか、我々は不幸にして未だ之を詳にするを得ない。

以上は吾々の知り得た本古墳の遺物包藏部の構造の概要であるが、此の狹い區域から數千に上る驚く可き多數の副葬品が見出されたのであつて見れば、其の累々として打ち重なつて居つた事は、容易に想像するに足る處であつて、事實遺物は棺槨の隨處に存在し、特に玉類に於いて然るを覺ゆたと云ふが、發掘者の傳ふる處に大した誤りが無いとすれば、其の間に自ら又た副葬の原狀を察し得らるゝものがある。次に我々は便宜棺の內部と、槨を東西兩部に分つて、出土品の狀態を略記することにする。

(四)棺•內•遺•物•の•狀•態•　棺內にあつては、東端に近く稍々北に偏して、黃金の冠が發見せられ、附近に眞珠や玻璃の小玉が無數に散在して居り、冠の垂下飾の近くに同じく金製の耳飾があつた。棺の中央部には十七箇から成る金製の腰佩具を垂れた銙帶一揃が橫つて、其緊げ物は孰れも端を西方にして居つた。冠と銙帶との間からは切子玉、丸玉、小玉の類が見出され、其の中央に長さ二寸二分もある立派な硬玉製丁字頭の勾玉一箇を遺存して、頸飾の中心をなした面影を止めて居た。又た銙帶の兩側には金銀の釧が指鐶と共に存在し、棺の西端からも同じく釧が玉や耳飾と共に發見せられた。此等の遺物の相互的位置は諸鹿、大坂等諸氏の言ふ所共に一致し

て居るが、なほ大坂氏に從へば、棺の西方中程に金銅製飾履が一對あつたさ云ふ。

(五) **槨内東部遺物の狀態**　槨の東半部は最初に採集せられた處で、主さして副葬品を收めた部分さ覺しく、出土の遺物が最も多い。即ち三個の鐵釜が約二尺の距離を以て、東北から西南の線上に相並び、別に一箇の釜が東南隅に置かれてあつた。而して此等の釜の上下及び同地下に各種の土器、四耳壺、鐎斗、高坏等の銅器、金銀の容器、漆器、玻璃器をはじめ多數の勾玉、小玉、金銀、金銅製の冠、帶、鈴、鎹等の裝身具が相累なつて存在し、馬鞍、杏葉、雲珠等の馬具は此の附近から南側に亘る區域にあり、略ぼ形の遺存した環頭太刀一口は、柄頭を東にして、南壁に近く埋められてあつた。

(六) **槨内西部遺物の狀態**　棺を中央にした槨の西半に於いては、西北隅を除いた棺の三隅に、一種の細長い異形の鐵器が置かれてあつたことは注目すべき事實である。次に西側の中央に陶質の壺一箇があり、棺側には孰れも太刀の類を横たへ、玉類が之に添ひ、西北隅から槍身等が發見せられたさのことである。而して此内から見出された太刀に就いては、岩見氏は棺の南側出土のものは刀子の添つた金銅造の環頭太刀であつて、柄頭を

(1)–(4) Iron kettles

(2) Iron kettle No.4

(5) Bronze jar with four ears & cover

(6) Bronze cooking-vessel, *chiao tou*

(7) Ring-pommeled sword

(8) Gold crown

(9) Gold ear-pendants

(10) Girdle with gold ornaments

(11) Gold waist-pendants

(12) Gold & silver bracelets

(13) Pottery jar

(14) Queer shaped iron implements

(15) Iron pigs

(16) Wooden walls of the outer coffin

(17) Horse saddle with open-work ornaments, silver girdle ornaments, bronze bells & guard of horse trapping, *[illegible]* ornaments, waist-pendants, armours, crown, &c.

(18) Horse trappings

(19) Front ornaments of crown

(20) Pottery

(21) Fragments of lacquered wood vessels

(22) *Magatama* and glass beads

(23) Beads

(24) Metal vessels

(26) Pottery

(27) Fragments of lacquered wood vessels

(28) *[illegible]* ornaments in glass

(29) Glass vases

(30) Vessels made of shell

(31) Gilt bronze bowls

(32) Gilt bronze tazza

(33) Beads

(34) *[illegible]* & *[illegible]* bowls

(35) Gilt bronze shoes with open-work designs

(36) Gilt bronze shoes with floral ornaments

(37) Swords

(38) Spear-heads

(39) Silver waist pendants

(40) Small beads

西にして居つたと云ひ、又た西側發見のものは銀擀へであると云ふ、

＊　＊　。　＊　。　＊

右は主として諸鹿氏の覺書に基き、大坂氏等の所見と一致した重要な遺物に就いて述べたのであるが、一々の遺品に就いては其の發見位置の分明する限り、遺物解說の條に記載することにした。なほ此等遺物の存在して居つて平面は凡て同一では無く、棺内に於いては、四耳銅壺最も上方に存し、次の平面に鐵釜があり、土器金屬器は是と同一若しくは下方に位し、金冠腰珮等の一類は最下方に在つたと言はれて居る。此の事實は果して如何なる說明を要す可きであるか。これは棺槨の構造と相關する問題であるから、下册に於いて論述することにする。

今ま此等副葬品の配列の狀態を通觀して、我々は槨內の被葬者が若し一人以上とすれば、少くとも其の一人は盛裝の儘東枕の位置に置かれた事を推察せられ、槨の東半には各種の容器、裝飾品、馬具等を置いたに對し、棺側には主として刀劍等を收めた狀態を窺ひ知ることが出來る。併し此等遺物の狀態から我々に起さしめる最も重大なる疑問は、被葬者が一人であつたか、將た二人以上であつたかと云ふことゝ、又た其の男女の性別

等の問題である。此等は各遺物を敍說する際にも接觸し、更に最後に改めて論考しようと思ふ。

【註】

(1)主として依據する處の諸鹿氏の覺書は、大正十年十月廿日の午後實地に於いて吾々に示され、且つ解說を加へられたもの、また大阪氏の分は之に先立ち、同日の午前に氏から聽いた話と其の後同氏から總督府へ提出の報告書とである。

(2)此の一部分の再掘調査は、十月廿日午前に人夫二人を以て行ひ梅原主として調査に當り、大阪氏に立會を求めて氏の云ふ處と實際との合致如何を檢した。

(3)諸鹿氏の覺書に依ると、金冠の上邊に別に附屬一對が存在して居つたことが見ゆる。

(4)大阪氏は此の棺の兩側泥土の名殘、木心の金銅立環頭太刀數口であつたと云はれる。

(5)此の推定し得た副葬品の存在狀態は、吕寧の梁山の古墳に於ける知見と酷似した處があり、殊に大正九年十一月發掘調査の、梁山北亭洞の古墳の石室内に於ける狀態と、合致する處が多く、頗る興味を惹く。なほこの事は後に說く積りである。

第四節　發見遺物の種類と其の數量

金冠塚發見の遺物が頗る豐富であつて、且つ貴重品の多いことは、已に前節遺物出土の狀態を概說した處によつて、容易に之を想察し得るのであるが、吾々は次章以下一々の遺物に關する記述を試みるに先つて、其遺物の種類と數量とを列擧して、更に此の考古學的發見が如何に空前のものであるかを明かにして置きたいと思ふ。

發見の遺物を其の存在の場處から區別すること、棺內から出たものは殆んど全く裝身具に限られてゐるが、槨內東半部に副葬したものにも、同樣裝身具に屬するものが鮮くない。併し此處には寧ろ各種飮食の器什(土器、鐵釜、玻璃器、木漆器、金屬容器等)、武器類(鐶頭太刀等)、馬具類(轡、雲珠、鞍、杏葉、鐸、鈴等)が主要なる副葬品を形成して居つて、其の種類頗る多く、其の何れの品目も少くとも數個多きは數百を超ね、特に玉類の如きは硬玉製勾玉五十以上を數へ、玻璃小玉に至つては其數無慮三萬、正に升を以て量る可き程であるのは、從來未だ其の事例を聞かない處である。今ま便宜裝身具、容器、武器、馬具等に分つて、其の種類品目と概數を左に表示する。

一、裝身具其他裝飾具

(1) 玉類

品目	數量
＊＊(イ) 勾玉（硬玉等）	五十九顆（内硬玉五十四、水晶一、琥珀一、碧玉一、玻璃二）
(ロ) 管玉（瑪瑙等）	八箇（内瑪瑙四、碧玉二、玻璃二）
(ハ) 切子玉（瑪瑙製）	五箇
(ニ) 棗玉（琥珀製）	二箇
(ホ) 臼玉（瑪瑙製）	二箇
(ヘ) 丸玉（金銅、玻璃製其他）	約一萬二千箇
＊(ト) 小玉（玻璃製）	約一萬八千箇
(チ) 異珠小玉	約四百五十箇
(リ) 玻璃勾玉（冠飾品ノ遊離セルモノ）	約七十五箇
＊＊(ヌ) 玉飾聯結長方形金具（金銅製及金製）	約五十箇（内金製品十六）
＊＊(2) 釧（金製、銀製）	二十九箇（内金銅十二、銀銅十七）
(3) 指環（金製、銀製）	十六箇（内金製十三、銀製三）
＊＊(4) 耳飾（金製）	五種（内對及一雙）
(5) 冠帽	
＊(イ) 金製冠（硬玉勾玉六十七顆付）	一具
(ロ) 同冠帽殘缺及附屬具	約三箇分

(ハ) 金銅製冠立飾殘缺　約二箇分
(ニ) 銀製冠帽飾　一箇
(ホ) 木皮製冠帽殘缺　若干
(6) 金製其他垂下飾（推定冠附屬品）　五對及一雙
(7) 飾履（金銅製）　二足
*(8) 銙帶金具
*(イ) 金製銙板等　一具（四十一個）
(ロ) 銀製方形銙板等 殘缺　約四具分
(ハ) 銀製其他心葉形銙板等 殘缺　約八具分
(9) 腰佩金具
*(イ) 金製鐶　一具（十七個）
(ロ) 銀製鐶珮 殘缺　二具以上
(10) 透彫垂下金具（金銅製魚形等）　四箇
(11) 十字形飾金具（金製銀製）　五對
(12) 市女笠形金具（金銅製）　一箇分
(13) 金銅製鳳凰形飾具　一個

二、容器類

(1) 土器

（イ）陶質長頸壇　三箇分
＊＊（ロ）同　俵形壺　約九箇分
＊＊（ハ）同　壇　十五箇分
＊（ニ）同　臺付小盌　一箇
＊＊（ホ）同　蓋坏　約十三箇分
（ヘ）同　高坏　七箇分
（ト）同　器蓋　約二十箇分
（チ）素燒蓋附椀　六箇分

(2) 木漆器 殘缺　若干

(3) 玻璃器 殘缺　二箇分

(4) 鐵　釜（陶器蓋附）　四箇

(5) 金屬製容器

＊＊（イ）金製鋺　六箇
＊＊（ロ）銀製鋺　五箇
（ハ）金銅製有孔鋺形品 殘缺　五箇分
（ニ）鐵地金銅張鋺 殘缺　一箇分
＊＊（ホ）銀製盒 殘缺　六箇分
＊＊（ヘ）金銅製盒　十五箇

*(ト) 金銅製高坏	一個
コ(チ) 青銅製蓋附四耳壺	一個
(リ) 青銅製刁斗	一個
(ヌ) 金銅製角形尊	一個
(ル) 青銅製鐎斗	一個
(6) 貝製品(金銅製金具附)	若干

三、武器類

(1) 刀劍	
(イ) 環頭太刀 殘缺共	三口
(ロ) 環頭木刀 殘缺共	五口
(ハ) 太刀 殘缺	數口分
(ニ) 刀子 殘缺	數口分
(ホ) 環刀柄頭及金具	約十四個分
(ヘ) 圭頭太刀柄頭	二箇
(2) 甲冑	
**(イ) 金銅製大鎧札	一領分(約三十個)
(ロ) 同上附屬金具	一括
(ハ) 鐵地金銅張鱗小札其他	若干
(ニ) 同上腦當金具 殘缺	約三箇分
(3) 槍身(鐵製)	八口

(4) 鐵鏃 二箇
(5) 鐵斧類殘缺 若干
(6) 石突様金具（銅製金銅製等） 五箇
(7) 弓弭様品殘缺 二箇

四、馬具類

(1) 馬鐸（青銅製） 二十箇（二種）
(2) 鈴（青銅製） 十七箇（四種）
(3) 輪鐙
(イ) 金銅製透彫玉虫羽附品 殘缺共 二對分
(ロ) 金銅製品 一對
(ハ) 鐵製品 殘缺 四箇
(4) 鞍金具（金銅製玉虫羽付品其他） 約五箇分
(5) 杏葉
(イ) 鐵地金銅張鋒形品 約十九箇
(ロ) 同 透彫板張品（玉虫羽飾付ヲ含ム） 約二十四箇（二種）
(ハ) 同 心葉形品 殘缺 一箇
(6) 轡 殘缺（鐵地金銅張等） 若干
(7) 雲珠
(イ) 金銅製花形座品 約百箇
(ロ) 同 半球形座品 約三百五十箇（二種）

（ハ）玻璃製品　約九箇

（ニ）貝製雲珠形　約六箇

(8) 鉸具類（金銅製等）　約三十箇

(9) 革紐金具 殘缺　數百（二種）

五、雜類

(1) 金墨匙（銀製、金銅製）　四箇

(2) 火箸樣金具 殘缺　八箇

(3) 金絲　若干

(4) 針形品（金銅製）　二箇

(5) 碁石樣扁平小石　約八十箇（黑白二種）

(6) 有孔石錘　一箇

(7) 中空球形金具（金銅製）　七箇

(8) 革紐　數條

(9) 異形頭附鐵器 殘缺　四箇

(10) 長方形及楔形鐵板　約數十箇（二種）

(11) 動物爪　二箇

(12) 金製環輪　數條

以上は金冠塚發見遺品として吾々が慶州に於て京城の總督府博物館

に於いて、整理調査したもの、大要であるが、遺物中には一部なほ整理未了に屬するものもあるから、之[1]が完成の曉には或は品目と數量とに於いて、多少の訂正を要するものが生ずるかも知れない。又た發見當時散佚に歸したも[2]の(特に玉類等に於いて)は此の表中に含まれて居ないので、實際副葬品の全數は更に多きを加ふるものがあつたに相違ない。併し其の大體に於いては之と大差ないものと信じて差支がなからう。

さて此の目錄を通觀して誰人にも直に感じられることは、黃金製品の頗る豐富なることと、容器類に於いて、土器に比して金屬製品の著しく多いこと等であらう。金製品は棺内から出た寶冠、耳飾、釧、帶鎊、腰珮等の殆んど全部を占めるのみならず、槨の東半部の副葬品に於いても、他の冠帽鐙、垂下飾、各種の覆輪等に之を認めることが出來る。此の外被葬者の衣服と思はれる絨布に金箔を置き、銅器に鍍金を施したものなどを加ふれば、此等に用ゐられた黃金の總量は可成大きなものであつたに違ひない。未だ此等を計量する機會に接しないが、或は二貫目を出入するかも知れないと推測せられる。固より之をかのシュリーマンが希臘ミケーネから發見した金製寶器などに比しては、一籌を輸するであらうが、[3]中亞オクソス發

見の寶器などに較べては之を凌駕するものがある。尤も黄金の多量は必ずしも技術の精妙を示すもので無く、學術上の價値と並行しないことは云ふ迄もないが、兎に角本古墳の發見品の如きは、獨り本邦領土内に於いて初めて見る處ばかりでなく、東亞或は全世界に於いても、最も著しい古墳發見品の一群と云ふことが出來ると思はれる。此の點からして金冠塚の遺品は「慶州の寶器」(Treasures of Keishū) として長く世に傳稱せらる可きであり、被葬者の豪富の如何に大なるものがあつたかを雄辯に物語るものである。

次に之に聯關して遺物に就いて注意せられることは、已に述べた如く凡ての種類の品目を通じて、同種のものが單一に止まらず、常に多數を存して居ることである。例へば最も貴重にして多くの古墳に於いて、或は之を缺き、或は僅に一具にして止まるのが普通である寶冠が、本墳では金製品四點の外に、尚ほ銀製品、金銅製品を併せ出し、銙帶も金製品の外に銀製品等十數腰に上るが如きは其の例である。是は勿論被葬者の數と關係あることであるにもせよ、なほ其富の殆ど全部を擧げ、全所有品を副葬したことを推想せしめるものがある。而かも如上各種遺物の非常に豐富なる

に係らず、遂に鑑鏡類の一面も存しなかつたことは、之を北鮮漢式の墳墓や、日本內地の古墳に比べて頗る特異の現象と言はなければならないのみならず、內地古墳に屢々見る所の石製模造品を全く缺如して居ること、又た支那陵墓に普通である明器土偶などを包藏して居ないことなども、彼此古墳の特質を考察し、又た營造年代の攻究にも資する所があると思ふ。此等は最後に論述することゝし、以下先づ遺物の各類に就いて順次記載を試みることにする。

【註】

(1)本報告書脫稿の日迄に武器類、馬具類、鋒類等に於いて未だ整理を完了しないものが若干殘つて居る。大正十二年十月迄に慶州保存會の陳列室に送附せられたものは概ね目錄の品目上に(＊)を附して置いた。(＊印にあるものは一部分送附)

(2)吾々は本古墳出土のものと信ず可き環內のある勾玉十數箇の個人の所有に歸したものゝあることを知つてゐる。其他玻璃製小玉の類に至つては、其の散佚したことの多いのは固より想像に餘りある。

(3)今まで雅典國立博物館に藏するシュリーマンの發掘にミケーネ古墳發見の黃金製品は今の價値十萬フラン以上に達するといふ。之に比ぶ可くもないが、シュリーマンが一八七四年十一月廿八日其發見を國王に電報した一節に "J'ai trouvé dans ces sépultures des trésors immenses qui suffisent à eux seuls à remplir un grand musée, qui sera le plus merveilleux du monde et qui, pendant des siècles à venir, attirera en Grèce des milliers de étrangers." である節は或る程度まで此の發見品にも當るかも知れない。(Diehl, Excursions archéologiques en Grèce, pp. 45-50)

第二章　各種容器

第一節　土器類　（圖版第八—第一四）

金冠塚の內部から發見せられた遺物のうち、各種の質料を以て作られた容器の類を敍述するに方つて、第一に擧ぐ可きものは、古墳遺物さして最も普通なる土器類である。これは總數八十餘點あつて、陶質さ素燒さの二類に別たれるが、其の大部分を占めるものは前者である。

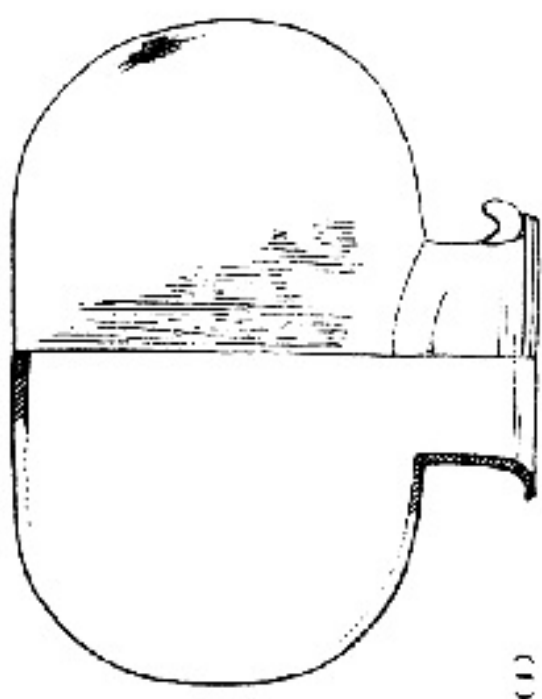
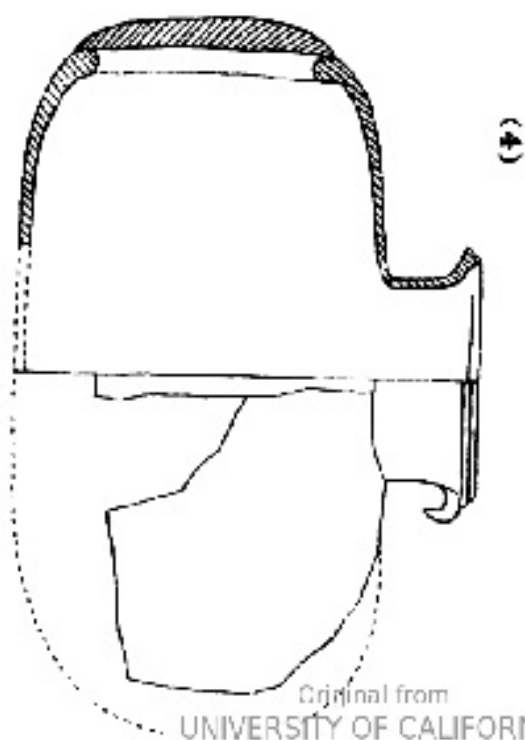
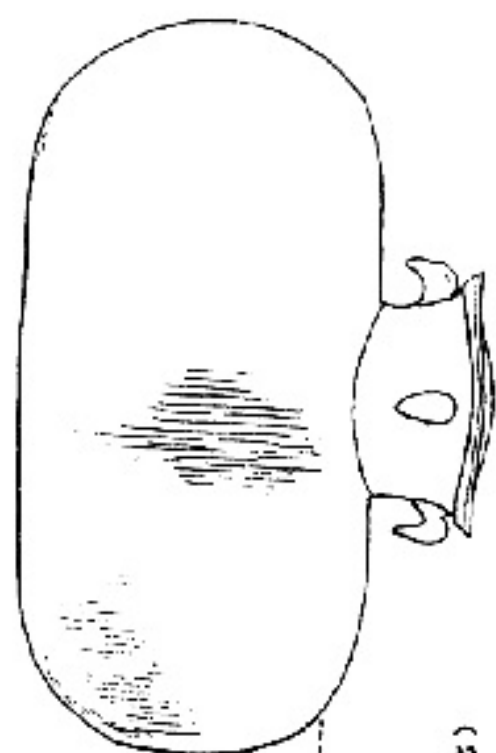
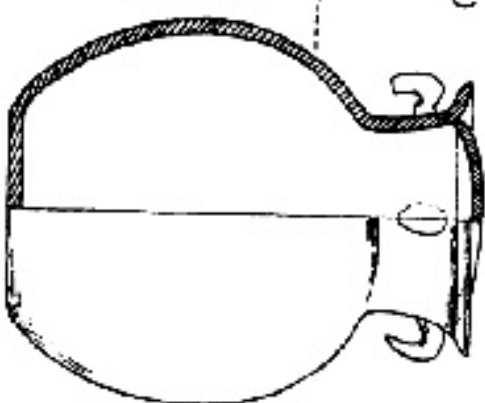
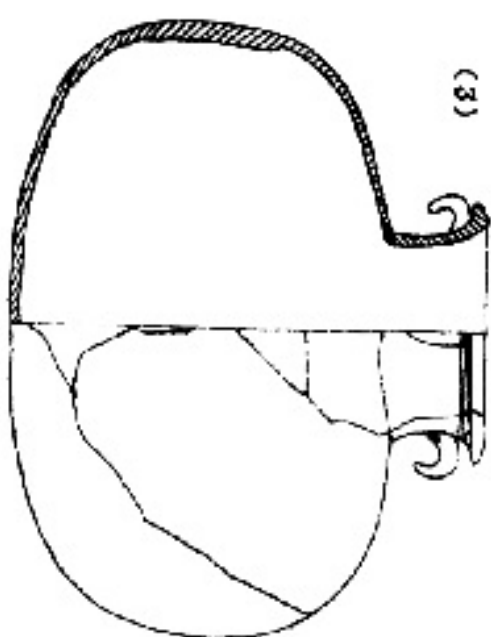
此の土器類は一個の陶壺が槨外西端の中央に存在して居つたのを除いて、槨の東半部に於いて後述の第二乃至第四の鐵釜の邊から、略ぼ其の水平面若しくは其の以下の深位に於いて、銅製容器漆器なざゝ共に出土したこさは、諸鹿、大坂兩氏其他人士の告ぐる處であつて、發見部位の最も明瞭なる遺物の一類に屬する。已に前章の終に說いた如く、本古墳の副葬品は、金屬の裝飾品、容器並に玉類等に於いて特に豊富なものがあり、此等が人目を聳動した爲め、當初土器類が餘り顧みられなかつたこさゝ、塚內積石の倒壞に依つて破碎せられたものが多かつたので、一見其の發見の數量が少ない樣に感ぜられたのは無理もない次第であるが、現存破片を

精査の結果遂に如上の如く多くの個數の存在を確め、中に長頸坩、横瓮、坩、高坏、蓋坏、臺附盌其他各種の器形のあることを知るに及んでは、土器の絶對的數量の必しも少くないことを明にすることが出來る。今ま左に一々の器に就いて記述を試みよう。

(1) 長頸坩 (圖版第八、第二一1) 三箇ある。何れも破砕してゐるが、復原して概形を知ることが出來る。圖示したものは就中最も完形に近い一箇である。高一尺二寸二分、器體は圓く上部に太い頸を附け、其の側面には二條の突帶を繞らして裝飾となし、口緣(口徑五寸九分)には蓋受けの設備が見られるが、之に相應ずる蓋を定め得ない。壺としては普通の者であつて、燒き方は堅く薄手にして青鼠色を呈し、表面滑澤を有し、肩部には白色の吹出し釉が認められる。自餘の二箇の壺も亦た之と略ぼ相似た大さであり特に其一の如きは殆んど同一形であつて、たゞ燒き方の度の稍々低い位が其相違の點である。又た他の一箇は歪みの較や强い器で、頸部は少しく長く、口緣の內反り稍々大なる者であるが、頸側の突帶間と肩部とには波紋刷毛目紋を置いてある。

(2) 横瓮 (圖版第八及第九、第二一2) 內地では俗に俵形壺と云ひ、鮮語で장군 (chang-kun) と云ふ土俗品に近いものである形[8]のほゞ全いもの二箇、破片凡そ六箇分とを

第五圖 (Fig. 5)

金冠塚發見
横瓮圖（梅原）

發見した破片の中約三箇分は器形の半を復原し得るが、他は口部の遺片に依つて其の數を推察し得る程度に止まる。横長い楕圓體の上部に頸を附した大體の形は、凡てを通じて相一致してゐるが、其の細部に至つては九箇の間に一々多少の差違が認められ、大凡そ二類四形に分つことが出來る。即ち器體の著しく長いものと、比較的短くして圓形に近いものとの二に分れ、其の各類中また口緣の鈎狀突起の裝飾三箇のものと、四箇のものとがある。（全數中其の裝飾の明なのは、突起三箇のもの八、四箇のもの三である）圖示したもの、中（一）は頸部飾鈎四箇を有し、器體長手に屬する好例であつて。（高六寸六分直徑一尺強）底部は直くして安定の感を與へる。もと口部には坏樣の簡單な蓋が備つてゐたと見え、出土の際其の破片がなほ器內に遺留して居つた。（圖版第九2）次は器體の圓形に近く飾鈎三箇を有するもので、坏狀鈕を有する內被せの蓋が此の横瓮に伴出してゐる。（高六寸九分長九寸三分）此の器の底は圓くして稍々不安定の傾向がある。（同上1）又た同樣の器形を具へ、環狀鈕を有する內被せ蓋のあるものがある。（圖版第八2）

以上の横瓮は孰れも砂利を多く含んだ粗鬆な土質で造られ、薄青鼠色の陶質を有してゐるが、之を他の陶質器に比べては堅さに於いて著しく劣つて居る。而して此等は其の製作に轆轤が使用せられたことを明示し

てゐる外に、圓手の方は器腹と頸部とを別々に成形して後ち、接合したに反し、長手の方は器體を先づ圓筒的に作り、後ち兩端を被せ蓋的に合成したことは、破殘品に依つて始めて知られた土器製作の過程を窺ふに足る面白い事實である。(圖版第九)

(3)坩● (圖版第八、第一〇、第一一)完形を存するもの九箇と破片六箇分とがある。其うち(イ)は形の最も整つた精品に屬し、高五寸、肩部から腹部を經て底に至るまで豊圓な曲線を呈し、之に開きの大きい短頸を附し、其緣に接して四方に小さい圓孔(徑二分)を穿つてある。是は恐らく紐を通して壺を懸吊する爲めに設けたものであらう。又た器の上半部には綠褐色の吹出し釉を現はしてゐる。(圖版第八(4)第一一(3))次に(ロ)は器腹の橫張りは大くなく、直に太くして濶い頸部に接續したものであつて、此の式のもの二例を數へ、其の完全な一個(圖版第一〇(2))は高五寸三分ある。(ハ)は前者よりも胴部は膨れ頸部は稍々小さく且つ短いものであつて、此の式のものの最も多數を占め、全數中八九個を數へることが出來る。就中完好な一箇(同上(4))は高四寸九分、後に記する圓蓋を伴つて居つた。(ニ)は椨外の西方中央部から發見せられたものであつて、高五寸一分、器腹は底に近くまで膨みを有し、形は前者に似てゐるが稍々歪みを示

してゐる。(同上1)以上は皆な頸部が若干の長さを有する器であるが、(ホ)の類に至つては頸部は非常に短く、器肩から直に口縁の開きに達してゐる。但し其の器腹には或は圓形のもの(同上6)と、或は底に近く急に縮約してゐるもの(同上5)とがある。此の類中完好なものは、圖示の二箇であつて、其の一には皿形の圓蓋が作つて居つた。

此等の壺類は通じて薄手の作法を示し、形の歪んだものも少くない。質は必しも一樣ではないが、大體鐵色を呈したものと、銀泥樣の滑澤を有するものとが相半ばして居る。又た此壺と前記横瓮とに作出した圓い皿形の器蓋は、凡そ三箇を數へたが、何れも直徑三寸二三分、高一寸未滿の何等裝飾ないものであつて、一見壺の底でも切つて作つた樣に見ゆる。併し周縁の節目から察すると、矢張り特に器蓋として製作せられた笠形品とすべきである。而して此等の蓋は膨れた方を上にして、口部に内被せにしたものであることは勿論である。

(4)臺附小盌(圖版第八3、第一〇、第二6第一)一箇。臺部に小破あるのみである。通高四寸五分許、口部は狹まり特殊の口縁部を有しないが、器腹の一方に竪に環狀の耳を附し、捉手の用をなしてゐる。脚は五箇の彫透を穿つたもので、安定輕快の觀

を與へて居る。表面には雲母を塗布して燒き銀泥色の光澤を現はし、作は薄手である。蓋し前記壺中の一箇と共に陶質の土器中精品の一と稱す可きであろう。なほ此類の雲母を塗つて燒いたらしいものは、他の諸品にも多く認められる。(2)

(5)蓋•坏•(圖版第二三 6、7、8) 凡そ十二箇分。孰れも黝黑色を呈し、堅緻の作であつて、中には金銀釉とも稱す可き吹出し釉を示してゐるものもある。凡て口徑三寸三四分高二寸内外の小形のものであつて、器の口緣に受があり、蓋は印籠式になつてる。蓋の頂部には稍々大形の坏狀鈕を附し、これには四方に透孔を穿つてあり、又た鈕の周圍に並行斜線入の山形紋(chevron)を施してある。此等の蓋坏のうち蓋器共に接合して完形を示すもの六箇、その中には製作整美と稱す可きものもある。器のみのものは破片を加へて七箇分を存し、蓋の方は破片二箇分を殘すに過ぎない。なほ此の坏中に漆器片の入つたものがあつたことは、兩者の作出を證するものとして注意す可き事實であろう。

(6)高•坏•(圖版第二二 10、11、第二三 1) 凡そ七箇分。蓋附の者であるが、何れも破殘して完形を存するもの無く、中一箇の如きは僅に蓋の鈕部と器部の破片若干とを殘

すのみである、併し其三箇は坏と蓋とを兩存し、脚部の破片を綜合して略ぼ全形を確めることが出來る程度にある。此等諸器の坏部と蓋部とは、前項蓋坏と殆んど同一の形式と大さ（口徑約二寸六分）とを示して居るが、たゞ其の殊なる點は蓋が素紋であつて、何等の紋樣を加へないことである。脚部は長さ二寸を超へた太形に屬し、四方に濶い透しを有したものであることは、破片から推測することが出來る。製作は同じく薄手であつて、精巧の手法亦た前者と相若き表面には滑澤がある。

(7) **器蓋**（圖版第一二ノ一—五・圖版第一三ノ六—九）約二十箇分、何れも破碎を免れなかつたが、其の形式は上述の蓋坏や高坏の蓋と同一であつて、坏狀透し入の鈕を具へた被せ蓋である。たゞ彼に比して形が大きく、且つ表面に稍々複雜な幾何學的模樣を施してある點を其の著しい特色とする。而して此等の諸品と相應ずる器らしいものゝ破片すら存在して居なかつたことは頗る注意す可き事柄である。併し斯の如き現象は南鮮各地の古墳に於いても往々見られる處であつて、蓋器件存して居つても好く適合しないもの、少くない事實と共に、我々の解釋を要求する問題である。

此等の器蓋は其の大さに於いて一々相同しくない。卽ち最大のものは

口徑七寸二分(第十五號)に達し、最小のものは四寸四分(第十六號)に過ぎないが、其の多數は五寸乃至五寸六分である。坏狀鉢の透孔は四箇のものを普通とするが、時には三箇のものもある。(第六號、第十一號、第十八號、第十九號)又た其の燒方に至つては、固より大體相似たものであるが、中には可成堅緻な薄手の精品と、稍々多く砂利を交へた粗品の二種を認めることが出來る。併し其の最も著しい變化を示すものは、表面の裝飾模樣である。此の模樣は表面にのみ附加せられたのが普通であるが、時には側緣部まで及ぼしたものもないでは無い。(圖版第二號、第四號)模樣の要素は各種の山形紋(chevron)格子紋(lattice)圈紋と、縞模樣との結合、及び此等の複合である。山形紋には複線のものもあり、並行斜線を以て陰影的の手法を行つたものも多い。格子紋は斜格子であり、縞模樣には堅縞と辨慶縞とある。此等が粘土のなほ柔かな際に鋭利な金屬器を以て刻した箆模樣であることは云ふ迄もない。各蓋に於ける此等模樣の適用例は、左表と圖版第一四に示したから、今一々記載するの煩を省く。

	(圖版中番號)	(口徑尺)	(高　尺)	(模　樣)	(製　作)
第一號	1	六六	三七	斜影山形紋、斜格子紋	堅緻濃青鼠色
第二號	2	五三	—	斜影山形紋二段	厚手、堅緻、灰色、僅澤アリ
第三號		四七	—	同上	

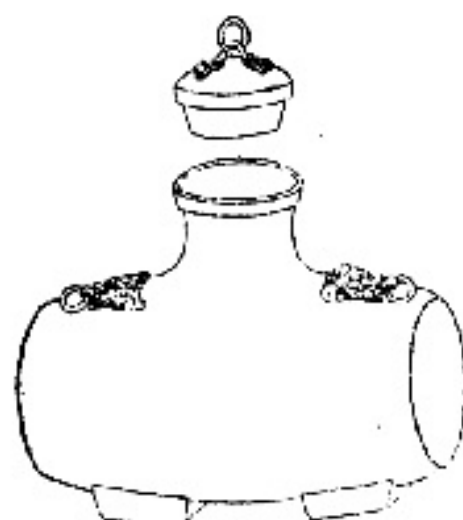
第四號(小破片)	—	—	同上	
第五號	四七	—	複線山形紋、同(側縁)	砂利ヲ含ム、外面薄鼠色
第六號	四六	—	斜格子紋(全面)	堅緻砂利ヲ含ム
第七號乃至第十號	五〇	二三	圓、編結合紋三段 山形紋(側縁)	堅緻、內面吹出釉アルモノアリ
第十一號	五五	—	圓、編結合紋二段	粗造
第十二號	五六	—	圓編結合紋	
第十三號	五二	—	圓、格子編結合紋三段 堅縞紋(側縁)	堅緻灰褐色、光澤アリ
第十四號	六八	二六	堅縞斜格子紋	稍々扁平、薄手
第十五號	七二	—	斜影山形紋	薄手、堅緻、金銀釉
第十六號(小破片)	四四	—	斜影山形紋(全面)	砂利ヲ多ク含ム
第十七號(小破片二)	—	—	複線山形紋、堅縞紋	同上
第十八號、第十九號(小破片)	—	—	斜格子入小形紋	

(8) **自餘陶質器** 以上列擧した器物の外に、鐵釜の口部を被ふた器臺の坏部四箇分がある。是は便宜次節鐵釜の條に述べる。又た器脚の殘缺二箇は、一は壺の臺こ覺しく、(高二寸七分 底徑六寸)多數の透孔を二段に穿つてゐる。他は高坏の脚かこ思はれるもので、(底徑四寸二分)二段四箇宛の透孔を市松形に配してある。

(9) **素燒蓋附椀** (圖版第一〇七—9、圖版第一三二、4) 本古墳發見の素燒土器六箇は凡て蓋附椀の

一型に屬する。何れも受け部のある椀に、外被せ式の蓋を冠した者であつて、蓋は高坏のそれと相似て鈕は坏形である。併しその透孔はない。大さは蓋器通じて三寸內外の小形であるが、六箇中略ぼ形を完存するもの三箇、他は悉く破碎してゐる。此等素燒の器が陶質のそれと伴存することは、南鮮古墳に於て普通見る所であつて、其形式も亦た全く同樣である。(9) たゞ其の一箇(同上8)には轆轤を用ゐた形迹を明瞭に印したものがあることを注意して置かう。

*　*　*　*　*　*

以上記載した土器中、其の大部分を占める陶質の器物は何れも所謂新羅燒と稱せらるゝ類に屬し、又た我が內地の祝部土器、朝鮮土器などゝ呼ばるゝ器物と同性質のものであることは、今更事新しく述べる迄もない。又た其の南鮮、古への任那、新羅地方の古墳に普通な型式を有するものであることも著しい事實である。而して此等の土器の性質に就いては、既に以前の古蹟調查報告中に我々が論じて說いた所であるから、(3) 今ま重ねて之を繰返すことを避けるが、たゞ本古墳に於いては、高い器臺が(鐵釜の蓋として其の一部を利用したものは別として)一も存在しなかつたのに反

して、横瓮の比較的多い事實が稍々注意す可きことである。

此の横瓮即ち俵形壺は我が内地古墳からも割合に數多く發見せられるものであつて、古記に「保止支」なる名を以て呼ばれた器に相當することは、夙に學者の唱道して居る處である。南鮮に於いても全羅南道羅州潘南面の甕棺墳から發見せられて居り、慶州に於いても其の古墳出土の確かな遺品が三四點ある。(註)これは鮮語で장군とも云ふが、又た바장이 (pa-tʃang-i) なる語もある所から、日本の「保止支」と其の語源が相同じいものであるとは、法學博士宮崎道三郎氏の注意せられた所であつて博士は、更に其の形の上から、支那に於いて酒漿を盛る小口大腹の「缶」と名くる器や、史記にある匈奴の「服匿」とも同じ系統の器物であることなし、其の傳來に關して秦人との關係をも說かれた。(註)次で又た文學博士鳥居龍藏氏等は蒙古語、滿洲語にある「ボトン」(boton)も亦た「保止支」と同一語であることを指摘し「ボトン」は別に猪の義を有するから、此の器形は猪皮

第八圖　支那周素缶　(Fig. 8)

で作つた流動物を容れる器物から發生したもので、漢民族の間に起つたものとするよりも、寧ろ亞細亞大陸の東北ウラルアルタイ民族間に發達した器物であろうと云ふ新見解を發表せられた。[7]

我々は固より此の兩博士の所說に贊成するものであつて、支那人の缶(fou)なるものは、既に土器として摸倣せられた俵形の容器を稱したもので、此の語も或はウラルアルタイ族の語と關係あるものであろうかと想察するものである。併し又た一方には此の形狀の土器は、廣く亞細亞から歐洲人の所謂「東方」(Levante) と稱せられる西亞地方にも行はれ、其の革製の水袋 (water-skin, wine-skin) の遺形であることも人々の認むる所である。[8] 而して此等西亞のものまでがウラルアルタイ族の影響によるものであるか否かは、なほ將來の研究を要する所であるが、斯の如き皮袋[9]は獸皮を豊富に所有する牧畜人種間に尤も自然的に發生するものであることは推察に餘ある所である。なほ歐洲古代の玻璃器などに屢々見る樽形壺 (barillet, Fasskanne) なるものも、其の器形は之と親緣あるもの

第九圖 ポムペイ及ヘラクラネウム發掘皮製水袋圖 (Fig. 9)

日本及朝鮮發見橫瓮

第六圖 (Fig. 6)

朝鮮及日本發見角形土器

第七圖 (Fig. 7)

(1) アッシリヤ國センネヘリッブ王宮址浮彫天幕内皮水袋懸吊圖（伯林博物館藏）

(2) 日本古墳發見皮袋模造壺

(1) 大和柳本

(2) 美作三保

(3) 尾張羽栗

第十一圖 (Fig. 11)

であることを注意しなければならぬ。[10]それは兎に角この俵形の横瓮と提瓶(pilgrim bottle)なるものは、世界的に擴がつて居る二つの特殊的器形である。但し此の提瓶は日本に於いては非常に豊富であるに係らず、朝鮮に於いては羅州潘南面發見のもの丶外、其の發見を多く聞かない樣であるのは何故であろうか。

次に說及して置かなければならぬことは、器身に添はない單獨の蓋に關する問題である。已に述べた如く、器と好く適合しない蓋を配したもの、若しくは孤立の蓋の存在は、南鮮古墳に於いて屢々見られる所の事實であつて、是は我々をして或は單に副葬品の數量を豊富にする爲めに、無造作に陶器製作處から供給せしめたものであるとも考へしめるが、[11]而も斯の如き孤立の蓋が製作處に存在する事は、蓋のみを別に製作する事態の存在を前提としなければならない。(器蓋を適合せしめて製作するものは勿論あるのであるが)今日吾々日本の社會に於いても、鐵鍋などには木蓋を使用し、之を別々に購入するのが普通であると同じ樣に、古代に於いても蓋は器と相離れても供給せられたことを想像することが出來る。金屬容器には木蓋が最も好適であるが、次節鐵釜の場合にも見る如く、陶蓋も

亦た金屬の共蓋よりは熱を導くことが少なく便利である。それ故古代に於いて陶蓋は屢々蓋のみとして獨立の位置と價値とを有して居つたものと考へて差支ない。本古墳の孤立蓋が果して、金屬容器若しくは木器などの蓋として實際役立つたものであるか否かは別問題として、土器の獨立した一品目として副葬せられたものと見るを穩當とする。特にあらゆる副葬品が精選せられ、什器裝飾品悉く其の最良のものを蒐めたかの如く見ゆる本古墳に於いて、土器のみが數量を充たす爲めに無造作に孤立の蓋を問に合はせたとは考へ難いに於ては尙更のことである。

併し本古墳の副葬土器は、以下說明して行く他の各種の遺物に比例して、決して優秀なる精品とは云ふことが出來ないばかりでなく、却つて金屬器、裝飾品等に於いては遙かに本古墳よりも劣つた他古墳の土器に較べても、何等特殊の製作を示さないことは顯著なる事實である。是は果して本古墳の被葬者の位置と境遇とが、土器よりも金屬器を重んぜしめ、土器はたゞ一般普通のものを以てしたものと解釋す可きで、あろうか。或は又た時代の變遷などゝ關係あることであろうか、此等は趣味ある問題として、其の論考を後章に讓ることゝする。

【註】

(1)總督府編「朝鮮語辭典」(大正九年刊)に據る。同書に見れた圖の如く鍑形の一方扁平なるものは「朝鮮古蹟圖譜」(第三)一二四〇圖に示されてゐる。(本冊第十圖1)

(2)斯の如く土器に雲母を塗つて燒くことは、現今に於いても朝鮮に於いて行はれてゐる。(末松保和氏の談に據る)

(3)例へば谷井學士及び梁々の發掘した昌寧校洞の諸古墳の遺物等は其の好例である。

(3)「大正七年度古蹟調查報告」中「慶尙北道慶尙南道古蹟調查報告」第四編第一章第一節、及び「大正九年度古蹟調查報告」第一冊「金海貝塚調查報告」第二章第四節參照。

(4)今は何れも慶州古蹟保存會の陳列室に藏してゐる。就中同郡川北面東山里發見の一は金冠塚出土のものに最も近い外形を示してゐる。又朝鮮には積石の長さ數寸に過ぎない小形品もあることは珍らしい事實である。

(5)ゲール氏「韓英字典」(Gale, Korean-English Dictionary)には、an earthen jar とある。

(6)宮崎博士「日韓兩國語の比較研究」(史學雜誌第十七編第七號)「再び服匿の事を論じ蒙古語と匈奴語の比較談に及ぶ」(同上第十八編第七號)。

(7)白鳥博士「保止支に就て」(史學雜誌第十八編第一號)及びなほ白鳥博士「蒙古民族の起原」(同上第五號)に於ても同樣の說が發表せられてゐる。

(8) Munro, Prehistoric Japan (Yokohama, 1911) p. 338.

(9)英語 bottle 佛語 bouteille は拉丁語 butta から出たもので、蒙古語、滿洲語の butun に近い。それは別として大英博物館の「イリアッド」寫本にも山羊皮の水袋のことがあり、埃及人も亦た皮袋に水を容れた其の種々の形は遺物の上に示されてゐる。ヘロドトスにも獸皮を縫ひ四肢を其儘にして注水孔に利用し、之を askos と稱したことが見えてゐる。希臘羅馬人も獸皮の水袋を用ゐ、希臘土器中所謂アスコス (askos) なるものも畢竟獸皮の袋から出でたものである。今も南歐の或地方では現に之を使用して居り、ヘブライ人の之を用ゐたことは聖書にも屢々見えてゐる(Hastings, Bible.)。なほスタイン氏は支那土耳其斯坦の Astana 附近で皮袋形の小陶壺を獲たと云つてゐる。(Stein, Serindia p. 140)

(10)提瓶も實は瓢簞と錍類器の器形で同じく皮袋から發達したものとも思はれる。支那の銅器にある昇徵なるものは、此の提瓶の形から來たものである。日本古墳發見の皮袋の縫目を現はした瓶は恰も其の中間の形で、而かも皮袋から起源を發したものであることを明示する珍らしい遺物である(第十一圖2)

(11)濱田、梅原「慶尙南道北道古墳調查報告」(前揭)二六頁參照。

第二節　鐵　釜　（圖版第一五、第一六）

鐵製の容器類は釜を唯一の品目とする。是は土器の百箇に近く金屬製容器の數十點に上るに比べて、僅に四箇を發見せられたに止まるが、その形の大きなことゝ、赤鏽の著しいことに依つて、發見の當初最も衆目を惹いたので、從つて出土の位置、相互の關係なども正確に知ることが出來、槨の東半部に於ける副葬品配置の基準をなして居つた觀がある。

此等四箇の鐵釜は何れも鏽化破碎して、現在では一も完形を存しないが、中に就いて其の一箇は器の殆んど半を遺存して、全形を窺ふことが出來、他の一箇は破片を接合すると略ぼ形を推すことが出來る程度にある。然し破碎の太しい自餘の二箇も其の破片から考へると、他の二箇と殆んど同じ形制に出で、四者共に其の大さ迄も略ぼ同一のものであつたらしい。今ま器形の約半を存した一箇（圖版第一五）に就いて、其の製作を見るに、割合に厚手四分の鑄造であつて、壯重の感を與へると云つて然る可く、胴張りのある稍々平たい形の器體は最も廣い處で徑約一尺六寸を測り、此の部分に廣さ一寸許りの所謂鍔が附けられて居る。器底は圓く、肩部には三條の

突帶を繞らし、此の部分に雙鐶を附し、短直な頸の上に甚だ濶い口を開いて居る。〇三徑一尺五分 即ち大體の形は後世の茶釜と殆んど異なる所を見ないが、たゞ本器にあつては、底の三方に脚を附著してゐるのを著しい特色とする。脚は太くして短かく、先端稍々細くなつてゐる。器の總高さは約一尺ある。

次に器形を復原し得る他の一器も同形であつて、器の高一尺二三分、胴部は鍔を加へて徑一尺七寸、脚の長五寸、器底から挺出してゐることは僅に一寸であるから、此等の釜脚は單に据置く際の安定を保つ爲に附けられたものであつて、下から煮沸する際に役立つ爲としては餘りに低過ぎると思はれる。但し或る釜に於いては稍々長く、六寸五六分に達するものもある。圖版第一に示した釜の圖は、小川敬吉君が破片によつて復原したものであるが、其の三脚と環耳との相互的位置はこれを究めることが出來なかつたので、適宜に描いたものである。

此等の鐵釜は孰れも獨自の蓋を有せず、出土の際皆な其の上を覆ふに大形土器甕の坏部を以て、蓋の代用をなして居つたことは、已に前節に記した通りである。此の土器は堅緻な陶質のものであるに係らず、釜以上に大破して、現在其の舊形を復し得るものは僅に一箇丈けである。併し四者共に其の大さ形制等相類似した堅緻精巧な陶製であつて、たゞ其の紋様を殊にして居るのみである。圖示した一箇（圖版第五之2）は前記二箇の釜中の後

者に屬するもので、其の外開きの大きなのを特色とし、脚の周圍に透孔十箇を穿つた器臺の坏部を利用したものである。(約高九寸口徑一尺二寸)外側面には三ヶ處に複成突帶が繞らされ、其間に斜格子目と半圓喰違ひの一種の連續紋が規則正しく刻せられてゐる。其の二は稍々大きな破片を存し口徑は前者より少しく大きく思はれる。其の側面の紋樣は半圓連續紋帶を二重にしてある。其の三と四との紋樣は格子目と複合鋸齒紋とから成立つたもので、破片は少ないが、製作は稍々薄手に屬するものと思はれる。今ま其の一には表面に雲母の如き光澤を表はして居る。此等の器蓋は凡て出土後洗滌せられたから鐵銹銅鏽の外今何等の附著物を見ないが、鐵釜それ自身の口部は、肩から鍔の邊に亘つて樺の皮や漆器片が可なり多量に附著して、槨內に於ける共存遺物との關係を物語るものがある。

さて此等の釜は大坂氏に從ふと、靑銅四耳壺の下位、地下二尺許の處から發見せられたと云ひ、如何なる狀態に槨內に置かれたかに就ては、諸鹿氏の覺書に詳である。それに據れば槨の東端に近く、南北に鐵釜二箇が一尺五寸の距離を以て相並び、又た其の北の釜から西南西への一直線上に各二尺の間隔を以て、他の二釜が存在して居つたが、西端の釜は稍と相距

ることと僅に一尺であつたと云ふ又た各釜は何れも略ぼ同一水平面上に置かれて居たが、東北隅から第二の釜のみは半ば横臥の狀態で見出されたと云はれる。本報告では記述の便宜上最初に東北隅で發見せられた釜を第一號として、順次西方へ數へ、東南隅の者を第四號と呼ぶことにした。併し此の各號の釜が現存遺品の孰れに當るかと云ふことは、其土器蓋との組合せと共に、多くは之を明かにすることの出來ないのを憾とするが、諸鹿君に從へば、第四號釜は四者中最後に見出されたもので、特に注意を加へて發掘し、器蓋共に略ぼ形を存して居つたと云ひ、其蓋は格子目と半圓喰違の連續紋のあるものであつたとの事であるから、上に代表的のものとして記述した釜と蓋とが即ち此の第四號釜に當るものとして、略ぼ誤がないと思ふ。此の反對に第一第二の釜は發掘の最初不用意に掘り返されたものとすれば、今尤も破碎の太しい二箇に擬定す可きが適當らしい。

鐵釜の發見位置と共に擧ぐ可きことは、釜其物の埋沒狀態である。即ち件の第四號釜の上部に土器の蓋を被せてあつた上に、釜の外面には絹布等の粉末化した稍々厚い層があり、其の中から無數の小玻璃玉や漆器片金製の小瓔珞、樺の皮に斜格子目を刻したもの、或は金銅の覆輪などを出

し、更に其の上は半球形に刳つた厚さ四五寸の木材を以て被てあつたと言はれ、此の所見は諸鹿、大坂二氏共に一致して居るのみならず、諸鹿氏は之によりて他の三釜も亦た同樣であつたことを察することが出來ると話された。

右の漆器片や綾布の類は、既に記した如く、釜の肩部に今なほ附著してあるのは事實であるが、刳つた木材を以て之を被せてあつたと云ふことは、果して之を以て當初より故意にやつた特殊の設備とすべきであらうか。之れに就いて大に疑問を生ずるのである。釜蓋と木材との間から出た上記の遺物は、後節に述べる通り、冠帽の類や、裝身具、漆器などであるから、此等を特に釜の外被せの間に置くと云ふことは考へ難い上、我々は現存する多量の腐朽木片中に、特に刳りを加へたと認む可きものを檢出し得なかつた處から推察すると、鐵釜の上にあつた木槨の部分が落下した際、釜の附近にあつた遺物が蓋の上に散亂した爲めに木材の下になつて、右樣の狀態を呈して出土するに至つたと解釋するのが寧ろ穩當ではあるまいか。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊　　＊

釜は所謂烹飪の器であつて「古史考」にあるが如く、支那に於て黃帝始て之を造るこ云ふ傳說は信じられないにしても、斯の如き本源的の器物が頗る早く人類の間に發生した事は想像に足るものがある。此類の釜が已に漢代に多數に使用せられたことは、かの武氏祠の畫象石の庖廚の圖にもあり[1]漢六朝頃の明器の瓦竈が支那本土滿洲などから發掘せられるこごによつて容易に察せられる。[2]而して鐵が漢代に廣く使用せられるに至つた結果、從來銅器や土器で作られた品物迄、鐵を以てするこごゝなり、遂に鐵釜の製作せられるに至つた狀勢は最も自然のことである。我々は釜のみならず鐎斗の如きものをも鐵で作つた實例に接するのである。[3]併し是等漢六朝時代の釜は我々が今日米飯を炊くが如く、直接に米を煮たものではない。三代に於いては甑甗を以て釜中の水を煮沸して其の蒸氣を以て、釜上に置かれた甑(各種の材料を以てした)中の穀物を蒸したのである。(勿論時には單に水を煮沸する爲に使用せられたこごもあるであらう)それ故普通は其蓋を必要こせず、又た蓋を必要こしても、鐵製の蓋では早く熱して、手を以て取扱ふに不便であつたから、斯の如く土器を利用し、或は木蓋を以てしたものご考へられる。[4]

又た支那では釜の屬に鍑なるものがあり、錡なるものがある。鬵の如きも器形に於いて釜と相似てゐる。「楊子方言」には北燕朝鮮洌水の間之を鍑或は錪と云ひ、其他各地の方言なるものを擧げてゐるが[5]此の錡なるものは一方詩經の召南采蘋に「維錡及釜」とあり、其の註釋者は足の無いのを釜と云ひ、三足のあるものを錡と云ふとしてゐる。[6]朝鮮で古く果して鍑、錪と云ふ樣な發音をしたか何うか分らないが、此の金冠塚發見品の如きは釜中特に錡と稱す可きものかも知れない。若し又た江淮陳楚の如き南方支那に於いて實際三足の釜が行はれて居つたとすれば、それとの關係を揣摩す可きものであるかも知れないが、我々は今日之を確にする丈けの資料を有しない。なほ釜に就いて注意を惹くことは、朝鮮語で大きな釜を「カマ」（가마即ち가마솟の略）と云ひ、國語の「カマ」と全く同一であることである。之に就いては宮崎法學博士の詳しい考証があるから、それに讓ることにするが、[7]日鮮古代文化の交渉共通を語る面白い一例である。

併し鐵釜の類の古墳から發見せられたことは、從來日本内地では殆ど其類例を聞かない處であるが、南鮮地方に於ては慶南梁山北亭洞の古墳から本古墳の場合と同じく土器臺の受け部を以つて蓋として出土した

だ釜が鐶と脚とを缺いてゐるのを殊にしてゐる著しい例をはじめ、昌寧校洞の第十一號墳からは、平底の高い釜を出し、慶州普門里の積石塚からは二釜を發見してゐる。(8)而かも此の釜を出した古墳は何れも特殊の遺物を藏した處から考へても、當時に於ては一般社會は寧ろ土器等を以て之に間に合せ、今日寧ろ普通に行はるゝ鐵釜を使用したのは、富貴な人に限られて居つたものと推察せられるのである。而して本古墳にこれを四箇迄副葬してあつたことは、他の黄金寶飾の多數存在して居つたことよりも、或は却つて被葬者の身分を誇稱するに足るものがあつたと言ひ得るかも知れない。(9)

【注】

(1) Chavannes, La sculpture sur en pierre au temps des deux dynasties Han (Paris, 1893) Plates IV. XIX. XXIII 等に見えてゐる。なほ「石索」等參看。

(2) 瓦竈に關しては Laufer, Chinese Pottery of the Han Dynasty. (Leyden, 1909) pp. 79-88. 濱田「支那古代の泥象」(國華第二百五十九號)參照。

(3) 京都帝國大學文學部藏品(本冊第十五圖4)

(4) 今日朝鮮では長い柄の附いてゐる鐵鍋を用ゐて居る。

(5) 漢の揚雄の「方言」(卷五)に「鍑、北燕朝鮮洌水之間、或謂之錪、或謂之鉼、江淮陳楚之間謂之錡(或曰三脚釜也、音技)或謂之鏤、吳揚之間謂之鬲、釜自關而西、或謂之釜、或謂之鍑」とある。又た「說文」には錡を「三足釜也」と解してゐる。

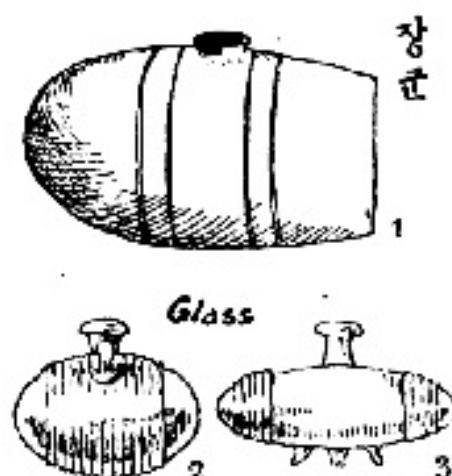
(6) 召南采蘋の章に「于以湘之、維錡及釜」、毛傳に「錡釜屬、有足曰錡、無足曰釜」と云ひ、釋文に「三足兩耳有蓋、初饗之器」と解してゐる。我が「類聚名義抄」には錡を訓して「アシナヘ」とある。

(7) 宮崎道三郎博士の「日韓兩國語の比較研究」(史學雜誌第十八編第四號)に、國語「カマ」は恐らく此の鮮語「カマ」から來たもので、此の鮮語は亦た支那あたりから輸入せられたものであらうと「太平御覽」に釜を鬴釜也とある事を例證してゐられる。

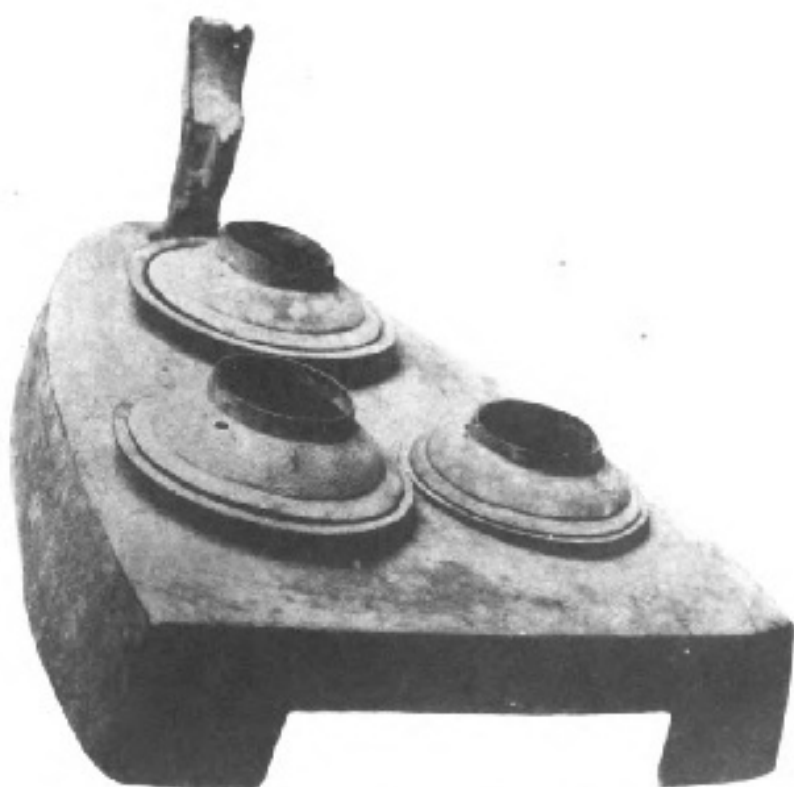
(8) 慶州普門里積石塚發見品に就いては、原田淑人君の「大正七年度古蹟調査報告」中の報文を見よ。昌寧及高靈の古墳に就いては未だ其の報告書の出版を見ないが、前者は大正七年十一月

我小川兩君の發掘に係り、後者は大正八年二月谷井氏一行の調査したものであつて遺物は何れも總督府博物館に藏してゐる。

(一)朝鮮に於いては新羅時代以後高麗時代の鐵釜の類の寺院其他に藏せられてゐるものが少くない。例へば忠北俗離山法住寺(朝鮮古蹟圖譜第九)、忠南禮山の大釜(現總督府博物館藏、總督府博物館圖鑑第二)の如きその著例である。

第十圖　朝鮮現用樽瓶
歐洲樽形硝子壺

(1) 支那山東武氏祠畫像石釜圖

(2) 羅振玉氏藏明器銅竈

(Fig. 12) 第十二圖

第三節　金屬製容器　(圖版第一七—第二七)

金、銀、青銅等を以て作られた各種の容器類は凡て五十點程の多數に上り、其の殆んど全部は槨の東半部鐵釜の附近、殊に第二第三の釜の間から大部分出土したと報道せられてゐる。此の金冠塚に於いて、斯の如く金屬製容器が多數存在して居つたことは、頗る顯著なる事實であつて、此等の器物には椀、坏、壺などの普通飲食の器用が大部分を占めてゐるが、中には鐎斗、刁斗の如き特殊の形器をも含んでゐる。

(1) 青銅蓋附四耳壺 (圖版第一七乃至第一九) 是は青銅製の鑄物であつて、第一、第二及び第四の鐵釜間の略ぼ中央部に當り、其よりも一段上の水平面に於いて厚さ二寸の木板上に置かれたまゝ見出されたものと云はれる。出土の際蓋、口緣、底などを破損したが、全形は復原するに充分である。器は高約一尺五分、略ぼ卵圓形を呈した罇とも稱す可き器であつて、頸部はクビれて、口緣に至つて再び開いてゐる。(口徑約七寸) 底は一文字の平底で、鑄口と思はれる方形の小孔を後から充塡したが如き痕を留めてゐる。肩部には稍々下目に前後左右四箇の平たい耳を附けてあるが、(1) 其一には布紐の殘つてゐるのが見

ねる蓋は外被せの盛り蓋で、(径七寸四分 高二寸七分)寶珠形の鈕を冠してゐる。蓋器共に厚手の製作であつて、葬儀用の假器ではなく、形もよく整ひ、陶壺と略ぼ同じ形式である。たゞ蓋は銅器として特殊の様式を發揮して居ると云へる。

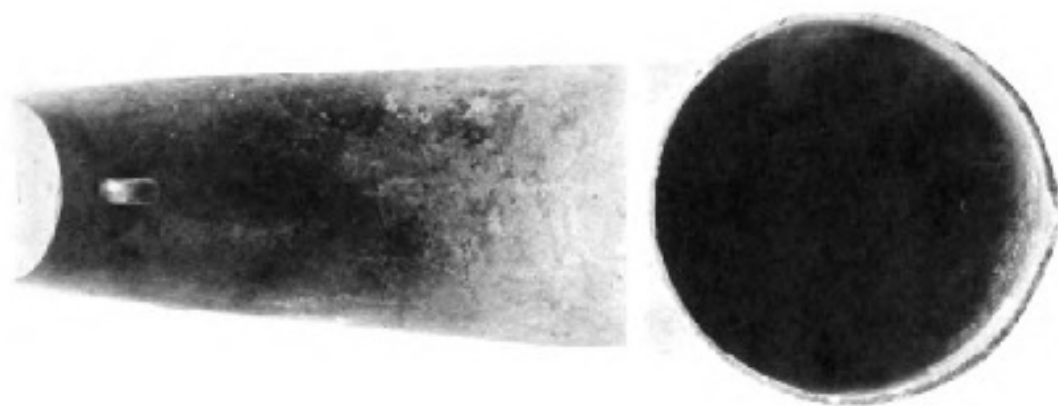
(2)**金銅蓋附高坏**(圖版第二〇2 參照版第二四5)是は前者に反して薄い青銅板を打出して造つたものであるが、必しも假器ではない。各部多少の破損あり、殊に脚部は殘缺してゐるけれども、全形は復原することが出來る。坏部は徑約六寸の稍々深手(深三寸)の型式に屬し、腹部に二條の複帶を繞らし、短冊形の耳三箇を鋲留としてある。脚は二段六箇の透孔を市松様に穿つた外開きのものであつて、坏部にカシメ附にしたものである。蓋は坏部と殆んど同高の半球形を呈し、外被せの形式であつて、頂部には大形坏狀の鈕を鋲を以てカシメ附とし、之には四箇の透孔を現してゐる(高三寸三分)此高坏が陶製の器と全然其の形を通有して居ることは云ふ迄もなく、たゞ耳を附加してある點を聊か殊にするのみである。併[2]し此の装飾的加物によつて、全體の形に變化を與へ、薄手金屬器として失つた莊重性の代りに、輕快優美の感を呈せしむることになつた。今ま通體青綠の鏽を以て被はれて居るが、なほ隨處に美しい鍍金の色を留めて居る。全高約七寸五分。

(3)金銅角形尊(圖版第二〇、圖版第二〇ノ一)器は牛角の尖頭を切斷した如き形狀をなし、一方稍々細くなつてゐる。全長九寸强、薄い銅板(厚約九厘)を曲げ合せ、上邊の合せ目には別に約一寸幅の板を鋲留として被覆してある。口部(徑三寸)と底部(徑一寸九分强)とは切離しの緣であるが、底には別に厚い木栓(厚六分强)を充塡し、其の上に元と七箇の鋲を以て銅板を張つてあつたが今ま、之を喪失して居る。蓋は後述の金銅盒のそれと同じ作りであつて、上に鐶附三葉座を有する半球形に近いものである。今ま通體青鏽に被はれ、殆んど金色を見ない。

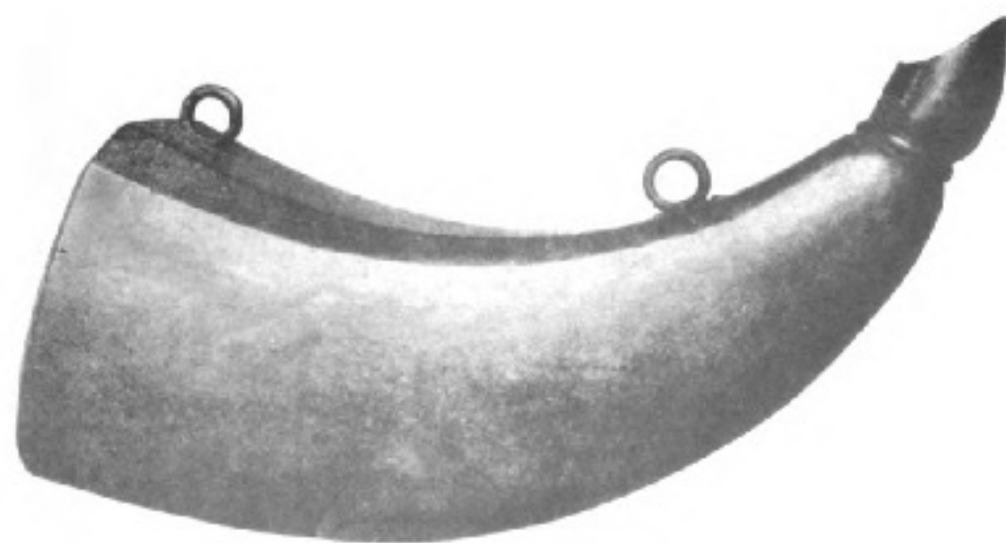
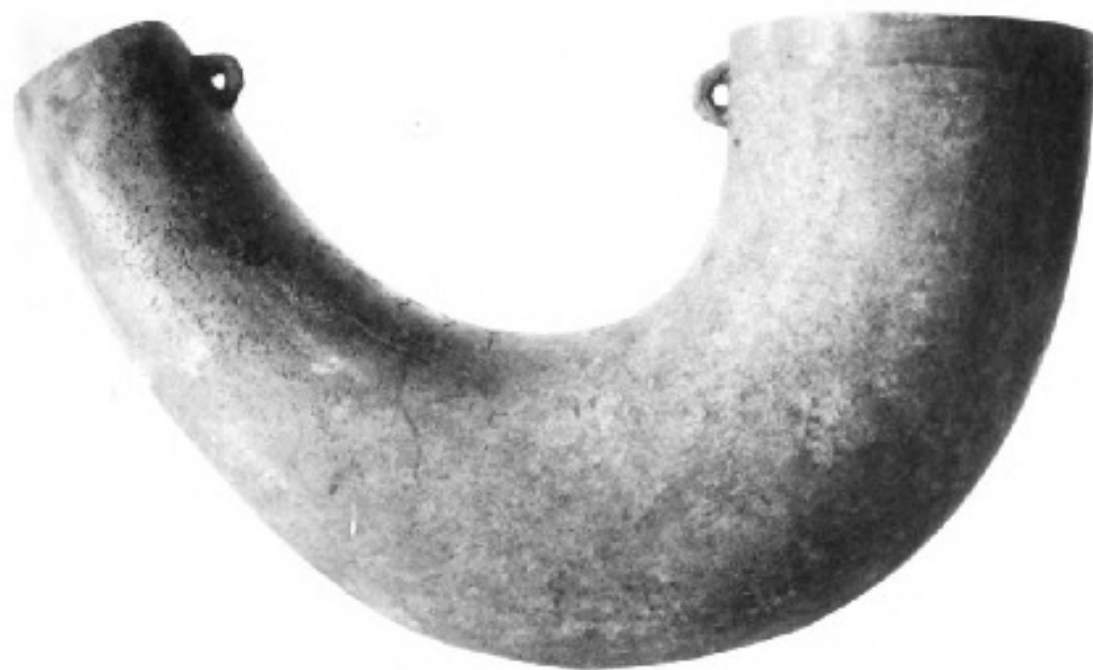
此器と殆んど同形の而も更に精良な銅器が、大正八年二月谷井委員の調査した昌寧校洞第七號墳から發見せられて居るが、(圖版第十三ノ一)朝鮮に於いても珍らしい遺物に屬する。併し陶製の獸角形の容器に至つては既に慶州の古墳からも發見せられ、內地でも若狹其他から出て居るのみならず、支那古銅器中の兕觥なるものとも亦た同類である。元來酒器等に獸角を用ゐることは、希臘の「リユトン」(rhyton)羅馬の「コルヌコピヤ」(cornucopia)にも其の形を存し、支那の觶、觚等の文字の成立が之を示す如く、世界各國に於いて屢々見る處であつて、畢竟之を各種の質料を以て模作したものに外ならない。併[2]し一方には又た斯の如き大形の角形器は先きに横穴の條に述

べた獸皮製水袋から發生したとも考へられる。正倉院御物にある漆胡樽(3)なる木器(第十二圖2)の如きは正しく此の角形尊と親緣あるものであるが、其先端を括つた形は、皮袋を模したものなることを示してゐる。アッシリヤのセンナヘリブ（Sennacherib）王宮發見の浮彫に見ゆる天幕内に懸吊した獸皮の水袋と對照して見れば、直に之に氣付くであろう。(第十二圖3)而して我々は金冠塚發見の角形尊は寧ろ此皮袋の方の系統に屬するものと考へたい。

(4) **青銅刁斗**(圖版第二十一(3)、圖版第三十三)第二第三兩釜の間から見出されたと云ふ。器體は椭圓形を呈し、腹長徑約四寸(口長徑二寸五分)高さ三寸七分、口緣部には銀の覆輪を加へ、器體には椭圓の短徑の方向を貫いて柄が造り出されてある。柄の插込みの筒部(長一寸八分)の根には十六葉の蓮瓣を毛彫にし、柄端には木心が今なほ遺存し、木柄と金物との接續部の上には連鎖紋を打出した銀板を纏つてある。更に柄部が器體を斜に貫いて他端に當る可き處には、器の外側に銀の圓座を鋲留めにして裝飾を加へてあることは、元來木柄が器體を貫いて他側に及んだ時の原始形式を遺留した面白い手法である。

此の器は固より酒水の如き液體を汲む柄杓であり、其形は瓢の如き果實から來たものと思はれるが、(4)特に柄の附著に意を用ゐ、各部に銀を以て

(1) 朝鮮昌寧校洞古墳發見角形銅器(上面及側面)

(2) 正倉院御物漆胡樽

第十三圖 (Fig. 13)

加飾したことは其の特殊の精品であることを示し、又た蓮瓣の模様に至つては、佛教藝術と關係あるものであることは云ふ迄もない。なほ此器の內底の邊には網代形の編物が附著し、柄金物の附根蓮瓣の邊に、絹布らしいものが附いて居り、器內に紋様ある漆器の斷片が這入つて居つたことは、其の存在場所に基く事情に依るものである。

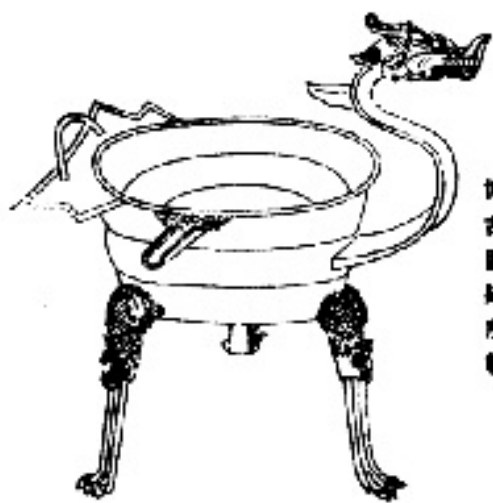
(5)青銅鐎斗（圖版第三五乃至第三七） 前者同様第二、第三の釜の中央にあつて、柄を東北に向けて居つたと云はれる、實に金屬製器物中の最優品であり、器脚の一と柄部と蓋の蝶番とが折れて居つた外、全く完好の狀態で發見せられた。器は略ぼ球形を呈し、獸脚形の長い三本の脚(蹄底の形狀まで彫り詰めてある)を張出し、躰の中央には釜に於けるが如き廣い鍔緣を繞らし、一側に龍首の流嘴を具へてある。口部は小さく、之れに蓮瓣を浮彫にした蓋を附し、一方を蝶番によつて器體に接續してあるが、蓋の頂の子房に當る部分は四角形の低い鈕狀のものが現はされて居る。元と或は其の窪處に何か青銅製若しくは木質のものを嵌めてあつたかとも思はれる。柄の器體に接する部分は龍首が椽を噛んでゐる形を象り、其首から龍身が延長し長い柄となつて居るが、是は直角に二度屈折して尖端に達してゐる。而かも龍

の口端と器體と接する部分には、足を取込めて、特に別の座金を器體から造り出し、柄と器との結合を堅牢ならしめてゐるのは、用意周到なる手法と云ふ可きである。此の柄端には美しい忍冬葉形が矢張り龍口から舌を吐出してゐる如くに意匠せられてある。而も尤も注意すべき事は鍔椽の上面と柄の表裏側面の三面とに、精巧なる毛彫を以て、各別種の唐草模樣を裝飾してある事であつて、其詳細は小場君の作成に係る圖面に讓る事とする。此器總高五寸二分五厘、柄長一尺一寸餘、要するに此一器に三の龍首を附してあるのは、聊か繁雜に過ぎた感はあるが、三首とも各々變化を加へて其單調を破つてゐる。併し柄を長くしる爲に已むを得なかつたにせよ、器體輕きに失し、容易に顚倒する不安定さは、到底製作上の缺點と云はなければなるまい。又た小場君の說に據れば、各部の裝飾模樣は其優美巧妙なるにも似ず、彫法甚だ軟弱淺細に失して、彫刻の手法や鑿痕との權衡を得て居らぬと云ふ點も考ふ可きである。製作には恐らく蠟型を用ゐて鑄造したものであらう。（以上多くは小場君の教示に據つたものがある。）

此の器と略ぼ同形のもので、たゞ蓋を缺いた單形の靑銅器は、既に昌寧校洞の古墳から發見せられ、なほ稍々殊つた無脚のものも、同地古墳から

出土してゐる。又た支那河南省洛陽附近の新安縣などからも、昌寧發見の品と酷似のものが發見せられて居ると同時に、[5]一方之に類似の形狀を有する所謂柄香爐なるものがあつて、其の唐代の作品として確實なるものを、吾々は正倉院御物や法隆寺の寶物中に於いて二三ならず見るのであるが、[6]金冠塚發見品に於いては、器蓋を備へ、又た之には何等の透孔も穿たれてゐないのみならず、却つて流嘴を有して居ることは、香爐の用に役立つたものとは思へない。然らば果して何と稱す可き器物であるかと云ふに、かの漢代の銅器にある鐎斗なるものに屬する器であらう。[7]鐎斗は支那の圖錄や現在の遺物、殊には法隆寺に傳へられる上宮太子所用の油差しと稱せられるものによつて見る如く、[8]通常蓋無くして平鼎に似、一方に流嘴を具へ他端に龍首形の柄を附し、且つ三脚を有して居る。其用途は溫器と云はれて居るが、今日朝鮮に於いても用ゐられる酒煎子(주전자)と同樣のものであり、水指し、油差し等にも勿論役立つのである。それで此の金冠塚の鐎斗の如き形式が、漢代の鐎斗の原形から離れて、唐代の柄香爐に近い中間形式を示して居ることは、其の器形の發達順序をも明示する面白い事實であるのみならず、其の蓋にある蓮華の裝飾と、柄に彫刻せられた

忍冬唐草などの模樣は、其に六朝時代に於ける西方佛教藝術の影響を示すものとして、本古墳の年代の考定に最も重要なる資料となるのである。なほ先に記した新安縣發見の遺物と伴出したものに無脚の器があつて、それには本古墳の鐎斗に見る樣な精巧な忍冬唐草模樣と人物とが刻してあるのも、本器の年代性質を考へるに傍証とす可きであろう。要するに此の鐎斗は本古墳の青銅器中、支那傳來品として最も確實なるもゝ一であることは、誰人も疑問を挾まぬ所である。

(ホ)金・銅・製・盒(圖版第二三ノ3―7 圖版第二四ノ6)凡て十四個分を遺存するが、其のうち形の完好なものはたゞ一箇で、略ぼ全形を見る可きものが四箇、他は破碎して其の一箇の如きは蓋を喪失して居る。何れも薄手の金銅製品であつて、今は青緑の銹に被はれて居るが、隨處に鍍金の面影を止めて居る。大きさは各個略同樣であつて、圖示した完好なものに於いては、器の口徑約三寸三分、蓋は外被せの印籠式、頂に三葉座の鐶を鋲留にしてある。全高約三寸八分、格好は整齊と稱す可きである。此種金銅の盒は原田氏の發掘した普門里積石塚や、谷井氏調査の昌寧校洞古墳からも見出されて居るが、此等は本古墳のものに比して却つて製作精巧であり、鈕は寶珠形である。

1 考古圖所載

2 博古圖錄所載

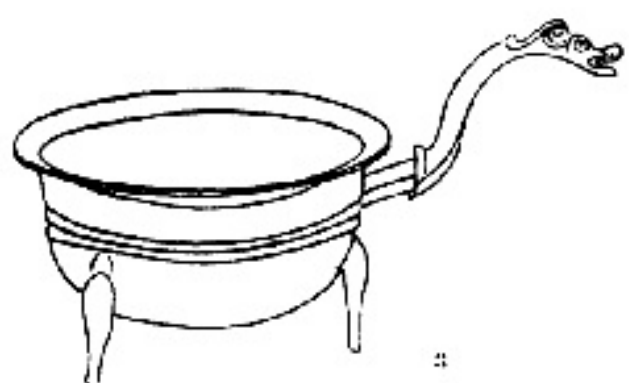
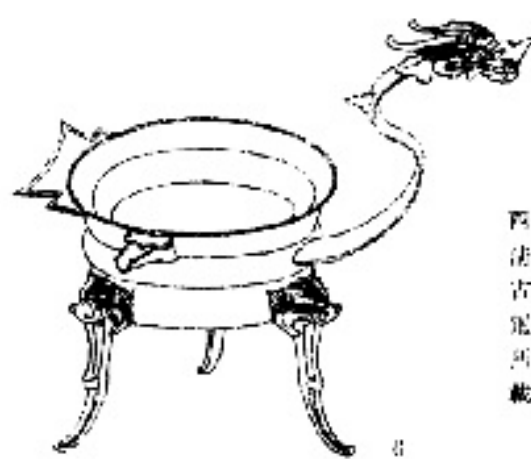
3

4 陶齋吉金錄所載器身銘

5 西淸古鑑所載

6 西淸古鑑所載

第十四圖 支那發見各種漢式鐎斗圖 (Fig. 14)

(1) 朝鮮昌寧古墳銅製品

(2) 支那新安縣銅製品

(3) 法隆寺藏銅製品

(4) 支那鐵製品

(5) 滿洲羅家屯土製品

第十五圖 各種鐎斗 (Fig. 15)

(1) 支那發見交斗

1

(2) (4) 正倉院御物柄香爐

2

(3) 法隆寺請傳 山背大兄王 所用柄香爐

3

4

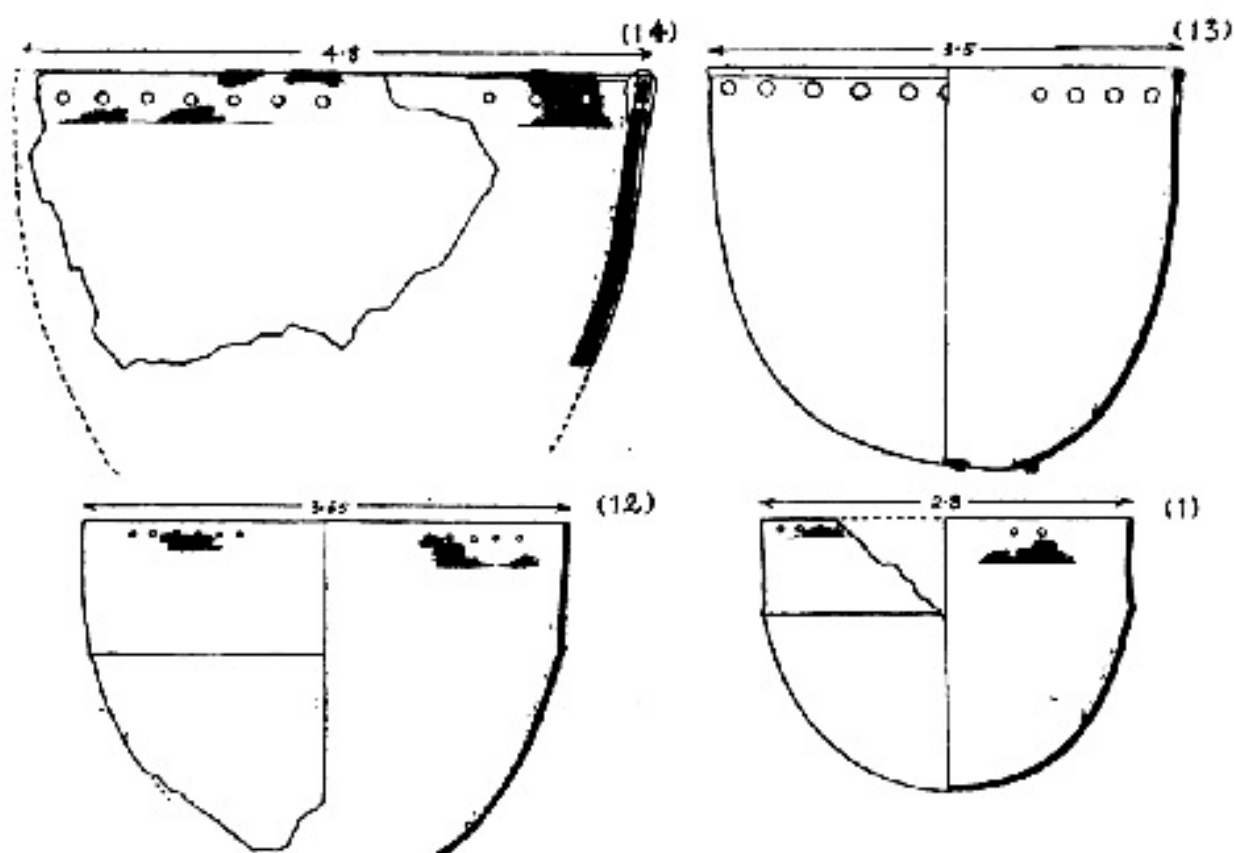
第十六圖 鐎斗及柄香爐 (Fig. 16)

(7)金銅製大形盒（圖版第二四8）一箇。是は今ま破砕して完形を遺存しないが、前者よりも大型で、形は稍々扁平であるから安定の觀を與へる。器は高さ三寸五分（口徑八寸）、蓋は内被せ印籠式、大形鍛附四葉座を附し、全高五寸六分青鏽の間處々なほ金色を殘してゐる。

(8)銀製盒（圖版第二四7）六箇分を存するが、何れも殘缺太しく、全形を存するものを見ない。就中稍々保存の宜いものに就いて述べること、蓋には陶坏に於けるが如き四箇の透し入り坏狀の銅鈕を具へて居つたらしく、外被せの形式である。器は底大きく稍々腰張りの強い形を呈し、蓋身共に端を折り曲げて緣をなしてゐる。全高約三寸、銀の打出しの表面には元と鍍金を施してあつた。此等が南鮮古墳出土の土器の盒と通有の形式を有して居ることは言ふ迄もない。

(9)金製鋺（圖版第二三1・2 圖版第二四1・5）六箇。多少の破損はあるが、全部完形を存してゐる。金質に多く銀を含んで居るらしく、色は美しくない。薄手の打出しの製法であつて、底は大きく扁平な形をなし、薄板を折り曲げて口緣をなしてゐること、前の銀製盒と同樣である。（口徑三寸八分強 高一寸九分）

(10)銀製鋺（圖版第廿三3・4 圖版第廿四2・4）十一箇。もと重ね合はしてあつたらしく、緣に近く黑銹

第十七圖　金銅有孔鋺形圖　(Fig. 17)

を出してゐる。大さも形も略ぼ金鋺と同じであるが、破損の程度は稍々太しく、折曲げ縁の幅は更に廣い。(口徑三寸六分 高一寸六分)

(11) **金銅製有孔鋺形**　二箇、破片を復原すると器は徑二寸八分(高二寸內外)あつたらしく、其の圓い底には小孔(徑一分五厘)を穿ち之には絲を通したが如き痕が殘つて居る。又た口縁に近く小さい孔を並列し、內外兩側は絹布を以て覆ふてあるのみならず、其孔には細い針金の遺存するものがあり、器の內側腹部には木綿樣の白布を張つた痕と共に、薫樣の

物質も殘つてゐる（第十七圖11）。

(12) 金・銅・製・有・孔・鋺・形　破片八箇殘存してゐるが、二器に復原す可きものと思はれる。大體前者と同じく、口緣に沿ふて小孔が或る間隔（約一分五厘）を以て並列し、其の內外兩側に布片の殘つてゐるものがある。底部は喪失して居るが前例から推すと之にも小孔が開いて居つたと考へられる。（口徑約三寸六分高二寸六分位）此の兩品は今ま青綠の銹を以て被はれてゐるが、其の一部僅に金色を留めてゐるので、本來金銅製なることを推すことが出來る（第十七圖12）。

(13) 金・銅・有・孔・鋺・形（圖版第二〇ノ4）一箇。是は前諸品の薄手なるに反して稍々厚手（厚約六厘）の製作である。器形稍々不整齊で口緣は外に折り曲げ、小孔（徑一分）が緣に沿ふて或る間隔（約二分）を以て穿たれてあることは前二者と同じである。器底には稍々一方に偏して、徑六分の孔を開き、其の外側には元と何者か附屬物があつたらしい痕迹がある（口徑約三寸九分高約三寸）（第十七圖13）。

(14) 鐵・地・金・銅・張・有・孔・鋺・形　一箇。殘缺して僅に二箇の小破片を留めるのみであるが、是は徑凡そ五寸の深手の椀形であつたらしく、鐵心（厚一分強）の外面には金銅の薄板を張つてある。口緣には又た小孔を連綴して穿ち、此邊に布片が密著してゐる。底は今ま缺失して明でないが、矢張り前諸器と同樣に

孔を開いて居つたものと見る可きであろう。(圖第十七14)
以上數種の有孔鋺形の器物に於いて、何れも緣邊に多くの小孔を穿ち此處に布片を殘存し、且つ底部にも孔を開いて居ることは、其の用途から來たこと丶思ふのであるが、果して如何なる目的に使用せられたか、今まで之を明にするを得ないが、たゞ甑に似た一種の器物かとも考へらるるが、或は容器でないかも知れない。

以上我々の記した如く、金冠塚發見の金屬製容器は、鐎斗などの特殊品を除いて、他は悉く高坏、壺、椀、盒の如く、土器陶器と通有な型式を示すものであり、其の用途に至つては鐎斗、刁斗などゝ共に飲食の器用たるものが多い。而も既に述べた通り、此の塚の土器類は凡そ八十點許りであるに對して、金屬製容器が斯の如く多數を存することは、從來南鮮の古墳にも其の例を見ない所と云はなければならない。我々は今日朝鮮の土俗に於いて、一般人民が下層社會に至るまで、飲食に鍮器を盛に用ゐてゐる事實と共に、更に李朝以前高麗時代の古墳墓から多くの金屬製容器が發見せられることを知てゐる。金銀器は別として此の銅器を盛に飲食に用ゐるこ

とは新羅時代以來さうであつたかと云ふに、此の金冠塚を除いて、他の新羅及び任那地方の古墳からは、裝飾品等に隨分華麗なものを出してゐる場合でさへ、銅器の副葬は甚だ稀であつて、土器を非常に多數發見することが寧ろ通例である。日本内地からも銅鋺、銅盒等を發見することがあり、其の形式は朝鮮の昌寧のものなどに酷似してゐるが、時代は古墳中でも稍々下る樣に思はれる。唐書に新羅の風俗を記して「其食器用柳箱、亦銅及瓦」とあつて、銅器のことも見えてゐるが、他のものよりも特に多く用ゐて居つたことは示して居ない。それ故此の金冠塚に於ける金屬器の豐富であることは、特に此の塚の被葬者の身分が高貴であつたので、通常土器等を以てする器物にも特に金屬器を使用したものと解す可きであらう。例へば(ロ)青銅製高坏の如きは其の適例であり、四耳壺もそれに近いものである。又た刁斗の如きは元來果實の殼の如きもの、形から發生したものであつて、今日朝鮮で汲水用の杓子に使はれる瓢(바아자)の如きは、矢張り新羅時代にも一般に用ゐられたものであらうが、此の塚では之が特に金屬で出來てゐるのである。但し鐎斗に至つては正しく支那の作品であつて特殊の奢侈品として、韓土に輸入せられて、新羅王族の愛用に入つたもの

固城郡東高郡正條村大字靜見古墳

尾前國東松浦郡鏡村大字鏡古墳

なほこれに近い銅鋺は正倉院や法隆寺等に傳へられてゐる。

（10）慶州附近の土陵等からは此の類の金屬器が以前から屢發見せられたるのと見ゆ、成俔の詩に「閭閻半是荒丘陵、山川斜陽古意多、擬議諸陵金盌出、野花啼鳥自年華」の句があるのは面白い。（東國輿地勝覽卷廿一）

第四節　漆器及木器 附貝器 （圖版第二八—第三〇）

木器と漆器とは其の質料の上から、今まで記した土器金屬器などに比して、遙かに保存の困難なものである爲に、本古墳發見の遺物に於いても、其の形狀等を詳にするに足る樣なものを殆んど見なかつたことは、敢て怪しむを要しない。併し此の兩者が本來金屬製容器にも次ぐ程多數に副葬せられてあつたことは、漆器の破片、木器の腐朽した斷片などが甚だ多量に遺存して居つたことによつて、充分推察せられる所である。

此等の木漆器は孰れも槨の東半部鐵釜の間に在つたもので、第四號釜の上に斷片の附著して居つたことは、前に記した處であるが、なほ第一號釜から第三號釜の間にも置かれてあつたことは、既述の陶質の蓋坏内に漆器片の殘つて居つたことから確められる。此等の遺物は其後破碎して、再び見る影もなくなつたものが少くないので、主として大正十年十月發見後最初の調査と、翌年五月の再査の結果に本いて、其の主なる遺品を記述することにする。

木器の類として先づ擧ぐ可きものは、**器蓋**の殘缺であつて、之には原形

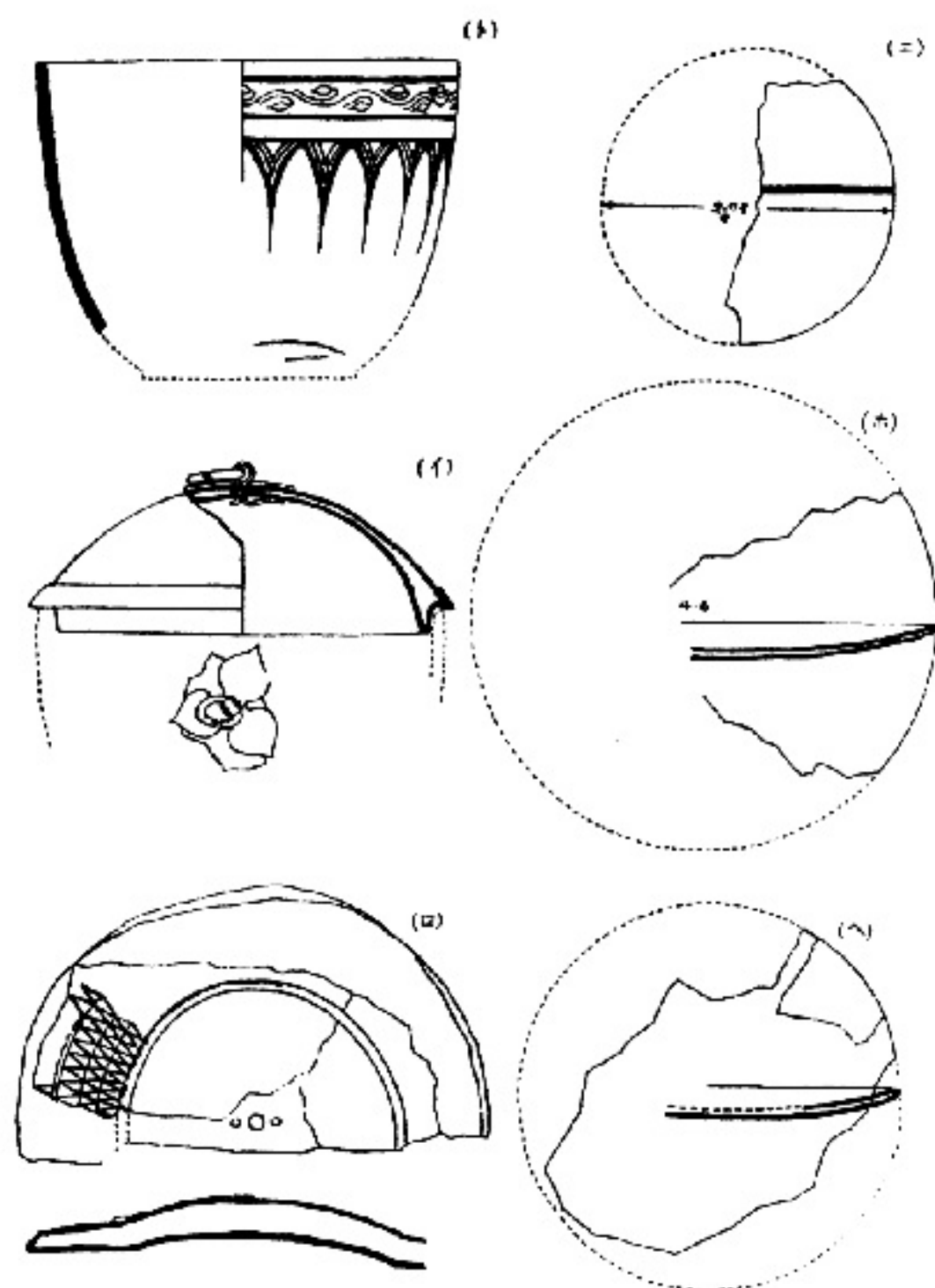
を推し得る破片が二個分ある（イ）は盒の蓋と思はれるもので、今ま其の上部に附した金銅三葉座附の鐶のある部分と、口緣の小部分とが存してゐる。之によれば此者は木材を刳つて作つた圓い內被せの印籠蓋で（口徑約四寸厚二分內外）緣に金銅の覆輪を加へ、上部に金銅の鐶を附けたもので、其の形狀は丁度前節に述べた金銅製盒の蓋と相似たものであつたことが認められる。圖は破片に基いて描いた復原圖である。今ま表面は素地の儘であるが、元は黑漆を塗てあつたものとも思はれる（第十八圖イ）

（ロ）は器●蓋●の半を遺存してゐるものであるが、其の形は前者とは違つて割合に低い盛り蓋で、內面を少しく刳つたものに過ぎない（中央厚約四分）徑は四寸五分內外を測り、表面に一つの內圈（中徑一寸三分）を繞らし、其の外側には數條の細い帶を置いて孰れにも鋸齒紋を薄く彫り塗めた痕が一部分に遺つて居り、其の全面に黑漆を施し、また中央に鈕金物を附したことは、漆塗りの殘痕と、蓋の中央に大小三箇の小孔を存してゐる事によつて知られる（第十八圖ロ）形狀から盒或は奩の類の蓋部かとも思はれるが、固より其の確かなことは分らない。

次に木器片としては徑二寸に近い圓●形●板●の上に漆繪のあるもの一箇

(ハ)がある。(圖版第三〇７)是は銅器の附近に貝器と共に存在して居つたと云はれる。今ま歪んてゐるが、是は木板の內面を削つて黑漆を塗り、其の上に六葉の蓮瓣を朱で描いたものである。此の木板は如何なる器物の一部を構成したものであるか明にすることを得ないが、或は嵌め込みの底の類であつたとも思はれる。右の蓮花は中房に蓮子七箇を容れ、豊麗な瓣葉には各蕋二箇を現はして、其の手法最も整美と稱す可く、我々は新羅統一時代の疏瓦、敷瓦などにある優麗な蓮花紋を聯想し[1]其手法から見て恐らくは更に古い時代のものと推測せれるらのである。ぞれは兎に角、既述の青銅鐎斗などと共に、本古墳の出土品中六朝時代の佛敎藝術の影響を物語る重要な一資料として特記す可きものに屬する。

以上の外木心の漆器としては圓板形若しくは淺い皿の如きものがある。就中數の多いのは兩面に漆を塗つた圓板(徑二寸七分餘厚在圖許)是は數枚相重なつて發見せられたと云ふ。(圖版第二十八)次に少しく內窪の皿形のもの、是は一は徑四寸六分を示し、兩面に稍々厚い黑漆を塗つてあり、(同上)他の一は徑三寸六分許(厚約一分)外側は黝黑色、內側は朱色に漆を塗つてある。(同上)此等は木器などの器底かとも思はれるが、其の製作の具合がこれ丈けで完成してゐる處か

第十八圖　金冠塚發見陶器　(Fig. 18)

ら見ると、矢張り皿の類とするのが穩當であろうか、元來漆器に於いて外面を黑漆にし、内面を朱塗にすることは、今日に於いても我々の椀などにも見る處であつて、若し其の反對であつたならば、餘りに重くるしい。而して是が既に漢代頃の舟坏に於いても同巧に出てゝゐることは、スタイン氏が西域で獲た遺物、濱田が滿洲古墳で發見した漆器、又は其れを模造した土器其他に於いても認められる面白い事實である。(注)

次に漆器中深い椀形のものも存在して居つたことは、破片によつて推察せられるが、今ま其の形を復舊し得るに足る大さのものは一も見當らない。併しなほ一箇深い鉢形の器(口徑約四寸深約三寸)の破片が存在して居つたが、其の表面に描かれた漆繪を保存する爲に、硝子板に挾んでしまつたので、今ま器形を認めることが出來なくなつたのを遺憾とする。是は矢張り内面を朱色、外面を黑色に漆で塗り、外面には黑漆の上に朱色を以て、帶内に果子樣紋と波紋とから成る一種の簡單な唐草を現はし、其下に下向の長い尖狀紋を置き、其の間に何等かの色彩を加へてあつたらしい。(圖版第廿九2第十八圖ト)なほ同樣の椀の緣に、金銅若しくは黃金の覆輪を加へたものがあつたらしく、覆輪の殘片が遺存してゐる。是は器形を知ることが出來ないから、後章覆

輪の項に其の説明を試みることにした。

以上は容器としての木漆器を擧げたのであるが、此の外漆を用ゐたものには、方柱形の細長い木部に黒漆を施した二片を、銀製の蝶番で綴附けたものや、用途不明の厚板の一面に漆を塗つたものがあり、殊に前章に述べた樣に本古墳の木棺は漆塗りであつたことが著しい事實である。是は別に木棺を記す際に説及する。なほ此の外各種の木漆器があつたらしく思はれるが、孰れも其の形を明にすることが出來ないのを憾とする。併し多數に發見せられた漆片中、紋樣を存するものに就いて、以下少しく述べて見度いと思ふ。

稍々器形を見る可き木器上の漆繪には、既記の如く蓮華紋を描いたもの、一種の唐草形を現はしたものがあつた。其他漆片中に認められた模樣は多く簡單な幾何學的紋樣を主としてある。其の中最も多いのは圖版第三十に載せた直線紋の一類で(イ)堅縞樣の文樣を朱白綠等で描いたもの、(ロ)格子目を朱漆で現はし、内に綠と黄(?)とを以て、口字形の文樣を描き、且つ一方に鋸齒紋を並列したもの(ハ)鋸齒狀の紋樣を青、朱、白の三色で描いたもの、(ニ)斜格子紋の間に、一方から白で三叉樣紋を現はした類などである。

但し是等は皆な不整正な模様であつて、甚だ幼稚な手法を示すに過ぎないものである、又た右の直線紋の外に、唐草紋かと見ゆる曲線を朱色で描いた小片と、綠、靑、黑等の色を用ゐて馬の形にさも似たる一種の圖樣を描いたものがある(圖版第三二)併し此等とても頗る異樣な描いものと云ふ外は無い、なほ此の靑、白、黃等の色は密陀僧(酸化鉛)に油を交へて描いたものであろうと思はれる。

木器の類は土器と共に、容器として最も早く發生したものであることは事新しく述べる迄も無いが、木器は其の性質上水分の浸透を受け、不潔になり且つ破壞し易いので、之を防ぐ爲めに起つたのが漆器である、この髹漆のことは支那では舜の時始まつたと傳へてあるが、それは信じられないにせよ、頗る早くから始まつたものに違ひなく、固より秦漢に至つて其の用途は廣くなり、其の技術の進歩したことは、文獻の上からも之を推測せられるが(四)既に北鮮樂浪の古墳からは驚く可き精巧な模樣繪畫を現はした髹漆の遺品が、關野博士一行によつて發見せられ、其の後漢頃のものであることを知るに至つて、當代支那に於ける漆器の術の進歩を驚嘆

せしめるのである[4]其の他滿洲に於いて、西域新疆に於いて漢代或は之に近い時代の漆器の遺品が發見せられてゐるが[5]此の髹漆の技術と製品が支那から朝鮮に入り、更に日本にも傳はり、日本に於いては特殊の發達をなしたことは最も顯著なる事實である。日本には唐朝製作の漆器の精妙なるものが正倉院に保存せられてゐるが[6]之より以前早く其の技術は流傳し、文武天皇の時漆部司を置かれた位であるから[7]朝鮮に於いても古く此の技術が行はれたものと察せられる。而して金冠塚發見の漆器は、其の紋樣の甚だ幼稚なる點から見ても、固より支那の製品では無く、南鮮に於いて自ら作つたものであることが考へられ[8]殊に木棺の漆塗りであつたことは、髹漆の技術の古新羅に存在して居つたことを確證するものと言へる。

又た注意す可きことは漆器上の彩繪である。是は既に記した通り色漆で描いたもので無く、密陀僧(酸化鉛)に油を交へて作つたものである。是は漢以後唐代に於ける漆器上に白、靑、黃等を以て描く場合の手法で、金冠塚の遺品も固より此の範圍を出るもので無い。樂浪古墳の出土品のも多分此の手法に由るものであらうと思ふが、日本に於ては彼の推古時代の遺

物である法隆寺玉虫厨子の臺座の繪をはじめとし、次の時期のものとしては橘夫人厨子臺座の繪があり、[3]奈良朝即ち唐代のものとしては、正倉院御物中の漆筥等に多く其の實例を認めるのである。

木漆器の終りに附記して置くものに貝器がある。是は玻璃器と共存して居つたと云ひ、稍々大形の鮑の貝殼を加工して覆輪を加へたものであつて、斯る天然品を利用した器物として尤も珍らしいものと云はなければならない。併し惜いかな早く出土の際に貝部が破壊して居つて完形を明かにし難かつたのみならず、精査に先立つて運搬移動の際、全く破砕されてしまつた。それで今はたゞ此の遺品は内窪みのある矩形様のもので、周縁に金銅の覆輪を加へたものであつたことを知り得るのみであるなほ其の覆輪に就いては後章別に記述する積りである。

【注】

(1)「朝鮮古蹟圖譜」第三冊解說參照。

(2)滿洲牧城驛古墳から濱田が發見した耳杯形漆器及び鵝鑾等の模樣を描いた漆片に就いては「南滿洲に於ける考古學的研究」(東洋學報、第三卷第一號)を見よ。漆器の耳杯を模したものに南滿洲熊岳城等から出土してゐる。スタイン氏の敦煌長城發見の漆杯は Stein; Serindia. Vol. IV. Pl. LII 及其の說明を見る可く、此等に關しては又た濱田の「大英博物館スタイン氏蒐集品逍遙錄」(東洋學報第八卷第一號)に記し置いた。なほ大英博物館藏傳顧愷之畫女史箴圖中、婦人理髮の圖の鏡匳の傍に置いてある漆匳の外部を黑く內部を朱塗してあることも注意す可きであらう。之には其の盖の上部に四葉座の金物を附してある具合なども見られる。(Münsterberg, Chinesische Kunstgeschichte. Bd. II. p. 4[3])

(3)支那に於いて漆器製作の事は非常に古く、正史にも「漢官儀」

とした地方があり、『岡崎舎官には「市東漆市漆献」のこと見ゆ、又た簡牘にも漆几のことが出てゐる。此等は周代器用に漆を塗つたことを明示してゐるものであるが、粗なる「ワニシュ」として用ゐたものか否か不明である。漢代に至つて益々其の用が廣くなり、「陳夏千畝漆其人皆與千戸侯等」と云はるゝ富をなすものがあつたと稱せられる(史記)。漢代に至つて完全なる漆器の存在して居つたことは本文に述べた通り。魏の時に漆園吏蒙の職あり、晉の時五彩の漆を以て畫いた几があつたことは「鄴中記」にも見ゆてゐる此等の事は謝肇淛の「五雜俎」に其の要領を記して居る。なほ Münsterberg の美術史(前出)、Bushell, Chinese Art. (London, 1909) Vol. I. Chap VI 等參照。

(4)關野博士「新に發掘せる樂浪の古墳」「朝鮮總督府大正六年度古蹟調査報告書」(前出)參照。今は總督府博物館に其の遺品がある。

(5)前註(3)參照。

(6)「東瀛珠光」第參輯等參照。

(7)日本武尊の時床石舍灑漆を木に施したことを傳へてゐる。其後孝德天皇の時漆部司を置き、天武天皇の時赤漆を發明し、文武天皇の時漆部司の職制を定められたと云ふ。(黑川眞賴「工藝資料」卷七等參照)

(8)慶州地方に於いて其後漆を産することは「東國輿地勝覽」(卷廿一)慶州の土産中に漆を擧げてゐるのでも分かる。其他慶尚全羅等南鮮諸道漆を産する地方多く、漆山、漆原等漆に關する地名の遺出あることは、古くから南鮮に漆器を作る技術の行はれたことを想察せしめる。

(9)寧樂遺文一に「漆部雜」と云ふ。玉虫厨子橘夫人厨子等の事に就いては、工學博士伊東忠太氏「法隆寺建築論」(東京帝國大學工科大學紀要第一冊)法隆寺大鏡、(第十三集)等參照。

第十九圖　顧愷之筆女史箴圖卷中漆器奩圖　(Fig. 19)

第五節　玻璃器（圖版第三一、第三二）

槨の東部鐵釜の周圍に於いて、前述の土器、金屬製各種の容器をはじめ、木漆器と共に玻璃器の破片大小十數個を發見した。其の詳細なる發見部位は諸鹿、大坂等諸氏の記錄する處互に相一致して、木棺に近い第二、第三の鐵釜の間鐎斗の附近となつて居る。今ま此等の破片を繼ぎ合はして、二箇の小さい臺附坏を略ぼ復原し得た。

(1) **鋸歯狀紐模樣附坏**（圖版第三一、第二十三圖）口徑二寸三分五厘、推定高約三寸、低い臺の附いた割合に深い坏である。臺の底部は缺けてゐるので、其の形を確め難いが、器の底部に接して、青色の鋸歯狀の玻璃紐模樣が加へられてある。其上に稍々離れて凸帶一條を張出し、器の上部は其の部分を曲げて圓い緣を作り成し、緣の頂部には周圍に沿ふて青色を出してゐる兩者の中間にも玻璃紐の細い帶を繞らし、其の間に底部に於けると同樣の紺色の鋸歯狀紐を挾んでゐる。器は透明の玻璃で出來てゐるが、少しく青味を帶び、底部には三四の大きな氣泡がある處は精良の作とは見られない。羅馬の古器などに見る樣な所謂金銀釉(gold and silver iridescence)は殆んど生じて居ない。

(2)臺附坏(圖版第三二 第三一3)此の方は前者よりも破損が太しく、現存部は器の下半のみであるから、上部の形を精確に復原し難いが、大體前者と相似た大きさの深い坏であつたことは固より推測に充分である。此の坏では臺部が幸に完全に殘つてゐるので、其の坏と接する部分に一の括れを造つてあることが明かに分かる。坏體の中央部以下に一の圓帶を張出してゐることは前者と同樣であるが、紐狀の附加飾はなく、其れより上は缺失の爲め形制を詳にしない。然し斷片から推すと、口緣までは何等の飾はなかつたらしい。前者と相似た青味を呈した玻璃で作られて、あつて、彼に比して稍々厚手の感がある。底徑一寸六分、推定高三寸弱。

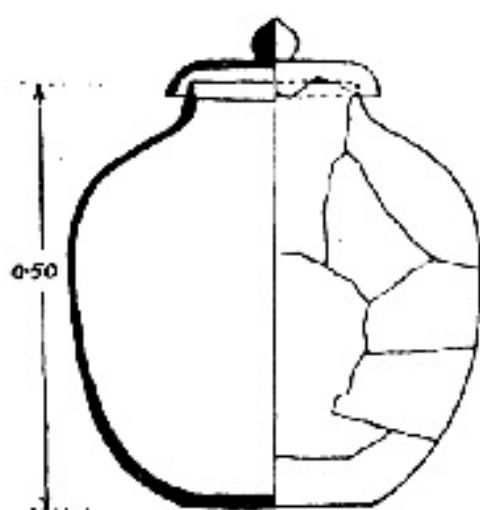
容器以外の玻璃製品の本古墳出土のものは、玉類の材料として勾玉、小玉等に紺青などの色硝子が使用せられ、腰珮中に茄子形瑠璃色の球子があり、なほ耳飾類に嵌裝せられた小玉や、雲球形飾物の座に用ひられたもの、其他トンボ玉の類がある。此等は何れも各其の品目の條中に述べるから、今ま玆には記載することを省く。

さて此の金冠塚出土の二箇の玻璃器は、當代の朝鮮古墳から從來全く其の發見例を聞かない珍らしい遺品として東亞に於ける玻璃の歷史の上からも、最も重要なる資料と云ふ可きである。併し日本內地の古墳からは、すでに早く二箇の興味ある發見例を提供してゐるのは、却つて其の傳播の時代を考へしむる上に面白い材料である。卽ち古く德川時代の末、河內國南河內郡古市の安閑天皇高屋の山陵から、白色の鉢の如き器で、全面に圓い突起(或は切子とも云ふ)を現はしたものが出て居り[1]、明治五年和泉國泉北郡の仁德天皇の大仙陵から、瑠璃色の壺と、白色の皿の如きものが、其前方部の石棺の外に於て發見せられたと云はれてゐる[2]。不幸にして此の兩發見の遺品其者を今日見ることが出來ないが、其の考古學的事實として信ず可きものであることは云ふ迄もない。此の二例よりは稍々遲れて、奈良朝に降るものとしては、正倉院御物中に數個の硝子器が今なほ完全に保存せられ[3]、なほ大和國宇陀郡から出た文忌寸禰麿の骨壺などがある[4]。卽ち此等は皆な「吹き硝子」(blown glass)であるが、斯くの如き瓶坏等の器に非ざる小さい珠玉の類、若しくは板硝子の類に至つては、更に古く東亞に於いても知られて居つたことは、支那には周秦の間のものと云はれ

る玻璃製の鉢印があり、又た漢代の製作と思はれる玻璃壁が支那の内地のみならず、我が筑前國筑紫郡の甕棺からも出て、朝鮮慶南金海貝塚等からは玻璃製の玉が發見せられ、(5)滿洲及び北朝鮮の漢代遺跡から耳飾と認むべき漏斗狀玻璃製が多數に見出されてゐる。(6)是等の事實から東亞に於いては、少くとも漢或は其の以前に、既に珠玉其他の小さい玻璃製品が存在し、六朝唐代に至つては稍々大きい容器類の存在が證據立てられるのである。

元來支那に於ける硝子の起源來歴と云ふ文化史上興味ある問題に關しては、ヒルト氏をはじめ西洋の學者の研究を經、本邦學者の間にも之に興味を持つて考察を試みた人が鮮くない。(7)それで之に就いて詳論することは今ま其の機會でないから、たゞ簡單に述べるが、硝子に關する支那人の知識は、文獻の方からは少くとも前漢時代に遡ることが出來、玻璃(一〇-三)の文字は主として透明若しくはそれに近い硝子を指し、瑠璃(一〇-三)は各種の色硝子或は陶釉をも指した樣である。ホブソン氏、ラウフエル氏等は陶釉の支那に傳はつたのは、漢代の初め西域諸國からの影響であると説き、そて其以前偶然吹き出し釉の如きものが生じたことはあつても、近東地

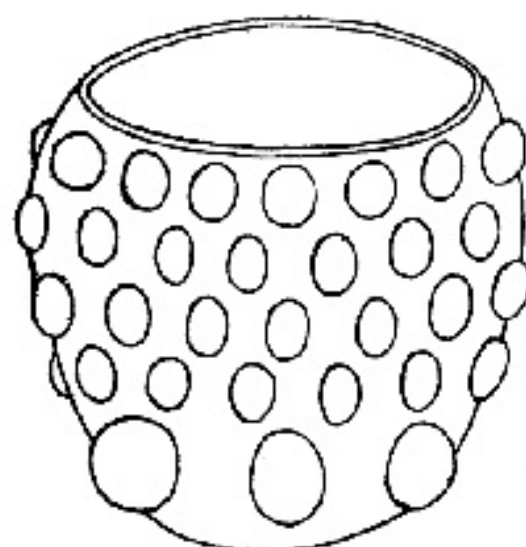
方から西域を經て瑠璃の刺激によつて始めて眞の釉を施した陶器が支那に出現したと云つてゐるのは、大體[1]贊成しても宜い見解であらう。而も此等近東諸國に於ける瑠璃玻璃の根源は、恐らく遠く埃及にあつたことと想像せられてゐる。

第二十圖 [illegible] (Fig. 20)

然らば此の陶釉が支那に傳はつた前と思はれる漢以前の鉢印などの硝子の材料や、また陶釉の見ゆる遺品などは果して支那に於いて造られたものであるか、將た又た西方から輸入せられたものであるか、此の問題は未だ資料が不充分で容易に解決することが出來ないから論斷を避けることしても、陶釉の輸入學習せられた時代以後に於いて、各種の小さい瑠璃製品が支那に於いて作られたことは固より自然の事柄であつて、冶金術と關係ある此の技術が、朝鮮、日本などにも傳へられ、珠玉などの類が各其の人民の手によつて作らるるに至つたことは想察するに足るものがある。朝鮮日本などの古墳から發見される富岐

玉即ち瑠璃玉の類は、即ち其の遺品であつて、特に内地では玻璃製の勾玉が割合に早くから作られた。[10]大寶令に典鑄司が瑠璃の塗飾を司つたことは、此間の事情を窺はしむるものがあると思ふ。

併し斯の樣な硝子の小品とは違つた「吹き硝子」で作らる可き容器類は陶釉の流傳した時代に、直に支那に於いて製作せられたとは信じられない。支那に於ける考古學的證據は未だ明かでないが、文獻の傳ふる所によれば、北魏の太武帝(西紀四二四—四五二)の時、大月氏の商人が瑠璃器の製法を傳へたと云ふから[11]其後一時中絶したのを隋代に何稠が之を復活したと傳へられてゐる。[12]若し假に之を信ずれば、六朝時代には支那に於いて硝子の器瓶が製作せられたと想像せられないでもないが、唐代に至つても玻璃の精良品は、なほ此等作品の本場である羅馬領東方諸國から輸入せられたものと考へられる。[13]かの正倉院の御物中の玻璃器の如きも、多くの西洋學者は西方の形式を示したものであり、其或物は確かに羅馬領の作品(Roman glass)であると云ふのを見ても分かる。[14]但し粗末なものは或は日本でも出來たかも知れない。かの瑠璃の骨壺の如きは、其の疑のあるものゝ一である。[15]

（右）集古圖所載圖（左）高橋健自修正圖

第廿一圖　安閑帝陵出土玻璃器圖　(Fig. 21)

爰に於いて問題は此の金冠塚發見の二箇の玻璃器、又た仁德、安閑二天皇陵から出土した玻璃器が果して何處で作られたものであるかと云ふ問題に歸つて來る。我々は金冠塚の時代は後章考定するが如く、又た既に關野博士の說かるゝが如く、西紀六世紀の中葉前後のものと考へ、仁德天皇の御宇を第五世紀の前半とすれば、當時日本や朝鮮に於いて玻璃器を作つたと考へ難く、支那からの輸入品とする外はない。然らばそれは支那自國で作られたものであるか、或は西域から支那へ輸入せられたものであるかと云ふに、前に述べた魏の時代に於ける大月氏商人の傳說を信ずれば、仁德帝陵のものは多少問題はあるにしても、金冠塚のものは時代の上からは、支那製作と

見られないでもない。卽ち是れは玻璃器自身の樣式製作如何によつて、決定せられる問題となる。

我々は此の金冠塚の玻璃器を見、又た安閑陵發見のもの、略圖を見て、其の樣式は矢張り西方羅馬領の製品と相似たものであり、殊に其の硝子紐模樣或は其の半球狀突起若しくは切子の手法から推しても、此の見解の殆んど誤りないことを信ずるのみならず、[16]支那六朝に於いて硝子器は非常の珍寶として流沙を濟り葱嶺を越ねて齎された異域の殊形であると云ふ樣な詩賦の文句のある所から見て、愈々西域渡來品たるの感を深くするのである。[17]たゞ支那に於いても玻璃器製作のははじめは固より西方の樣式を模倣したものに違いないから、我々は大體の器形のみを以て、其の果して西方の輸入品であることを決することが出來ない。又た六朝時代支那に於いて幾何なる程度まで技術上の造詣があつたかを、我々は未だ知らないのであるが、唐代に於ける技術の程度から想像すると、金冠塚發見品の如きは、寧ろ西域から輸入せられたものと見る方が穩當である樣に思はれる。それは兎に角此の二箇の玻璃坏は、西方の形式を傳へた器であつて、支那から朝鮮に持ち來され、新羅に於て當時遠來異風の珍寶と

して非常に貴重せられたものであつたことは想像に餘りある所である。(18)

【註】

(1)仁徳帝陵の發見品に就いては、黒川眞頼『日本玻璃七寶沿革』(黒川眞頼全集、美術工藝篇第二)に「明治五年九月七日、和泉國大鳥郡なる仁徳天皇御陵所謂る大仙陵の南方なる登口の地崩壊して石棺の内にある石棺を見る。其の石棺の前後左右に種々の器物を納めたるが中に硝子製の器二個あり。一つは瑠璃色にて壷の如きもの、一つは白色にして皿の如きものなり」云々。横井時冬「我邦に於ける七寶の變遷」(國華第百五十二號)同「日本工藝史」等參照。

(2)安閑帝陵發見器に就いては藤貞幹の「集古圖」に見ゆたるを最初とするが、なほ黒の黒川博士の記する所によれば「其の得たる年月詳ならず、其色白色にして、外面に丸文の切文あり、徑四寸、高さ二寸九分、厚さ五厘餘にて、其形状椀の如し」(割書)とあり。横井博士は「明治五年仁徳帝陵の前面崩れて、石棺の中より白色紺色の玻璃片を出し、又之より凡百年ほど前に河内の安閑帝陵洪水にてくづれし時白色にして圓點ある所の玻璃盌を出しぬ。此の玻璃盌は完全のものにて、藤貞幹の古六圖にみえたり」(國華)と云ひ、なほ此事「北窓隨筆」「河内名所圖會」等に出でたる由を記されてゐる。此器今ま住友男爵所藏のよし古谷清君の論文(後出註)にあるが、男爵邸の人にきくもの見當らないといふてゐる。(八木奘三郎君「日本考古學」後篇三〇九頁に、既に此の集古圖の圖を引かれてゐる)

(3)正倉院御物中の玻璃器は「東瀛珠光」第三輯第四輯に載せられてゐる。即ち紺瑠璃壺(鍍金銀臺)、白瑠璃瓶、白瑠璃碗、紺瑠璃盃、白瑠璃高坏等である。(本編第廿二圖)

(4)文忌寸禰麻呂の骨壷は天保二年九月大和國宇陀郡八滝村で發見せられ、今ま東京帝室博物館に藏せられてゐる。禰麻呂は慶雲四年に卒したこと其の伴出の墓誌によつて知らる。蓋は緑色不透明の厚手品で高さ蓋共六寸五分、胴廻り六寸五分である(「古墓遺文」前出黒川、横井氏著、高橋健自氏編「日本歴史圖録」等參照)

(5)是等の諸品に關しては濱田、梅原「金海貝塚調査報告」(前出)第二章第七節及補註參照。なほ硝子製の小さい碗で漢式のものが京都守屋孝藏氏の藏品にあるのを見た。

(6)北鮮及び滿洲發見等の此の種玻璃製品に就いては「京都帝國大學文學部考古學研究報告」第四冊第三章第二節を見よ。なほ此の種遺品が西域からも出てゐることは Stein の Serindia 圖版等に見えてゐる。

(7)Hirth, Chinesische Studien. (Leipzig, 1890) Zur Geschichte des Glases in China; Hirth, China & Roman Orient (Leipzig, 1885) Bushell, Chinese Art (London, 1904) Vol. II, Münsterberg, Chinesische Kunstgeschichte (Esslingen, 1910) Bd. II. 等の外、邦人のものは前出黒川、横井兩博士の外、古谷清君「本邦上代硝子に關する新研究」(考古學雜誌第三卷第四號)文學博士松本文三郎君「琉璃考」(藝文、第十四年第六號)等がある。松本博士は印度に於ける琉璃は寶石であつて、硝子ではないとしてヒルト氏等とは別論を出して居られる。

(8)Hobson, Chinese Pottery & Porcelain (London 1915) Vol. I. P. 8. Laufer, The Beginning of Porcelain in China (Chicago, 1917).

(9)今ま讃岐大西氏所藏の□□の工の文ある銙印の如き知られてゐる。吳大澂の舊藏品であつて、其の考證は羅振玉氏の「俑廬日札」(國粹學報、己酉第四號)に見えてゐる。

(10)玻璃製の勾玉は本邦では西は九州から東は岩代に到る各地から多數に發見せられて居り、特に備前國邑久郡宅和村築山古墳では支那の三國時代を降らざる支那鏡を伴出してゐるのが注意を惹く

なほこの事に就いては後節玉類の處で詳説する。

(11)「魏書」西域傳大月氏の條には「世祖時、其國人商販京師、自云能鑄石爲五色瑠璃、於是採礦山中、於京師鑄之、既成光澤乃美於西方來者……自此瑠璃遂賤人不復珍之」である。南朝のことは Grosier, Description générale de la Chine (Paris, 1785) に "Les grands Annales" から之を引きてゐる。ヒルト氏は之を以て宋書であらうと云つてゐる。

(12)「隋書」卷六十八何稠傳に曰く「何稠字桂林、國子祭酒妥之兄子也。父通善斲玉。稠性絶巧有智思、用意精微……稠博覽古圖、多識舊物。波斯嘗獻金綿錦袍、組織殊麗、上命稠爲之。稠錦既成、踰所獻者、上甚悅。時中國久絶瑠璃之作、匠人無敢措意、稠以綠瓷爲之、與眞不異」云々。

(13)スタイン氏の西域探檢の結果和闐樓蘭其他各地で發見した硝子器は頗る多數であるが、中には此地方で出來たものもあり、又た輸入品と思はるゝものもある。(Stein, Serindia. Vol. I. pp. 130,303, &c.)

(14) Münsterberg, 前出 p. 451. 其他 Sayce, Reminiscences. (London. 1923) p. 448.

(15)古谷清論文(前出)第五圖參照。同君は正倉院文書中、天平六年五月の造物佛物帳を擧げて硝子製造の原料を指摘して居られる。

(16)西洋諸國古代の硝子に就ては Kisa Das Glas (前出) を參考すべく、埃及の硝子に就いては Petrie, Arts and Crafts of Ancient Egypt (London, 1910) Chap. 10 を見よ。

(17)支那六朝唐代頃の瑠璃器に關する韻文は一々例擧するに堪へないが、晉の傅咸の汗琉賦に「凝霜雪以成器、邁昆侖之弈形」云々の句があり、潘尼の瑠璃椀賦に「濟流沙之絶險、越葱嶺之峻危、其由來也阻遠、其所託也幽深」云々とあり、皆な西域渡來の珍寶たることを示してゐる。唐の王翰の涼州詞にある夜光杯の句の如きは「唐詩選」にもあつて、皆人の誦する所である。

(18)なほ高麗時代の古墳からは各種の瑠璃器を出してゐることは、李王職博物館の寫眞帖等を見て知る可きである。

1 2 3 4 5

(1) 白瑠璃瓶

(2) 紺瑠璃坏

(3) 紺瑠璃壺

(4) 白瑠璃碗

(5) 白瑠璃高坏

第二十二圖　正倉院御物玻璃器　(Fig. 22)

第三章　裝飾品（一）

第一節　耳飾類　〔圖版第三三〕

裝飾品中身體頭部に直接附著せられた耳飾の類から記述する。此の耳飾は裝身具中顯著なる遺物として、南鮮の古墳から最も屢々發見せられるものであるが、大抵は一墓一對を出だすに過ぎないのに反して、本古墳からは完形品三對と殘缺一箇とを出だし、なほ耳飾類似のものと思はれる一對を存して居つたことは、あらゆる遺品の豐富なるに相應した事とは云ひ乍ら、亦た特記するに足る點であるのみならず、其の製作の複雜なる點に於いても、從來の發見品に勝つたものがある。

此等の耳飾中其の一對は、棺內寶冠の下方恰も兩耳の位置に當り、約五寸の距離を置いて佩用の面影を示しながら發見せられた。又た他の一對は棺の西方中央部、棺材の端を距る約五寸の邊に、南北一尺許の間隔を以て相並んで居つたことは、諸鹿氏の覺書に明記してある上に、大坂、渡理等諸氏の言ふ處亦た一致して疑を容るゝ餘地が無い。併し自餘の諸品に至つては、其の發見の部位が明瞭を缺くのは聊か遺憾である。たゞ耳飾とし

て確かな他の一對は、漆塗りの木片と共存し、而かも此の木片に截金の箔を置いてある處から察すると、其の棺內に存在して居つたものであること丈けは想像するに足りる。次に棺內頭部發見の一對から順次記載を試みよう。

(1) **金製飾鐶附心葉形雙條垂飾附耳飾**（圖版第三二1）卽ち棺の東方寶冠の附近から發見せられた一對であつて、裝飾の最も複雜なものゝ一である。飾鐶は非常に太く（徑九分餘）正圓をなしたもので、一方に開き（厚約五）があり、鐶條の斷面は中空扁圓である。此の飾鐶に中空の細鐶（約七分餘）を連ねて、之に垂飾を繫げてある。垂飾は二條から成立ち、一は上下に小さい心葉形の瓔珞を針金で結付けた細金細工（filigree work）の華籠形飾を通じて、心葉形の板飾一片を端に懸垂したものである。（長一寸三分）他の一は略ぼ之と同一の樣式であるが、形稍々大きく（長約一寸七分）裝飾も亦た一層の複雜を加へてある。卽ち華籠樣の上方球形部に八個と、下方笠形部の端に六箇の小瓔珞を附し、下端に垂下した心葉形板には、蛇腹樣の細帶を周緣と中央縱線に附してあるのみならず、更に各四個の心葉形の小飾りを、板の兩側に附加してある。而して此の兩條の垂飾は中實の小鐶を以て、上部の鐶に連懸してある。此等各部の製作は必し

も精巧と稱し難く、二つの垂飾を繋げ、更に多くの瓔珞を附飾したるが如きは、聊か繁褥に過ぎた嫌はあるが、同じ樣に華麗の趣味を發揮してゐる寶冠、銙帶、腰佩などと、寧ろ相一致する趣致と言ふことが出來やう。總長約二寸九分。

(2) 金製飾環附心葉形垂飾附耳飾（第三圖版2）此の一對は棺の兩方に於いて發見せられたものである。太い飾環（徑一寸餘）に細い楕圓の鐶（長徑一寸）を聯ね、之に垂飾を懸下した趣は、前例と同一であるが、其の垂飾はたゞ一箇である點を殊にする。此の垂飾は上方に花籠形飾を置き、下方に心葉形の板飾（長七分五厘）を附した處、亦た前者の垂飾の長い方と相似て居る。併し本例に於いては、此等に附加した小瓔珞は、聊か其の形容を同じくしない。卽ち花籠形飾には小心葉形と、一種の瓢形（若しくは鋒形）の打拔き牌とを交互に配して附著し、主飾心葉板には、兩側に六箇乃至八箇の小心葉片を加飾して居る。耳飾としては此の方が簡單にして却つて要領を得て居るが、其の製作は矢張り前者同樣餘り精巧と云ふことは出來ない。總長約二寸六分。

(3) 金製寶冠樣並心葉形垂飾附耳飾（第三圖版3）出土の耳飾中裝飾の手法に異彩を放つた一對であるが、其の發見部位は單に棺内から出でたものと推

測し得るのみである。これは太い飾鐶なく、開きのある中實扁圓形の金鐶(長程八分六附)に、長短二條の垂飾を懸垂したものである。卽ち其の長い方の垂飾は、兵庫鎖(長四分許)と針金(長五分許)各二條を交互に連ねて一の連條をなし、其の下端に西洋の寶冠形とでも稱す可きもの飾を垂れて居る。此の寶冠形のものは薄板で作られ、其の張つた兩肩は下方に至つて縮約し、內側は自ら心葉形の空處を形成して居る。此の空處には何等か寶石若しくは木實の如きものを挾んだらしく、此の挿入物を支持する爲めに、寶冠形の板は空處に沿ふて其の緣が濶くなり、下端には蛇腹狀の楕圓鐶を附著してある。

如上の寶冠形飾りの上方兵庫鎖の部分には、花籠形飾を貫き、之には十箇の淡青色の瑠璃玉を飲裝し、なほ二方から鎖を垂下して、先の寶冠形飾の小さいものを各々其の端に繫げてゐる。此の冠形飾の或る一箇には、下端蛇腹の鐶の下に、なほ舌狀の垂下物を掛けてゐるのが見ゐる。(同上右圖のもの)之に依つて察するに、前記大寶冠形のものにも、皆な此の類の附加物があつたらしく考へられる。又た此の花籠形飾の更に上方連條の上端に近く、圓笠形の飾が附著せられ、其の周圍には小心葉形の飾片と、長い劍菱狀(若しくば鋒狀)の飾片各四箇を懸垂してゐる。總長一寸六分

長い方の垂飾は以上述べた如く、三段も裝飾を連繫してゐるに反し、短い方のものはたゞ俵形の細金細工の緒締め様の飾によつて、美しい心葉形板を垂繫した簡單なものである。此の形式は耳鐶に於いて最も屢々見る處のものであるが、其の手法は稍々精巧と稱するに足りる。

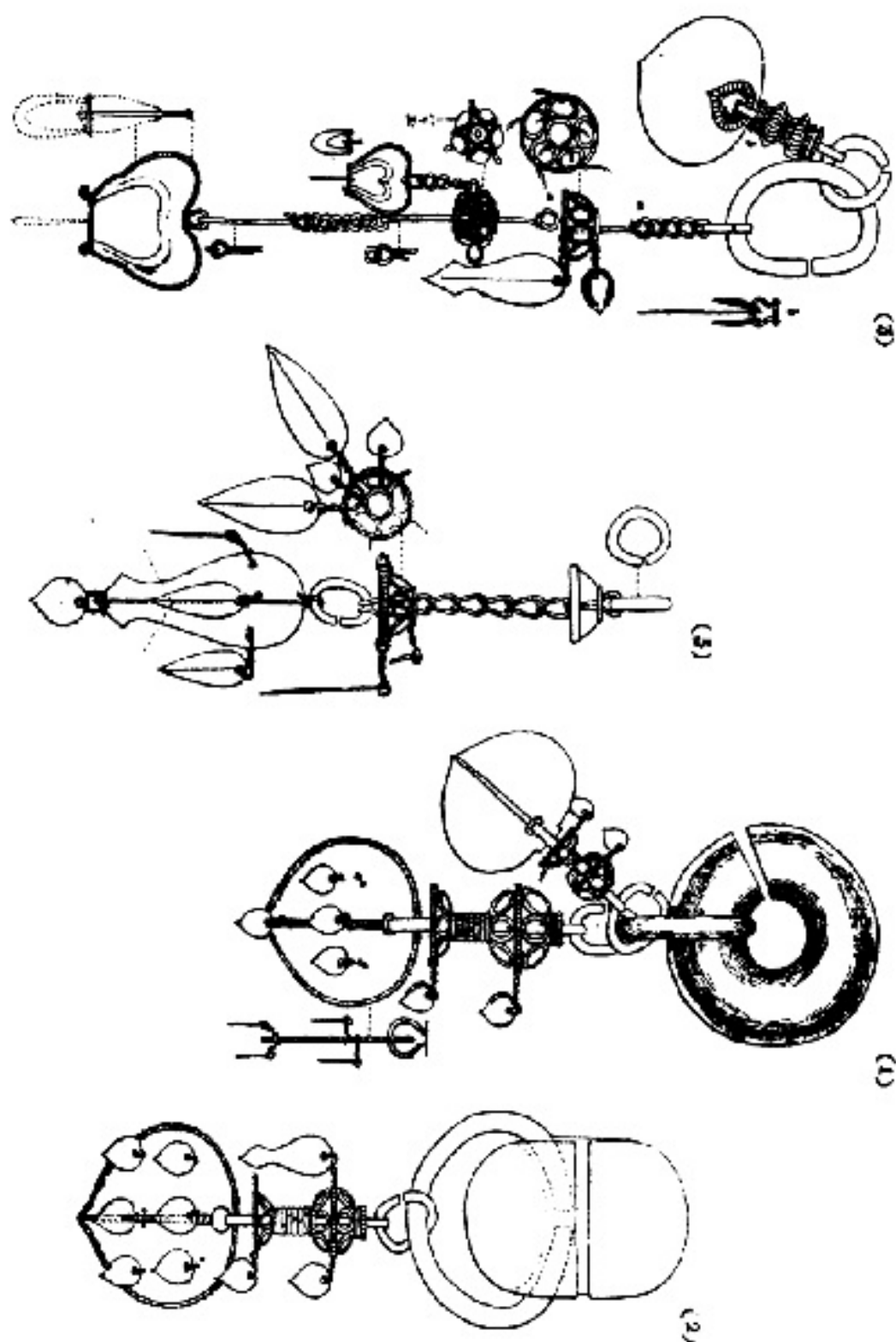
要するに此の耳飾は其の金色も著しく赤味を帶びて、良質なることを示し、其の製作亦た頗る見る可きものに屬し、瑠璃玉を其の裝飾に用ゐた點などは、近江の水尾村や、慶南梁山、慶北善山古墳の出土品にも見る處であるが、(1)それ等よりも更に優れたものとして、其の特殊な裝飾の「モチーフ」と共に特筆するに足るものがある。

(4)**金製心葉形垂飾附耳飾殘缺**（圖版第三四）一箇鐶部は薄い中空のものであつた爲め稍々破損して居る。垂飾（長一寸三分）は花籠形の飾の下方に心葉形板を垂れたもので、籠飾と心葉板の上部とに、小さい心葉片を附加してゐる趣は第一例耳飾の短い方の垂飾と相似てゐる。此の耳飾は金質に多くの銀分を含んでゐると見え、表面一部分鉛黑色を呈し光澤を失つて居る。

(5)**金製竹葉形飾附垂飾**（圖版第三五）此の一對は全體の形狀や大きさなど、耳飾の垂飾と全く同じであるが、耳朶に貫く可き鐶を有して居ないから、必しも

他の部分の裝飾でないとも斷言し難い。併し今ま其の形の上から茲に記載することにした。是は兵庫鎖(長一寸)の上下に小金鐶(徑二分許)各一個を附し、下鐶には三羽を有する劍菱形(若しくは鋒形)とも云ふべき飾を垂下し、下鐶の上部と上鐶の下方とには、笠形の金具を嵌さして、周圍に各五箇の竹葉形飾片と、小心葉片とを垂繋してゐる外、劍菱形の垂飾板にも、其の三葉の中央部に小竹葉片を懸け、下端には小心葉片を垂れてゐる。(全長二寸六分九厘)此の遺品は今ま一部分に銅鏽の附著を見るが、全體は良質の黃金であつて、製作また精美と稱す可く、寶冠形耳飾と並び稱す可き優品である。

以上諸例の外出土品中には、金製の垂下飾で其の形著しく長いものが數箇ある。此等は棺內から出た金寶冠の附屬飾から推して、恐らく同じ樣な裝飾に用ひられたものであろうと思はれるが、其の一例(圖版第三十三6)には長い垂飾の外楕圓鐶に前述(3)の耳飾に於ける心葉形垂飾と全然同式のものが附著せられてゐる。それで此の垂下飾は假令冠飾の一部であるにもせよ、此の部分は耳飾のそれを應用したものと云ふことが出來る。なほ此の種の飾に就いては後節說く積りである。

第二十三圖　金冠塚發見金製耳飾圖　(Fig. 23)　¼

第二十四圖　朝鮮發見金製耳飾聚成圖（裏面地名表參照）

1　2　3

11　12　13

22

24　25　26　27

第二十四圖　朝鮮古墳發見金製耳飾發見地

1 傳居昌(李王家博物館)
2 南　鮮(鮎貝氏藏)
3 南　鮮(李王家博物館)
4 南　鮮(同上)
5 不　明(南鮮カ)(總督府博物館)
6 傳居昌(李王家博物館)
7 南　鮮(鮎貝氏藏)
8 晉州古墳(同上)
9 昌寧校洞第卅一號墳(總督府博物館)
10 南　鮮(李王家博物館藏)

……………………

34 慶州路西里金冠塚

11 南　鮮(李王家博物館藏)
12 南　鮮(同上)
13 南　鮮(鮎貝氏藏)
14 星州星山洞第一號墳(總督府博物館)
15 梁山北亭洞古墳(同上)
16 慶州普門里積石塚(同上)
17 昌寧校洞第七號墳(同上)
18 南　鮮(鮎貝氏藏)
19 南　鮮(李王家博物館)
20 南　鮮(同上)
21 南　鮮(同上)
35 慶州路西里金冠塚

24 南　鮮(李王家博物館)
25 南　鮮(同上)
26 南　鮮(總督府博物館)
27 南　鮮(李王家博物館)
28 昌寧古墳(總督府博物館)
29 慶州普門里夫婦塚夫塚(同上)
30 梁山古墳(同上)
31 慶州路西里金冠塚
32 慶州普門里夫婦塚婦塚
33 慶州路西里金冠塚

以上記載した遺品のうち初めの三者が耳飾として耳朶に垂れたものであることは、其の出土の位置からも、又た他の類例の上からも容易に推測せられる處であつて、毫も疑を容れる餘地がない。耳朶を穿つて裝飾を施すものを瑞と云ひ、支那人は寧ろ之を蠻夷の風としてゐたが、漢六朝以後其の風が支那に於いても行はれたことは云ふ迄もなく、朝[2]鮮に於いては高句麗で金鐶を耳飾にしたことが文獻にも現はれてゐる。[1]新羅に關しては文獻に記する處を見ないが、既に明確なる考古學的事實が其女子のみならず、男子も亦た之を佩用したことを證明し、其の制樣をも詳細に示す處がある。卽ち彼等の耳飾は、內地古墳に於て最も多く發見せられる金被せの素鐶よりも、之に垂飾を附した頗る複雜なものが寧ろ普通であつたのである。而かも此の類には本古墳出土の二例に於て見るが如き、太い飾鐶を具へたものは、屢々南鮮に於て發見せられ、中にはそれに鳳凰等を細金細工で現はした者さへある。斯る飾鐶を如何にして耳朶に附著したかと云ふことは、考察に値する一の問題であつて、此者は細鐶の如く容易に伸縮することが出來ないから、或は別に何等かの伸介物を使用したとも想像せられないでもないが、梁山古墳の如く精密なる學術的調査を

經て、原狀を最も善く保存して居つた場合に於ても、敢て特殊の飾裝法を示した形迹を認めることが出來なかつた。それ故矢張り此の太い飾鐶を佩する爲に、耳朶に大なる孔を作つたものと考へる外は無かろう。尤も耳環を著用する爲に耳朶の穿孔を非常に大きくする事は、野蠻未開の民族間にも澤山あつて、敢て珍らしいことでは無い。(8)たゞ平生大きな垂飾の懸繫を不便とする場合には、此の飾鐶のみを耳朶に殘して、垂飾の方を取り外して置いたものと見る可きであろう。

金製耳飾の形式や其の性質に關しては、我々が既に他の機會に於いて論述したから、(9)今ま再び之れを繰返すことを避けるが、こゝに參照比較の便に供する爲に、南鮮古墳發見遺品の聚成寫眞を掲げることにした。(10)（第廿四圖）卽ち之によつて見られる如く、金冠塚の發見耳飾は、大體心葉形垂飾の系統に屬し、而かも其の最も複雜なる加飾を有し、寧ろ繁縟に陷つたものであることを示して居るのみならず、其の製作も彼の慶州普門里古墳の遺品などに比して、却つて精巧の點に於いて一籌を輸し、細金細工としては既に最も粗笨なるものに屬し、墮落的傾向を現はすものであることを知ることが出來る。たゞ最後に此の耳飾の垂飾が新羅に於いて、獨り人間の

第二十五圖　朝鮮發見耳飾類似裝飾附土器 (Fig. 25)

耳朶のみならず、土器の鐶耳に迄同じ「モチーフ」の應用するに至つたことは此(6)の種裝飾の流行を反映するものとして興味ある現象であることを指摘して置かう。

【註】

(1)但し馬場小川兩君の發掘調査せられた慶南梁山北亭洞古墳からは、金製二對の外金銅製品とが見出された實例もある。

(2)濱田、梅原「近江國高島郡水尾村の古墳」(京都帝國大學文學部考古學研究報告第八冊)、「朝鮮古蹟圖譜」第三冊等參照。

(3)「翰苑」に引いた梁元帝職貢圖の文中「穿耳以金環」の語のあることに、本章第六節註(1)を見る可く、なほ「三國史記」卷卅二、雜志第一の樂の條に、高句麗樂を引いて舞者の服裝を記した處に、「椎髻於後以絳抹額飾以金璫」とあるものを注意して置かう。

(4)高橋健自君「日本人の耳飾」(風俗研究第十八、第十九)文學博士喜田貞吉君「本邦古代耳飾考」(民族と歷史第四卷第六號)等參照。

(5)例へばボルネオ島のペナサン人([illegible])は耳飾を佩する婦に、耳朶に三吋四分三の大孔を作り、亞弗利加のマサイ人(Masai)は四吋半の大孔を穿つて、二磅十四オンスの重量ある石製品を懸垂し、兩耳朶が頭上に於いて相結ばれ得る程度に延ぶると云ふ。又た六朝唐代に至る佛像に於いても耳朶に大なる孔を穿つて、耳飾を佩する様にしたものが少くない。新羅時代の彌勒銅像(李王家博物館藏、古蹟圖譜第三冊)の如き其の好例である。

(6)「近江國高島郡水尾村の古墳」(圖版)第五第一第及濱田「象嵌細工に就いて」(史林、第七卷第四號)、濱田、梅原「慶尚南北道古墳調査報告」(大正七年度古蹟調査報告第一冊)第六八頁以下參照。

(7)此の聚成圖は梅原が濱田先輩、末松熊彦、鮎貝房之進等諸氏の助力を得て作成したものである。

第二節　頸飾類　附手飾　【圖版第三四】

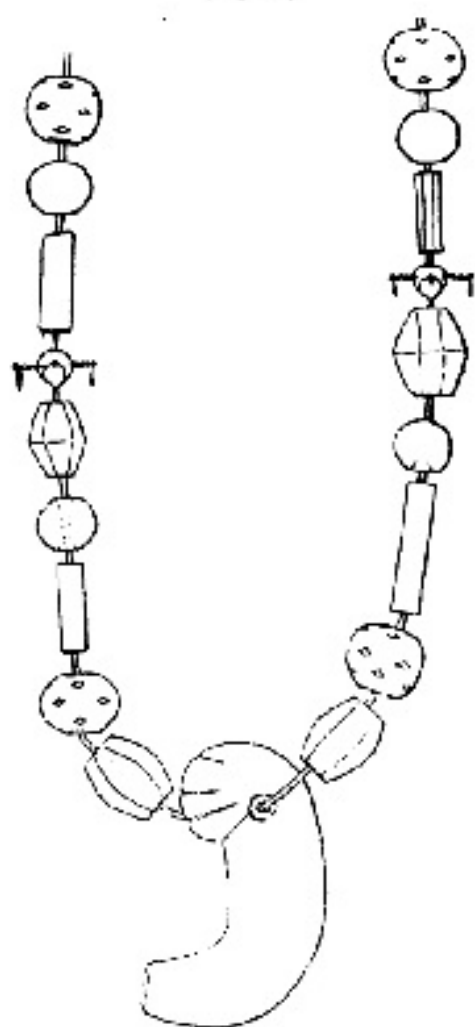
耳飾の次に來る頸部から胸部の裝飾具は、普通珠玉類を連ねたものであるから、連繋の組紐の腐滅と共に、佩飾の狀態を知ることが出來ないのを常とする。本古墳に於いても玉類の出土が驚く可き多數に上つて居りながら其使用の位置目的を明かにすることが不可能なるものゝ多いことゝは已むを得ない。併し幸にして棺內發見のものに於いて、存在の位置略ぼ分明し、頸胸部の佩飾として想定せられるものがあつたから、特に此の節を設けて記述し得るのは喜ばしい。

卽ち本古墳發見の玉類中、頸胸飾と認められるものが二群ある。その一は棺の東半部寶冠から腰珮の間に亘つて見出された大形勾玉を中心とする管玉、切子玉、丸玉其他の小玉類で他の一は棺の西隅に近い處に存在して居つた金被せ勾玉を主とする瑠璃玉の連條である。今次に此等に關して其の頸胸飾としての性質を主として考察し、玉其者の單獨の性質は、後節玉類の條に於いて更に記述することゝする。

(1) **大形硬玉勾玉聯繫頸胸飾**（圖版第三四1－6）卽ち棺內金製寶冠の西部から銙帶腰

環の間に亘つて存在した一群の玉であつて、諸鹿氏の言に從へば、金製耳飾の附近に多數の瑠璃玉と金製及眞珠の玉があり、帶銙の一列の中央部の稍々東邊に、大形硬玉製勾玉一箇を發見した外、該勾玉から耳飾の下方に亘つて、瑪瑙管玉、切子玉、丸玉、臼玉等を獲たと云ふ。卽ち本古墳出土の玉

(Fig. 26)

第二十六圖　金冠塚發見大形勾玉附頸胸飾一部想像復原圖　1/2

類のうち、他の勾玉と小玉、其他二三を除く殆んど全部の形式を網羅し、玻璃製煉り玉、眞珠玉、金製品等の凡ての質料のものを含むことゝなる。最も現存品の全部が此の一部位から發見せられたか否かに就いては、多少の疑問もないではないが、今まで之を反證することが出來ないから、姑く其の儘一括して論ずる外はない。

銙帶の中央に近く發見せられた特殊の大形勾玉（圖版第三四、1）は長さ二寸二

分の丁字頭を有する半透明緑色の硬玉製のもので、出土硬玉勾玉中の最大のものであるのみならず、其の玉質に於いても精良であり、製作亦た整美のものに屬する。此者が頸から胸部に繋けた裝飾の中心をなし、一種の胸飾(pectoral)であつたことは、其の發見部位が之を我々に示唆するのみならず、梁山北亭洞古墳に於ける明瞭なる配列狀態——特に女子の胸飾に於いて各種の玉を銀の針金と鎖とを以て連ね、中央に一箇の瑪瑙勾玉を配した事實——又た慶州皆門里積石塚に於ける、大形金被せ勾玉の他の玉類と併出せる事例等によつて推察することが出來る。(1)

他の切子玉、管玉、臼玉、丸玉の詳細なる配列狀態は、固より之を明かにすることを得ないが、勾玉の兩側に或る種の順序を以て連繫せられ、一連の飾りを形成して居つたものであらう。此等は凡て紅瑪瑙を以て造られてある。管玉四箇(圖版同上31—6)は何れも中型の大さ(長一寸未滿徑二分內外)を有し、切子玉六箇は長五六分の著しく稜角の丸味を帶びたものである。但し其の一箇は五稜、他は悉く六稜の形であるが、一箇縞瑪瑙に近い質のものは算盤玉に似た扁平型を示してゐる。丸玉は九箇(徑二分八厘乃至四分六厘)、臼玉は二箇、共に形の歪んだものが多く、精品とは稱し難いが、色彩は美しい。煉り玉は五箇、(徑六分內外)濃藍色に菱形

の黄斑を點したものである(2)第二十六圖は梁山北亭洞古墳發見品を本として、假りに此の頸胸飾の主要部を復原想像したものである。

(2)**瑠璃玉頸飾** 是は前項の頸胸飾と關聯したものであるが、又た別箇のものとも見ることが出來る卽ち寶冠及び耳飾の下方の邊から發見せられた玻璃玉として別に保存せられた總數五百五十餘の小玉は、小粒の形は整美な光澤のある美しいものであつて、其の色は草綠色のもの約百五十と濃藍の瑠璃色のもの四百許を數へる外に、瑠璃色の稍々大形品數個と眞珠に穿孔したものの若干を見る。此等は其の發見位置から想像して、幾重にも頸部を繞らした珠數飾を成したものとするのが穩當であろう。

(3)**金冠硬玉勾玉聯繫飾**(圖版第二四ノ二) 此の一群は前二者に比して其の出土狀態稍々明瞭であるが、果して頸胸飾であつたか、或は他の身體の部分の飾りであつたか、其の發見部位によつて決定し兼ねるものがある。卽ち棺の西半部金製寶冠を著用した被葬者の足部と想定せらるゝ部位から、銀釧と相接して發見せられ、主として二箇の木片上に存在した儘を採取保存せられたものである。此等の木片は共に漆塗りであつたと思はれ、其の上に金箔を置いた布類の已に炭化した樣なものがあり、玉類は其上に半ば嵌

入つて遺存して居つたてある。就中銀釧群の側にあつた木片(其二)には、小玉の連繋せられたもの約七條を認め、玉の孔中になほ糸紐の殘つてゐるものさへあつたのみならず、銀釧の痕が玉の並びに沿ふて歷然たるものがあつた。他の一木片は其の西南の邊にあつたもので、之には頭部に金冠を被せた勾玉一箇と小玉の群が置かれてあつた。(上圖版84圖)而して此の勾玉の孔には絲紐二條を通じ、之に小玉を連ねて他物に綴つた狀態を示して居る。

如上の出土狀態によつて、其の銀釧に接して出でたことゝ、又た金冠勾玉と連繫した小玉が比較的細い部分を纏つたかの如き形迹あることとは、此の玉飾が寧ろ頸部に佩せられたもので無く、却つて銀釧と同じ部分を飾つたものと考へしめる。然るに此の銀釧其者も、其附近から出た耳飾、指鐶、帶鑄等と聯關して、寶冠著用者の足釧では無く、或は別箇の被葬者の手釧とも推測せられるから、件の金冠勾玉附の玉飾りは矢張り此の個體の手首の裝飾と見ることの合理的なるを思はしむるのである。手首に玉飾をしたことは、梁山古墳の女子の腕に金銀釧と共に玉飾りを佩した顯著な實例があつて、決して架空の想像ではなく、內地に於ける埴輪土偶等亦た之を類推せしむる處がある。それ故已に述べた如く、金冠勾玉が普門里古

墳から發見せられ、頸胸の珮と見られる事實があつたとしても、是は凡ての金冠勾玉を同樣の用途と考へしむるものでは無く、殊に本例の如く比較的小形の勾玉は、手首飾中に置かれても、決して不都合で無いと思はれるのである。

さて此の玉飾りを構成した玉類に就いて、其の性質を簡單に述べなければならないが、金冠勾玉は長九分强の白色不透明の硬玉製で稍々綠色を帶び、精巧に磨研せられて美しい形を備へてゐる。金冠部は孔の下に迄及んで居るが表面には何等の裝飾なく、たゞ緣邊に細い蛇腹を見るのみである。併し金被せの下、玉の本體は丁字頭で、三條の刻線のあることを注意しなければならぬ。其他劍の邊から發見せられた一群は、淡青色の玻璃玉十數箇と、瑠璃色のもの百數十粒の外稍々大形の玉七八個を混じ、孰れも形の整つた丸玉である。

(4) **硬玉勾玉聯繫飾**　これは棺の西方から出た游離勾玉二箇と、金色玻璃玉一箇の外、濃藍色丸玉三百餘箇及び眞珠玉一箇等を含んで、一連若くはそれ以上の佩飾を構成したものと推測されるものである。而して其の佩用の被葬者に關しては、前項手首飾りのそれと同じ問題を惹起するので

あつて、之は後章詳論しようと思ふ此一群の玉類中、一箇の勾玉は今ま多數の遺品中に混入して、之を檢出することが出來なくなつたが、他の一箇は長六分六厘の小形の勾玉であつて、色は、白綠交斑の不透明のもの、所謂硬玉の石皮の部分と稱せられる質である。其の形は頭部は小さく、腹部の大きいもので、餘り整美の作ではない、併し面白いのは發見の當初其の孔に打紐が遺存し、且つ紐の周圍に絹絲を纏いた痕の認められたことであつて、玉を連繫した紐條を偲ばしめる貴重な事實である。金色の丸玉（第四）は形は稍々歪んでゐるが、ほゞ透明な玻璃の內面に金箔を置いて、外面から金色を映發せしめたもので、羅州潘南面の甕棺內から見出された外、他に類例は鮮ない。

我々は金冠塚棺內から發見された玉類に於て、其の出土狀態から約四種の頸胸飾若くは手首飾を復原したが、固より其の或者は甚だ薄弱な推想に本づくものであり、なほ殘餘の玉類にも事實此等の裝飾をなしたものがないとは保し難いのである。併し少くとも最初の大形勾玉を中心とする頸胸飾に至つては、之を梁山古墳、昌寧古墳等の明確な例證によつて、

確かに頸部から長く胸部に垂れた裝飾と考へることは殆んど疑問を容れる餘地がないと信ずる。而して綠色の大勾玉を最下部に置き之に紅色の瑪瑙の管玉、切子玉、白玉及び藍色の瑠璃玉等を連繫した美しい配色は、梁山の遺品と對比して、我々に豐富なる想像を描かしむるのである。

身體の縮約した部分の一として、最も著しい頸部に裝飾物を附著し、又た此の頸飾（necklace）と之に懸繫せられる胸飾（pectoral）が世界古今の諸民族に最も廣く行はれるものである事は、今更事新しく說く迄もない處であるが、獸牙、木實其他の自然物から進んで、既に人造の珠玉が佩繫せられた程度にあつた此の新羅古代の人民が、其頸胸飾の主要なる中心的品目として勾玉を用ゐたことは最も興味ある事實である。勾玉の起源に關しては、狩獵の獲物たる獸歯牙に發すると云ふ學說は夙に一般の承認する處であり、從て本源的には是が幸運を齎す所の護符（amulet）的の意義を有したものと考へられるのである。[3]而して一方には後章述べるが如く、石製勾玉の本來の發生地は日本內地であつて、それが朝鮮南部へ傳へられたものと想像せられるに係らず、日本の古墳からは特殊的意義を頸胸飾中に有した勾玉の存在を確證する樣な資料を餘り耳にしない。[4]否な却つ

て單なる裝飾として他の玉類と配合せられたことを想像せしむる場合が多い樣に見ゐる。(四)然るに南鮮古墳に於いては、現に本古墳の遺品の示すが如く、勾玉の或者は頸胸飾に於て特殊の位置を占め、或は金冠の裝飾を加へ、或は胸部に特立して懸垂せられ、眞に何等かの護符的意義を有して居つたらしく見ゐる。尤も是は外邦遠地から渡來した(或は單に其の形式の玉として、裝飾品として特殊の好奇心をそゝつたものであるかも知れないが、孰れにせよ、其の格段なる位置を頸胸飾中に保有して居つたことは明瞭な事實である。而して斯の如き事實を我々に説明する一例として、本古墳の頸胸飾は最も重要なる資料と云はなければならぬ。

【註】

(1)大正九年十一月末頃、小川爾氏の發掘した慶州古墳の石槨内に於いて女子と推定せらるゝ被葬者の頸胸飾として佩用の原形を遺存した珍らしい例で、金の鈴、金の鉤金に通された玉は中央の勾玉の外に、切子玉、管玉、金の丸玉等があつて、勾玉を中心として左右均勢に配置してある。普門里の積石塚古墳に關しては原田淑人氏の報告が「大正七年度古蹟調査報告」第一冊に載つてゐる。

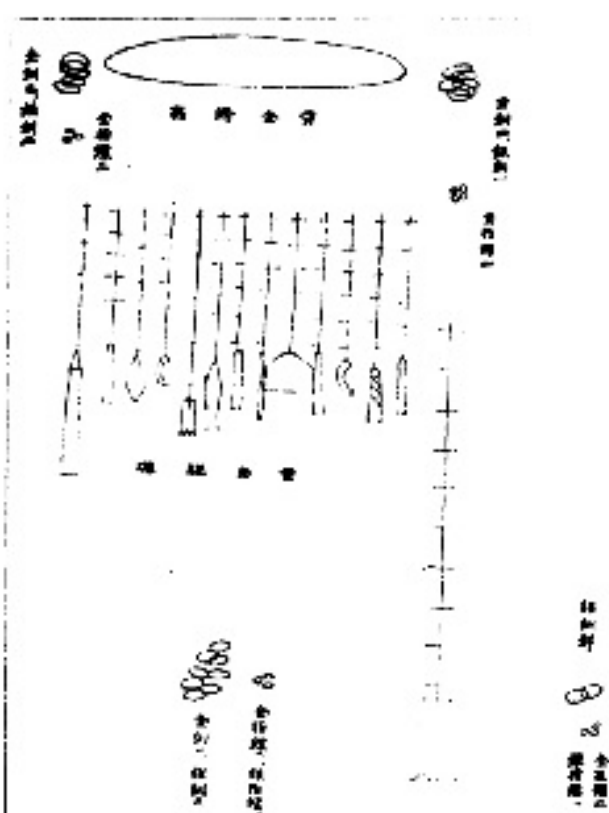
(2)全羅南道羅州潘南面古墳の甕棺から谷井委員發見の遺物中に、此の種の品があつて、今は總督府博物館に所藏する。

(3)勾玉の起源に關しては、故坪井博士「巴形銅器」(東京人類學會雜誌第四十圖號)等に說く所あり(なほ京都帝國大學文學部考古學研究報告第九冊七二頁註三參照)。天照大神から素戔嗚尊が勾玉を受けて、之に嚼じて天穗耳尊が生れられたとは、我が古事記、日本書紀、古語拾遺等に記されてゐる有名な神話的傳說である。

(4)日本内地に於いては勾玉頸部に彫飾を施したものを未だ發見しない。たゞ大和北葛城郡河合村佐味田古墳出土品(帝室博物館藏)には滑石製の大形勾玉の頸部に斜帶紋を刻して、冠飾と同じ具合を表はしたものがある位である。なほ此の勾玉頸飾と丁字頭との關係等に就いては後章玉類の條を見よ。

(5)日本古墳發見埴輪土偶によつて示さるゝ勾玉等佩用の狀態は、群馬縣女塚發見のそれの如く、多く勾玉を他の玉に連ねて頸飾としてある。

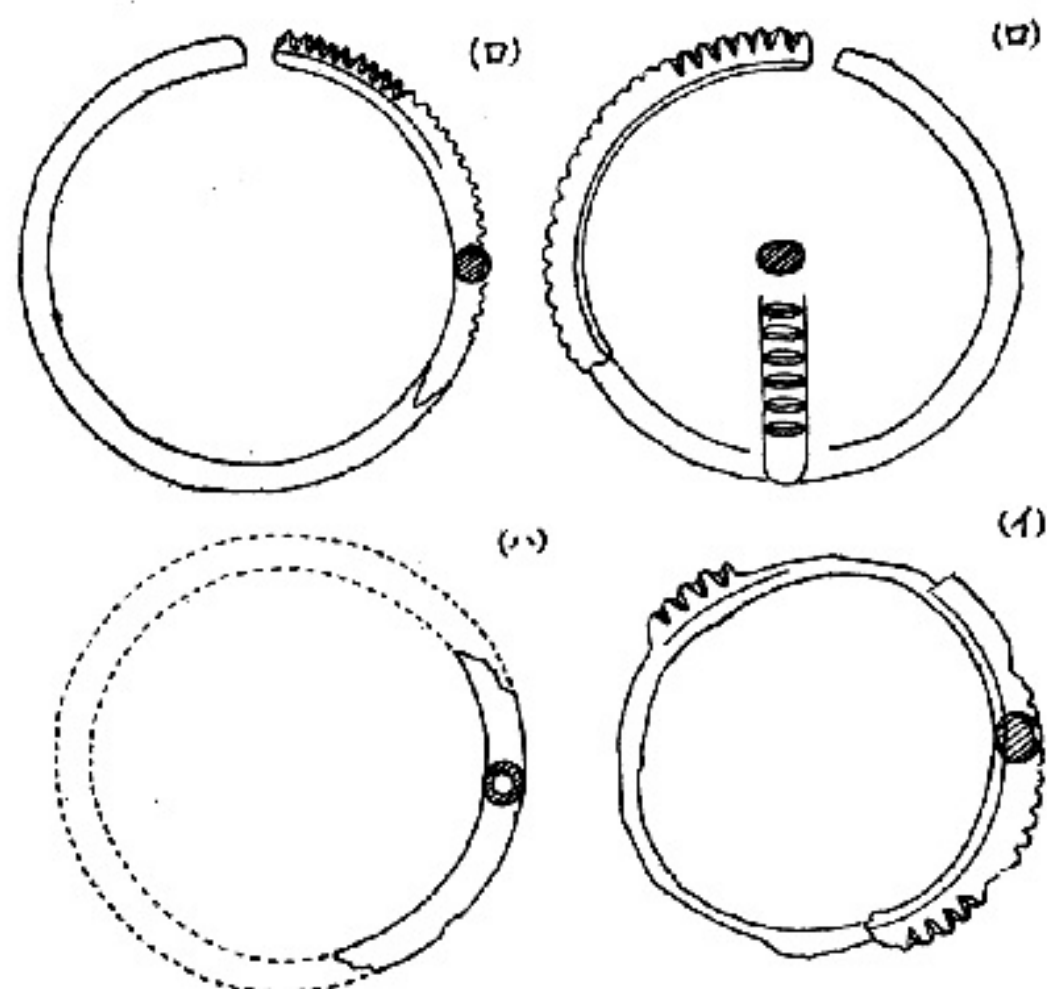
第三節　釧及指鐶　（圖版第三五―第三七）

手腕と手指の裝飾たる釧と指鐶とは、本古墳に於いて多數の遺品を發見した。即ち前者は二十七箇、後者は十六箇、釧は金銀相半ばしてゐるが指鐶は其の大部分金製である此等の遺品の發見部位が棺内であることは、諸氏の見證相一致する處で、凡そ二群に分れて居つたと云ふ。即ち釧の一群は棺の略ぼ中央に於いて、金製銙帶列の左右に在り、他は棺の西南隅に近く、腰佩具の端の左右に於いて發見せられ、指鐶の一部も亦た其の間に點在して居つたと云はれる。

第二十七圖　金冠塚釧及指鐶存在略圖　(Fig. 27)

此等のうち釧は發掘の際原狀の儘採集せられたので、其の集團嵌裝の

狀態を多少髣髴し得るものがある。圖版第三五に示す寫眞は卽ちそれであつて、(1)は棺の中央部にあつた右腕(北側)のもので、金釧三と銀釧二とを見、(2)は同じく左腕(南側)のもので、金釧四と銀釧一とを認める。(3)と(4)の兩者は棺の西南隅腰佩の端の邊に存在したもので、(3)には金釧五、銀釧三、(4)には全部銀釧を存してゐる(谷井氏に從へば、右隅から銀釧二箇環頭のものを發見したと云ひ、此の(4)に相當する様に見ゆるが其の數量の一致を缺く)以上のうち棺の中央部の左右に於いて發見せられた二群は、其の存在の位置等からしても、一箇體の人の腕飾と推測するに差支ないが、棺の北西隅發見のものは足釧と解するにあらざれば、別箇人の臂釧とする外は無い。是は已に他の遺物の際にも屢々接觸した重大な問題であるから、後章別論することにして、今ま次に一々の釧に就いて、其の資料に從つて一括して記述しよう。

(1)金釧(圖版第三五 第三六1―4)十二口。木棺腐朽の結果、積石の壓力を受けた爲めに多少の歪みを生じたものがあるが、凡て完形を保つてゐる。其大さは箇々少許の差違あるが、大體徑二寸五六分の間にあつて、太さ二分許の稍々楕圓中實の鐶の外面には、蛇腹狀の刻目を附してある。此の金釧には(イ)鐶體の兩端全く接合して完圓をなすものと(ロ)約二分の開きを存して缺圓をなすものとの兩種あつて、前者は總數中七口、後者は五を數へる。又た完圓の釧

第廿八圖　金冠塚發見金鐶鋼圖　(Fig. 28)

に在つては、蛇腹狀の刻目が側面から稍々上下の面に亙つてゐるに反して、缺圓のものに於いては單に側面に局限せられ、且つ幾分深目に刻せられてゐる外、鐶條の斷面も更に扁平を加へてゐる感があることは注意す可き點である。なほ此の兩種のものは、棺の中央部右側發見の如く完圓のみの場合と、同左側のものの如く全鐶一と缺鐶

三とを交へ、西南隅發見の如く、全鐶三に缺鐶二を混ずるが如き、區々の狀態に在つた。

(2) 銀釧（圖版第三六5—10）約十七口、其中略ぼ形を存するもの僅に四口、孰れも銹化甚しく、或は破碎して完全に取出すことが出來ないものであつたが、幸に原狀の儘採集せられてあつたから、其の破片と原狀とを精査して、漸く前記の概數を確め得たのである。其の形式に於いては、金釧の如く(イ)鐶條の端相合して全圓をなし、外面に蛇腹狀刻目を加へたもの四口、其の中圖示の二口は鐶徑二寸四分、鐶條（長徑三分弱）は中空稍々扁平を呈してゐる。(ロ)は鐶條の端に二分許の開きを有する缺圓のもの凡て七口、之には金釧の場合と同じく稍々深く蛇腹狀の刻目を附してあるが、稍々細かいものと粗いものとの二手が認められる。なほ以上二種の外銀釧に在つては、鐶條中空にして何等刻目のない素條の一種が存在する。其一例は徑約二寸六分を有してゐるが、此の類は四口分あつたと推測せられる。但しそれが全圓をなしてゐたか、將た缺圓のものであつたかは、殘缺の上から之を決定することが出來ない。

次に指鐶は已に述べた通り釧と介在して居つたのであるが、諸鹿氏の報する所に據れば、左腕(南側)の釧の西方、之と相距ること約五寸の處に金指鐶四箇の一群があつたと云ふ。更に其の側に於いて若干の距離を隔てゝ棺の西南隅の釧の西方に、金指鐶二、銀指鐶一を一群として出し、右腕(北側)の釧の附近に於いて金指鐶三、其の西方棺の西南隅に近く、驚きの指鐶群の北に接して金指鐶二、銀指鐶一を發見したと言はれてゐる。卽ち總計十六個中十三箇が、發見部位を明かにせられて居るのである(第二十七圖參照)今ま次に釧と同じく其の質料によつて區別して之を概記する。

(3) **金指鐶**(圖版第三七I—13) 十三箇。其の形狀によつて之を三類に分つことが出來る。(イ)は指の上面に當る部分に於いて、幅廣く稜角をなしたもので、此の部分に鋸齒狀の刻目ある細帶を鐶の中央に加飾してゐる。三者中尤も精巧な作品に屬するものであつて、其の數も亦た多數を占め、凡て九箇を數へる。(ロ)は凡て二箇、前者と同じ形であるが、件の鋸齒狀の細帶の加飾を缺き、其の製作も稍々薄手であるのみならず、金質も多く銀を交へて白味を呈してゐる。此の兩者は共に其の徑約六分七厘内外を示し、中指、食指、無名指等に篏む可き大さである。(ハ)は鐶帶が前後同一の幅を有し、表面に縱横の籠

目を刻したもので、其の徑は約六分、他のものに比して細く、寧ろ小指若しくは無名指に嵌めるに適當して居る。金色は前類と同じく白味を帶び、形も稍々整正を缺いてゐる。凡て二箇。

(4)銀指鐶(圖版第三七ノ14)現存三箇中、銹化して完形を認むべきもの僅に一箇、其の形式は金指鐶中(ロ)の類と同じく、徑約七分を示してゐる。釧の例から推すと、元とは尚ほ多數に存して居つたのが、銹化した爲失はれたかも知れない。

さて指鐶の遺品は日本內地古墳から其の發見に就いて未だ殆ど之を聞かないが、朝鮮に於いては往々其の例に接する。就中慶州皇南里夫婦塚同普門里、慶南梁山古墳等は其の著しいものである。[3]而して夫婦塚に於いては其の夫墓からも發見せられて居り、梁山古墳に於いては男子と思はるゝ遺體に於いて、各手五箇宛を發見したのであるから、指鐶の佩用は必しも女子のみに限らないことを肯定せしめる。それ故本古墳に於ける指鐶の存在は、被葬者の男女性を判別するに、何等の決定的材料とはならない。又た本古墳發見の現存十六箇の指鐶は、一箇體の人の佩物であるか、將た其れ以上の人のものに屬するかと云ふに、是は前の釧の問題其他とも

聯關して來るのであるが、其の出土狀態からは、寧ろ一箇體の佩用と見るには不穩當の樣である。併し一人にしても雙手の各指(恐らく拇指を除いた)に一箇宛、或は時に其れ以上の指鐶を嵌裝したと思はれることは本古墳に於いて一方の手邊に四箇の指鐶群の存在を見、又た梁山古墳に於ける既記の事實から推測せしむるのみならず、支那梁代の詩に「辭謝牀上女、還我十指鐶」の語などあるのに思ひ合されるのである。[3]

皇南里夫婦塚の指鐶は銀の素鐶であつたが、梁山のものは本古墳のそれと殆ど同じ銀製品であり、普門里古墳の金指鐶は本古墳金製品の(イ)類に似て、たゞ中央の鋸齒狀加飾を缺き、兩緣に細い蛇腹を加へたもので、極めて薄い製作である。それ故本古墳の指鐶中特に金製品の第一種の如きは、從來出土の諸例中最も見る可きものに屬すると言ふことが出來る。併し之を耳飾腰珮其他の裝飾品が、或は時に細金細工の精緻なる意匠手法を行るのに比して、寧ろ粗末に過ぎる感を我々に與へる。但し是は當時の好尚が指鐶に對しては、他の裝飾品に比して多くの注意を拂はれなかつた爲であろうか。

身體裝飾品として指鐶の佩用は、耳鐶臂釧と共に最も廣く世界各人種

間に行はれて居るもので、今日の文明諸國民間にも繼續してゐる事實は今更云ふ迄もない。併し此の指鐶は文化民族として最も早くから之を佩用した古代埃及人に於いても、又た其後希臘人羅馬人等に於いても、多くは裝飾と同時に寧ろ印章入指鐶(signet-ring)としての意義を長く保存して居つた。是は今日我々の間にも記臆に供へる爲に、指に紙布等を結ぶと同じく、指間に或る品物を附著することが、居常尤も注意を逸しない輕便な方法であることゝ深い關係があるらしく思はれる。此の備忘的動機に起源を有する指鐶は、支那に於いて、或は「戒指」と稱せられ、古くは後宮の妃妾進御の際に利用せられたと云はれることゝ考へ合はして、大なる興味を感ぜしめる。[3]但し指鐶の一起源として、弓を射る時に指に嵌める實用的のものなども存在して居つたことを忘れてはならない。[4]

支那に於ける指鐶の記事は、右に擧げた漢後宮の妃妾進御の際に用ゐられたものなどが最も早い例であるが、其の佩用の習俗は或は西方民族のそれによつて益々刺激せられて盛行するに至つたものかも知れない。而して所謂戒指的の意義よりも漸次純裝飾的のものとなり、女子の身體裝飾の特徴あるものとなつて行つたことは、當時の文學の上に現はれた

所によつても充分察することが出來る。(5)併し一方に於いて當時支那よりも西方諸國に於いて指環佩用の風俗は一層著しいものがあり、それ等の國民の間には寶石を鑲めたものがあつて、夫が支那に傳へられたこと、(6)又た彼等の間には埃及以來の印章入指環の傳統が存して居つたこと、羅馬に行はれた結婚指環の風習が行はれたことが文獻によつて知られる。(7)我々は朝鮮に於ける指環の風習が必しも支那に負ふ所のものとして考へる必要はないが、矢張り之に漢土の習俗の影響を認める方が穩當かと思ふのである。而して支那では女子間にのみ主として行はれた指環であつても、朝鮮に於いては男女間に通用するに至つたことも勿論有り得ることである。それにしても注意す可きことは、是等の指環の形式が直接西方のものとは關係のないことである。

次に釧も亦た指環と親緣ある身體裝飾として、諸人種間に普く行はれたもので、殊に其の應用は一層廣い。已に石器時代などに於いても、貝輪を作つて臂腕に嵌めたことが多く、(8)我が日本內地に於いても、其の上膊骨に嵌裝せられた儘の遺物さへ發見せられてゐる。又た內地の古墳からは釧は貝製石製、金屬製を主として、時には玻璃製に至る各種の材料のものを

出してゐる其の金屬製釧は本古墳發見品の如く、蛇腹樣の刻目を加へたものが多く、銅製が主で、斷面には種々の種類があり、中には周緣に鈴を附加した所謂鈴釧なるものを見る。朝鮮に於いては釧の遺品は既に早く漢代樂浪の古墳や、南鮮永川に於いて素鐶の遺品を出して居り、金冠塚のそれと相似た形式の金銅釧は、梁山、慶州、羅州、昌寧等の南鮮古墳から屢々發見せられ、本古墳の如き黄金製品も、梁山古墳の女子の右手に佩用せられた二例を見るのである。

支那に於ける釧（或は鐶とも云ふ）の起源は明かではないが「說文」には既に釧は臂環也と見え、古へは男女間に通用したことが記されてゐる。又た六朝以來盛に行はれたことは、當代の文學にも現はれ、繪畫彫刻等にも見え、一々之を例證する遑がないのみならず、(11)朝鮮の釧の起源は必しも支那に求めなくとも、自國固有の習俗の繼續として差支はない。但し是は金銀釧の製作に支那技術の影響を否拒する意味ではない。釧が臂腕に一箇のみならず、多數佩用せられることは、現代野蠻未開の民族間にも常に認められる所で、現に日本石器時代の遺跡からも一の腕に七口嵌めた實例を出して居る。それ(12)故に金冠塚に於いて、八口若しくは五口を一臂に佩せら

れて居た事實も敢て怪しむを須ゐないだゞ已述の如く、四群をなして出土した本古墳の釧は、若し被葬者が一箇體とすれば、其の中二群は之を足釧と解しなければならないことになる。足釧は足部を裸出して居る熱帶地方の民族などに於いて必しも絶無でない。例へば印度のタミール族(Tamimils)の如きは、足釧を嵌め、なほ足趾にも鐶を附けてある。併し斯の如き風習は朝鮮の氣候に於いて存在したと考へることは寧ろ普通でないかとも思はれる。なほ是等被葬者の單複の問題は已に言つた如く後章改めて說く積りである。

最後に述ぶべきことは、本古墳發見の釧の大多數に於いて見るが如き蛇腹狀、若しくは鋸齒狀の刻目のことである。是は誰人も推察する通り、アカガヒなどの如き貝の線狀ある貝殼から作つた貝輪の形の名殘であると思はれる。之に關しては日本內地古墳發見の石製模造品中の石環に類似の裝飾彫刻あるものが直ちに想ひ起され、此者の起源を貝輪に求められた高橋健自君の所說は面白いと思ふ。(18)又た若し此の蛇腹狀の刻目が貝輪の原形に發したとすれば、愈々以て件の釧は支那の如き大體が海濱に遠い國土の文化とは關係少なく、自發的に朝鮮南方或は內地に於いて發

生したと見る方が穩當と思はれる。

【註】

(1)皇南里夫婦塚に關しては「朝鮮古蹟圖譜」(第三)、普門里積石塚に關しては「大正七年度古蹟調査報告」中、原田委員の報告參照。

(2)梁横吹曲辭中、幽州馬客吟(樂府詩集、卷廿五)の雜式曲に「一寶花審金色、騎蛇銜珠丹、耐闘林上女、遲我十指環」とある。此の十指環は必しも十指に一個宛を嵌したと見るを要しない。たゞ雙手の指に嵌めた多數の指環と見れば宜い。

(3)詩經邶風靜女の詩に「靜女其孌、貽我彤管」とあり、毛傳に「古者后夫人、必有女史彤管之法、史不記、過其罪殺之、后妃群妾以禮御於君所、女史書其月日、授之以環、以進退之。生子月辰、則以金環、退之、當御者以銀環進之、著于左手、既御著于右手、事無大小、記以成法」とある。劉向の「五經要義」にも之を引いてゐるが大體同じである。明の都卬の「三餘贅筆」に「世俗以金銀爲環、置婦人指間謂之戒指」とあつて、先儒り上文を引いてゐる。

(4)Schurtz, Urgeschichte der Kultur (Leipzig, 1900) p. 394 にシュレンク氏 (Schrenk) を引いてアムール河域民族の弓射に用ゐる指環のことを述べてゐる。なほ此の類の實用的の指環は裁縫の際にも用ゐられることは、我々の熟知してゐる處である。

(5)六朝時代の文學に現はれた指環の二三の例として隋の丁六娘の曲辭國十索中に「二八好容顏、非意得相關、逢桑欲採折、尋枝倒懶攀、欲呈纖纖手、從郎索指環」(樂府詩集卷七九)と云ふのがあり。魏の繁欽の定情詩にも見えてゐる(玉臺新詠、卷一)。これは指環のみならず、劍其他の裝飾品の使用を述るものとして面白いから、其の詩中の大部分を左に抄録することにした。(なほ此等の資料に就いては、文學士浦川源吾君の寛恕に俟つ所の多いことを茲に銘記して置く)

「我出東門遊。邂逅承清塵。思君即幽房。侍寝執衣巾。
時無桑中契。迫此路側人。我既媚君姿。君亦悅我顏。
何以致拳拳。綰臂雙金環。何以致慇懃。約指一雙銀。
何以致區區。耳中雙明珠。何以致叩叩。香囊繫肘後。
何以致契闊。繞腕雙跳脫。何以結恩情。佩玉綴羅纓。
何以結中心。素縷連雙針。何以結相於。金薄畫搔頭。
何以慰別離。耳後玳瑁釵。何以答歡忻。紈素三條裙。
何以結愁悲。白絹雙中衣。」(下略)

此の中指に約するに一雙銀とあるは轉た今日朝鮮に於ける銀指環一雙を嵌する風俗を想起せしめる。

(6)外國から支那へ指環を獻じた記事としては呵羅單國が「元嘉七年、遣使獻金剛指環」(南史、卷七十八)とあり、呵毗黎國が「元嘉五年國王月愛遣使奉表、獻金剛指環、摩勒金環諸寶物」(同上)とあるのは其の一例である。

(7)印章指環のことは稍々遅れてゐるが、宋史(卷四八七)の三佛齊國傳に「其王以指環爲印、亦有中國文字、上章表、即用焉……開寶、七年又貢象牙乳香……水晶指環」云々と見えてゐる。結婚に際して約束として指環を贈ることは、晋書大宛傳に「大宛娶婦、先以同心指環爲聘」と見えてゐる。

(8)石器時代の貝輪(指環、腕環を含む)の研究に關しては Pfeiffer, Die Steinzeitliche Muschel-Technik (Jena, 1914) を參照せよ。

(9)備中津雲貝塚から其の實例を發見してゐる。(京都帝國大學考古學研究報告第五冊、圖版第十一參看)

(10)高橋健自君「鏡の研究」(考古學雜誌、第三卷第七號)參照。

(11)支那六朝の文學に現はれたるものとしては、已に註(5)に擧げた繁欽の詩中にも之を認めることが出來る。其他梁の簡文帝の行技賦に「王關將著章敬留綱」等の例がある。なほ同じく臂に卷く裝飾に跳脫(或は條脫)なるものがあることは、前掲繁欽の詩中にもあ

るが、之は連續した鎖ではなくて、「辭源」にあるが如く「以珍物連綴而成、臂環卽今之所謂鐲也」と解す可きであろう。繪畫彫刻の方面に於いては、六朝以來唐代の佛畫佛像等にその表現が豊富にあるが一々之を例示する煩を避ける。なほ原田淑人君「支那唐代の服飾」參照。

第二十九圖　六朝佩帶男俑

(Fig. 29)

第四節　銙帶類〔圖版第三八—第四〇〕

黄金製寶冠の西方、恰も木棺の中央部に於いて、南北に亘つて黄金製銙帶金具が、一揃略ぼ連續して、恰も帶を佩した狀態の儘に近く、其の下方(西方)に各種の金製腰佩類を垂繫した有樣で發見せられたことは、最も顯著なる事實であつて、發掘に携つた人々の觀察が悉く相一致してゐる。たゞ此の黄金製一具の外、銀製金、銅製の銙帶金具に至つては、散亂殘缺の狀態にあつて、棺内或は槨中隨處に於いて發見せられ、其の原位置を詳にすることが出來ないもの多いことを遺憾とする。我々は先づ此の黄金製銙帶から記述しよう。

(1) **金製透彫銙帶金具**(圖版第三八)一具、銙板卅九、鉸附銙板一、帶端金具一を完備し凡ての銙板を接續すれば、全長約三尺六寸に達するから、如何に著重ねた儀式衣服に於いても、なほ寛濶に過ぎ、恐くは腹部に於いて幾分か垂れ下がつた氣味に佩用せられたものと思はれる。此種の銙帶は既に南鮮各地の古墳(1)及内地のそれからも發見せられ(2)、殊に梁山に於いては歴然として帶を佩した狀態に於いて出土したこと、本古墳よりも一層明瞭であつて、

此等が鎊帶の金具であることは、今や秋毫の疑を容れる餘地は無い。鎊板の全部から鉸具、其他まで完存し、而かも帶までも遺存したものには「粱山古墳の二例及び昌寧のものなどがあるけれども、其の棺槨が破壞し積石の墜落して居つた本古墳の如きに於いて、斯くも完全なる保存を見たのは、全く其の質料の黄金であると云ふ稀有の事情に依るものと云はざるを得ない。

鎊板は鉸具附のものを加へて總て四十箇、同形の模様を打拔いた透彫の黄金板から成立ち、其の各箇は方形の帶板(即ち鎊)と、心葉形の垂飾の二部に分かたれる。方板(長八分幅九分)には忍冬唐草的の透彫を施し、下端からは舌を出して之を裏面に曲げ、垂飾の蝶番をなして居る。垂飾(長一寸九分幅一寸一分)は同じく唐草の透彫を施してあるが、此等の透彫は凡て各々多少の相違があり、正確に同一ではない。それ故是は板上に自由に手を以て模様を描き、之を鏨を以て打拔いたものと考へられる。なほ帶板には(後述左端の一箇を除き)右半部六ケ所、垂飾には三ケ所、針金(長約五分)を以て小さい圓板(徑三分)を加綴してある。斯の如く一方に偏して小飾片を附加し、他側に之を缺いたのは方板を連綴した際、餘りに煩瑣混雜するのを避けた用意に外ならないが、之にして

も此の圍板の加飾は既に稍々華麗に過ぎてゐる。方板には八ケ所(三者圖版)に鋲を打つて、帶上に固定せしめたのであるが、此の帶部は今ま殆んど亡んでしまつて、たゞ方板の裏面に綾布の殘痕を留めてゐる丈けである。併し之によつて元は兩面に綾布を張つた布造りのものであつて、革帶ではなかつたことが察せられる。[3]

帶端金具(鉈尾)は長さ約四寸の長方形に近い金板であるが、中程に至つて少しく細く、尖端に於いて再び擴がつてゐる(上圖版1圖)。其の周縁には連點鑿彫りで帶中に波狀紋と圈紋とを上下に表はしてゐる。是は日鮮其他の古代の金具に最も屢々見る處である。[4]此金具の元部は板が二枚となつて、此處に帶を挿み、三鋲を打つたのが認められる。[5]

鉸具(上圖版2圖)は銙板の一と蝶番を以て接合し、稍々忍冬唐草的の外廓を呈した頭を有してゐるが、此の鉸具の端は、却て帶端金具の先端の幅よりも狹いから、帶端金具は少しく之を横にして挿入せられたるものであり、鉸釘を通ず可き帶孔は、端金より離れて、右端の銙に近く穿たれたものと考へられる。而して端金を附した物餘りは之を前に垂下するか、或は他側に挿し込んだものであらう。[6]なほ注意す可きことは鉸具と連結した銙板

(圖版同上3)に於いては、他の銙板と左方に於いて接觸する處れが無いから、此者に限つて、小圓板の加飾を左半部にも及ぼし、帶板上に九、垂飾上に四箇を附してあることである。

(2)銀製透彫銙帶金具殘缺其一(圖版第九7―11三)缺損甚しいが、破片を精査すると現存の銙板約十箇、帶端金具一箇である。今ま其形の略ぼ殘つてゐる一箇に就いて見るに、銙板(方寸八分八厘)の透彫は、其の忍冬唐草の意匠前例とは稍々殊なり、垂飾(長一寸一分二厘 幅一寸一分七厘)は一層單簡で、鬚狀のものが現はされてゐる丈けである。併し全體の造りは殆んど同一であつて、たゞ方板上八箇の鋲を有する外、何等小圓板等の加飾を見ない。銙板には其の裏面に布片の附著してゐるものがある。帶端金具は尖端を缺損し、根元は鍥形を有して六鋲を打ち、此の部分は二重になつて帶端を挾む樣になつてゐる。此の銙帶金具の內殘缺數箇は、棺の西半部の右足に當る釧の邊から見出されたことが明かなので、資料の關係上甚だしく殘缺はしてゐるが、元は一腰の全き銙帶をなしたものであると思はれる。

(3)銀製透彫銙帶金具殘缺其二(圖版同上12―15)銙板一、同方板一、垂飾七、帶端金具一で銙板の略ぼ全形を認められるものは、僅に一箇に過ぎない。其の構造は

金製品と同じく、而かも方板（長九分二厘 幅一寸二厘）と垂飾（長一寸〇六厘 幅一寸二分二厘）上の透彫唐草の模樣まで、甚だしく相類似してゐる。帶端金具（長二寸四分 幅八分四厘）は完存して、其の根元は圓く二重になり、其上に四箇の鋲を打つてある。これ亦た前例の如く、殘缺は甚しいが矢張り一箇の銙帶をなしてゐた金具であらう。發見部位不明。

(4) 銀製透彫銙帶金具殘缺其三　銙板約八箇分を殘存してゐるが、非常に薄いもので（厚約一厘）銅鏽を夥しく出してゐるのは、銅分を多く含んでゐる爲か。方板には忍冬唐草の透彫があり、九箇の鋲を打つてある。其の一箇は遺存の布片から見ると、中心には太い麻の織物があり、兩側には綾布を張つてあつたことが分かり、これに依つて此の銙帶の帶部の原狀を幾分窺ふことが出來る。

(5) 銀製透彫銙帶金具殘缺其四（圖版第三九ー五）現存の銙板約十四箇分であるが、內四は略ぼ完存し、六は半損、其他は殘缺甚しいが、合して一具のものと成る。銙板の忍冬唐草的の透彫は空間濶く、垂飾には二箇の鬚狀のあるのが見られるのみである。之に相伴ふ可きものと思はれる銀製銙具の殘缺二は、共に甚しく破殘してゐるが、其形は金製品のそれを形式化した薄板造りで、平面に面取りを加へ、且つ本に近く小鐶を作り出したのを特色とする。

(6)金銅製透彫銙帶金具殘缺　僅に數葉の銙板の殘片を止むるのみであるが、其の透彫の唐草は前の銀製品殘缺其三のものと略ぼ同一で、たゞ少しく大形であつたらしい。(帶端殘飾 長二寸五分)

(7)銀製心葉形銙帶金具殘缺其一。(圖版第四〇ノ一ノ4)銙板五。今迄の諸例は金製品をはじめ、凡て銙板は透彫ある方形のものであつたが、本例以下の諸品は皆な透彫の無い心葉形のものである。本例に於ては心葉形板(長六分 六厘)は薄板の打出しに膨みを加へたもので、其の表面縁に沿ふて連粒狀の裝飾を附著し、三鋲を打つてある。鋲の長さから見ると、帶の厚は四厘位のものであつたらしい。此の心葉板の下方には、透彫銙板に於けると同じ樣に、裏面に折曲げた足があり、之に三累環狀の飾鐶を垂下してある。

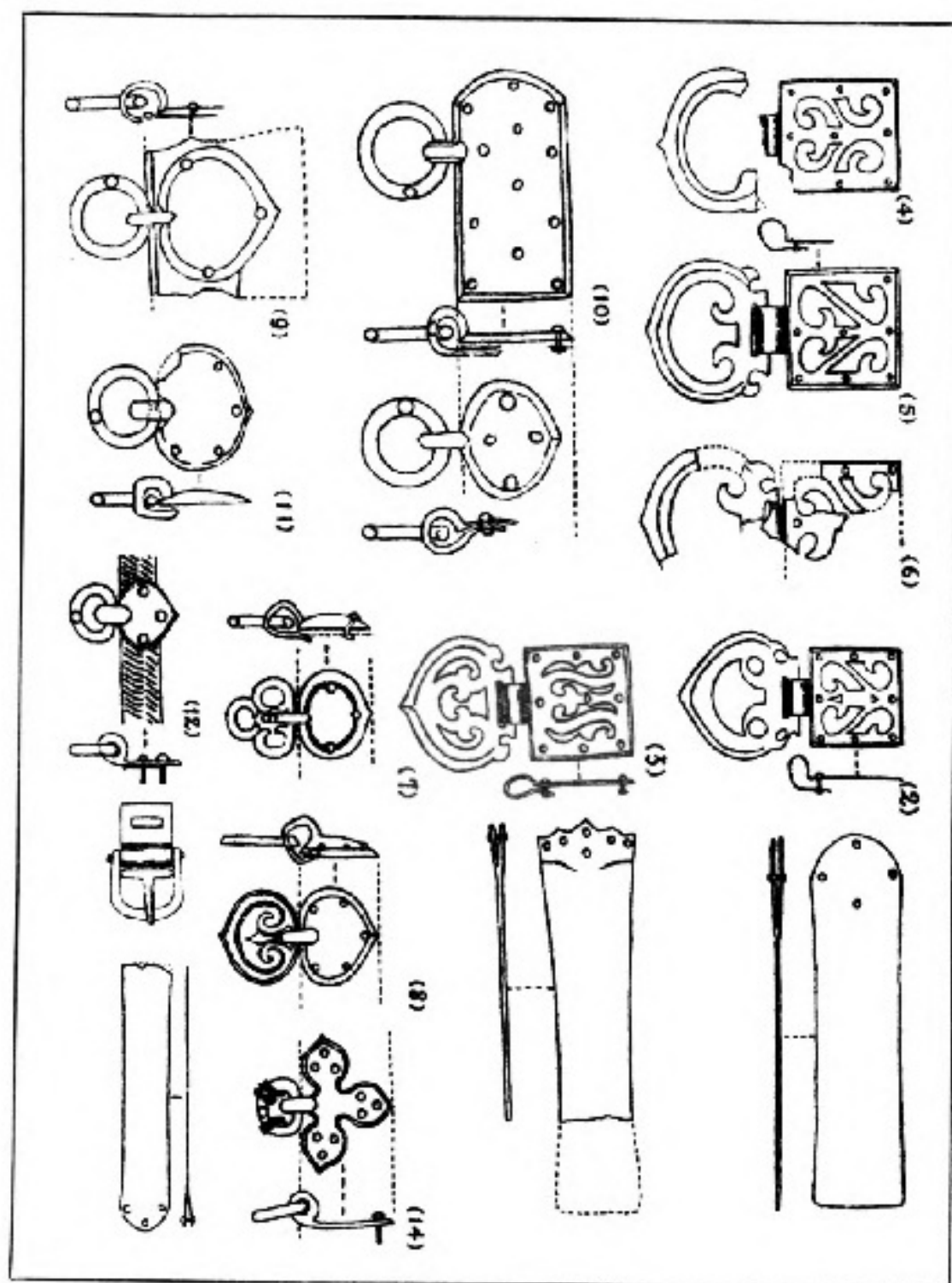
(8)銀製心葉形銙帶金具殘缺其二(圖版同上ノ6)銙板三箇分を存するが、形の完いのは一箇のみである。鍍金を施したらしい痕があり、垂飾には銅鏽が附いてゐる。構造は前例と同じく、帶板(長七分)はたゞ五鋲を打つた丈けで裝飾はないが、垂飾(長七分 六厘)には美しい忍冬唐草があり、此點に於いては寧ろ透彫板のものと相似てゐる。此の銙板金具に相伴ふ可きものと認められる帶端金具一は、今略ぼ完形を存してゐる。先端の圓くなつた細長いもので、(長二寸 六分)根元

は蝶番をなしてゐる。

(9)銀製心葉形銙帶金具殘缺其三(圖版第四〇9)銙板四箇分と、なほ其の殘片と見る可き鐶二箇とがある。心葉形銙板(幅一寸二分)には三鋲を打ち、素鐶を垂れてゐる。此の銙板は同じ銀製の薄板に打付けられてあつたことは、其の殘缺の存する處によつて推知することが出來る。此の種の銙板の遺品は原田氏發掘の普門里古墳をはじめ、谷井氏調査の呂寧古墳に其の例あり、殊に後者の第十一號墳には、銀帶に打附けたのが殘存して居つたことは、本遺品使用の原狀を推察せしむるに足るものがある。(挿圖廿九2)

(10)金銅製心葉形銙帶金具殘缺其一(圖版同上8)銙板一、端金具一。心葉形の銙板(幅一寸一分)には稍々大きな鋲四箇を打ち、太い素鐶を垂れ、端金具は一端弧狀を呈し、十二鋲を施してある。而して銙と同樣の素鐶を有してゐる。此等金具の裏面には中心に粗い麻布、金具に接して綾布の殘片を遺存し、又た裏面に銅の薄板を置いたことは、鐶を垂下する爲に折曲げた處に遺留してゐるのを以て知ることが出來る。

(11)金銅製心葉形銙帶金具殘缺其二(圖版同上17 18)銙板一(幅一寸一分)。素鐶が附いてゐる。別に同形の游離鐶一あるが、それは鍍銀である。

第三十二圖　金冠塚發見銀製金銅製銙帶金具圖　(Fig. 32)

(12)金銅製心葉形銙帶金具殘缺其三（圖版第四〇10—13）銙板二、游離鐶二。此類の遺品中最小形で、銙板（幅六分三厘）には三鋲あり、素鐶を垂れ、歯形狀の打出し紋ある銅の薄板（幅三分六厘）の上に打付けてある。是は或は銙帶の金具では無いかも知れないが、今ま形狀によつて此處に附記する。なは此の金具に附屬したと思はれる鉸具一箇あるが、其の說明は便宜後章鉸具の條に讓る。

(13)銀被銅製心葉形銙帶金具殘缺（圖版第四〇19 20）銙板一（幅一寸一分六厘）銙板は銀被せであるが、鐶は銀製である。銙上鋲はない。

(14)金銅製三葉形銙帶金具殘缺（圖版第四〇14 15）銙板二。是は三葉形の銙と思はれるものに（各端二紐あり）素鐶を附したもので、或は前者と共に銙帶の金具でないかも知れない。鐶には二條の布紐の如きものを通じた痕迹がある。これは梁山古墳に於いても其の例が注意せられて居る。

(15)銀製帶端金具（圖版同上16）一箇。長二寸三分五厘、（幅四分六厘）一端に三鋲を打ち、此部分は革挾みの爲め二重になつてゐる。其の幅は恰も(14)に擧げた銙板と略ぼ同一であるから、一對をなすものかと思はれるが、質料を殊にするのを見ると直に之を確められない。

以上心葉形三葉形の銙板を有する金具の一類は、若し其の形式によつ

て之を分ち、悉く銙帶の金具とすれば、凡そ八種の帶が存在して居つたこと、なる。銙板の數が帶の透彫金具のものに比して著しく少ないことから、或は其の一々を以て別種のものとすることに對して、疑問を挿む人なきを保し難いが、已に此種の帶金具を完全に出した梁山、昌寧及び慶州皆門里古墳等の實例の示す所に依ること、何れも銙板が五箇若しくは九箇に過ぎないのであるから、本古墳の遺品も各其の半數以上を存してゐることゝなつて、略ぼ同形の帶八種の存在を想定するのは必しも不穩當ではない。併しそれが果して眞の帶に用ゐられて居つたか否かに就いては、之を確にすることは困難である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

さて本古墳發見の金製銙帶と全然其の形制を同くする銀製銙帶金具の類が、既に南鮮各地の古墳から發見せられたことは、前に屢々指摘した通りであるが、(四)其の黃金製であることゝの外に、本古墳の例の如く三尺六寸にも餘る長いものに至つては、未だ曾て其の發見を聞かない。是は其の佩用者の特に大兵肥滿の人であつた故とも考へられるが、其の他の理由は之を緊縛せず、寬濶に佩した爲であろうと推測せられる。又た銙板は方形

第三十圖　銙帶復原圖　(Fig. 30)

透彫のものにあつては、帶の全長に亘る程の數を具へてゐることを常とするが、心葉形の銙鐶に至つては必しもさうでない。既に記した通り、普通は或る間隔を置いて附著したものであることは、呂寧校洞第十一號墳出土の銀銙帶が如實に示してゐる。(第三十圖)銙帶は支那の文獻には原田氏の擧げられた如く、隋代に天子の九鐶帶あり、唐代に同じく十三鐶帶なるものあり、更に文武官各々位に應じて、十三鐶以下九鐶に至る制が唐の上元の詔に見えてゐるが、(7)四十箇の多數を附飾したものが支那にあつたか否かは之を知ることが出來ない。朝鮮新羅に於ける銙帶も固より其型は大體支那の六朝から傳へたものであらうが、斯くも多數の銙を以て飾ることは、豪華を喜ぶ邊陲の王者貴族の間に發生した風

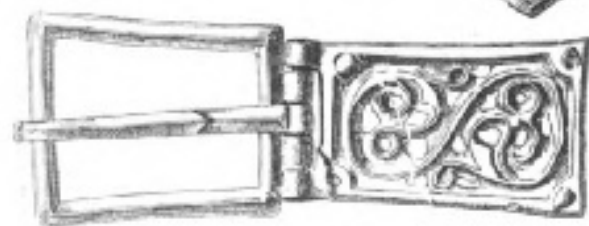
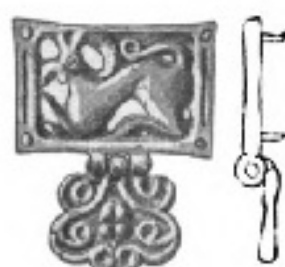
であることも考へられる「三國遺事」や「東國輿地勝覽」にある新羅眞平王（西紀五七九年—六三二）の天賜玉帶なるものは、鐫銙六十二を具へたことあるのは、稍々多きに過ぎるが、朝鮮に於ける斯の如く多數の銙を有する銙帶の在在を語るものではあるまいか。[8]

併し鐶に鐶を附したものは「唐書」李靖傳に「于闐玉帶十三銙、七方六刓、各附鐶、以金固之、所以佩者」[9]とあり、又た「夢溪筆談」に胡人の風俗を說いて「帶衣所垂鞢䪥、蓋欲佩弓劍帉帨算囊刀礪之類、自後雖去鞢䪥、猶存其環、環所以衘鞢䪥、如馬之鞦根、卽今之帶銙也」云々と云つてゐるが如く、[10]元來帶から他物を佩する爲に、之に結付ける用途から起つたものであつて、是は支那本土固有の風俗と見るよりも、寧ろ塞外胡人（主として土耳古族）の間に行はれたものが、周末戰國以後支那へ流傳するに至つたとする方が適當なことは、前引の文獻も之を暗示するのみならず、西方アルバニヤ、ハンガリヤ其他から發見せられる土耳古族の古い遺物の間にも、此種の帶銙の存在するのを見て推察することが出來る。[11]尤も此等土耳古族のものには、スキタイ風の動物模樣を銙上に現はしたものが多く、一種の特徵を發揮してゐることは云ふ迄もない。[12]（第三十一圖）

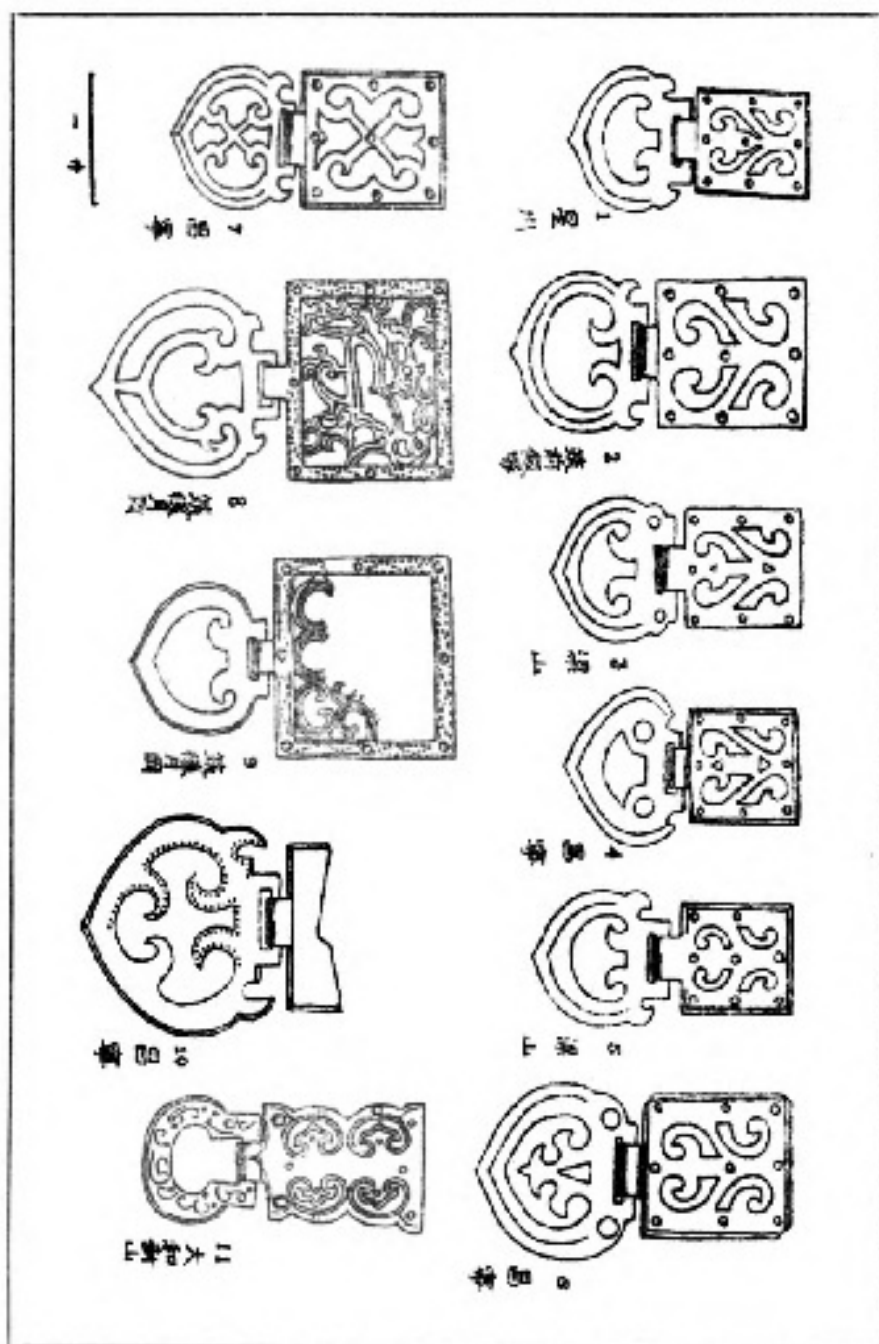
(1) Albania

(2) Csury (Hungary)

(3) Martély (Hungary)

(Fig. 31) 第三十一圖

匈牙利及アルバニヤ發見銙帶金具

(1) アルバニヤ發見
(2) 匈牙利クスニー發見
(3) 匈牙利マルテレー發見

第三十三圖　日本及朝鮮發見透彫銙帶金具圖　(Fig. 33)

又た實際的用途を有する銙鐶は、正に金冠塚發見の心葉形銙帶に於ける素鐶の如きものであつたに違ひない。已に斯る鐶に布紐を通じて或は縛してあつたらしい證跡のあるものが、本古墳等に遺存してゐるのである。これが次第に實用を離れて、裝飾的のものに發達變化し、遂に透彫を有する扁平な垂飾となり、銙板にも亦透彫を有するに至り、其の數も朝鮮に於いては金冠塚の例の如く、非常に多數となり、全然本來の意義を失つて、或は行歩搖曳して相映發するの美觀を賞し、或は相接觸して鏘然たる音響を發する處に、其の意義を求めるに至つたものと考へられる。而かも此の原始的素鐶、或は之に近い累鐶形のものを有する比較的少數の銙を附した帶と、上述の如きものとが並行して同時に行はれた事實は、本古墳に於いて兩種の遺物が共存することによつて之を證明してゐる。

此の透彫銙板の樣模の多くが、忍冬唐草の系統に出でゝ居り、是が支那六朝の美術、從つて日本の推古時代の美術品の上に多く見る所の裝飾模樣と酷似して居ることは、今更特に言ふ迄もない顯著なる事實であつて、我々は當代の佛像の細部、各種の工藝品上に、殆ど此等銙帶の透彫と同巧同意匠の透彫を屢々認めることである。而して是が西域を經て、遠く波斯、

東羅馬などのものと親緣のあるものであることも學者の夙に唱道してゐる處である。なほ此の種藝術の系統に就いては、かの蓮華紋等と共に後章更めて論述する機會があろう。

次に注意す可きことは鉸具(buckle)の應用である。是は支那に於いては、遺物として少くとも漢代から存在することは、かの樂浪古墳の華麗なる帶留などに依つて證することが出來るが、[13]西洋に於いては羅馬帝政時代に已に其の出現を見、廣くケルト、チウトン民族などの間にも用ゐられたものである。其の起源に就いては明かでは無いけれども、北歐に於いて人種移動の時代頃に發明せられたものであり、其の形は似てゐるが彼の留針(fibula)の如く青銅器時代から存在するものとは獨立のものであると考へる學者がある。[14]何れにせよ、是は特に革製の馬具、帶などに必要の裝置であつて、支那のものも羅馬のものも、共同の源流に溯る可きものに違ひない。それが朝鮮日本に流傳して銙帶や馬帶に認められることは、最興味ある文化史上の一現象と云ふ可きである。

扨て帶なるものは說文に、其の字形が「象繫佩之形」と云つてゐる樣に、佩を繫げるの用をなしたものであるが、此の銙帶の鐶からは、果して如何なる

ものが佩繫せられたであろうか、我々の金製銙帶に於いては、其の純裝飾的の透彫の垂飾には固より何等他物を附著した形跡なく、又た是は餘りに纖弱であつて、其れには不適當である。次節に述べる樣な腰佩類は此の金銙帶から垂下したかの如き形になつて發見せらたが、其實際に在つては、恐らく別の紐帶などによつて腰邊に懸繫せられたものらしく思はれる。其他心葉形の遺品に於ては佩物を繫げるに適しゐるが、本古墳に於いて其の實際の遺物を認めることは出來ない。(17)

要之、支那に於いては帶には古くから金銀玉などを以て裝飾した頗る華麗なものが存在して居つたことは、文獻の上からも之を證明し(18)、かの樂浪の古墳から出土した帶留金具の如きものも之を示してゐるが、此の種銙帶は其起源を寧ろ西北方民族に發すると見る可きものであつて、之が支那を經て、朝鮮に入り、日本にも流傳したのである。而して朝鮮に於ては特に一層華麗なものが、其民衆の趣味に合致して發生し(19)、遂に我々が見るが如き多數の銙を飾置し、剩へ其上に圓形の小飾まで附加するに至つた極端な例をも產出したのが、此の金冠塚の遺品であると云ふことが出來る。

【註】

(1)朝鮮古墳發見の銙帶金具の主なるものは次の通りである。

慶南梁山北亭洞古墳(馬場小川兩氏發掘)　透彫形　二具
同　昌寧校洞古墳(谷井氏發掘)　心葉形・透彫形　數具
慶北星州星山洞古墳群　透彫形・心葉形　二具
慶北大邱府達城公園古墳(小泉氏發掘)　一具
慶北慶州普門里古墳(原田氏發掘)　心葉形　一具
同　慶州金冠塚古墳　心葉形・透彫形　數具

(2)日本古墳發見の銙帶金具の主なるものは

大和北葛城郡大塚新山古墳　透彫形　一具
筑後浮羽郡吉井町月岡古墳　透彫形　一具
筑前嘉穗郡飯塚町櫨山古墳　透彫形　一具

等で、之に就いては梅原が「大和佐味田及新山古墳の研究」に述べた所があつたが、其後前記筑前櫨山古墳の遺品が新に附け加はつた。此者は殊に朝鮮古墳發見の透彫形のものと全く其の制を一にしてゐる(考古圖集、第廿八集)

(3)「説文」に「帶紳也、男子鞶帶、婦人絲帶、象繫佩之形、帶必有巾、故從巾」とあり、支那では男子は主として革帶を使用したものであり、朝鮮等に於いても固より同樣であつたと思はれるが、是は絕對的の區別では無く、從つて金冠塚の金銙帶佩用者は、此點丈けで女子であつたとは云ふことは出來ない。

(4)例へば近江水尾古墳發見の金銅製裝飾具等を見よ。(濱田、梅原「近江國高島郡水尾村の古墳」參照)

(5)帶端金具は鉈尾或は撻尾と云ふ。「唐書」車服志に高祖時代のことを記し「腰帶者搢垂頭於下、名曰鉈尾、取順下之義、一品二品銙以金、六品以上以犀、九品以上以銀、庶人以鐵」とある。なほ此の文の解釋に關しては、後出原田淑人君の著述を見よ。

(6)慶州發見の帶金銙具に就いて、我々は曾て同樣の問題に關して推測を試みたことがあつたが、其後の發見に本づいて新しく考定することを憚ひとする。(大正七年度古蹟調査報告中、濱田、梅原報告第八一—一〇頁參照)

(7)原田淑人君「支那唐代の服飾」(東京帝國大學文學部紀要、第四、第五七—九頁參照)

(8)「三國遺事」(卷二)天賜玉帶の條に「清泰四年丁酉五月、正承金傅獻鐫金粧玉排方腰帶一條、長十圍鐫銙六十二、曰是眞平王天賜帶也、太祖受之藏之內庫」とあり、又た「東國輿地勝覽」(卷廿一)玉帶の項に「鐫金粧玉排方腰帶、長十圍六十二銙也」とある。「東京雜記」(卷二)にも亦た見てゐる。

(9)前註原田君「支那唐代の服飾」所引參照。

(10)宋の沈括の「夢溪筆談」(卷一)に「中國衣冠自北齊以來、乃全用胡服窄袖、緋綠短衣長靿靴、有鞢䩞帶皆胡服也、窄袖利於馳射、短衣長靿皆便於涉草、胡人樂茂草常寢處其間、予使北時皆見之、雖王庭亦在深薦中、予至胡庭日、新雨過涉草、衣袴皆濡、唯胡人都無所霑」(以下本文所引)云々とある。高橋健自君亦た略ぼ我々と同意見を持つて居られることは、其の「束帶の起源」(中央史壇、第六卷第五號)によつて知ることを得た。

更に本文脱稿後王國維君は「古胡服考」(觀堂集林、卷十八)に於いて、其の該博なる考證を試み、胡服は趙武靈王の時はじめて支那へ流入したものであると説び、其の具帶卽ち帶なるものも胡服の制に出でたものであることを斷定してゐる。具帶とは卽ち黃金飾具帶(太平御覽等に具帶とあるは此)の略であつて、或は校飾革帶(吳志諸葛恪傳)或は鞢飾革帶(御覽所引吳錄)、金環參鏤帶(鄴中記)、金腰絡帶(金樓子)、鉤落帶(新舊唐書)と云ひ、胡名は郭落帶(或は鉤絡帶)と云ふとある。なほ後註13)を見よ。

(11)Strzygowski, Altai-Iran und Völkerwanderung. (Leipzig, 1917)に詳論せられてゐる。アルバニヤ、匈牙利等發見品中にあるものを見よ。(本篇第三十一圖)

(Fig. 34)

第三十四圖　支那新疆發見壁畫腰佩所著人物圖

（グリユンウエーデル氏書所載）

1. Idyqiŝähri 宮址 (Khans-Palast)
2.3. Murtuk (木頭溝) 附近
Bäzäkrik 寺址
4. Šorčuq 附近
5. Qumtura 附近 Ming-öi

(3) ベゼクリック寺址

(5) ベゼクリック第九號寺址

(12) 漢代に於いては、帯は主として帯鉤なるものを以て帯留にしたもので、鉸具を以て留め、斯の如き鐍を有するものは六朝に至つて盛行したものであらう。慶北、永川、釜山等發見の鳥形を有した帯鉤などは、即ち此の六朝以前の帯の形式に屬するもので、日本內地に於いては備中都窪郡新庄下榊山の古墳から此の形式のものが發見せられてゐる。

(13) 王國維君「古胡服考」によれば、鉸具は矢張り鉤帯と共に趙武靈王の時に胡風の流入したものとしてゐる。趙策に王が周紹に胡服衣冠具帯黄金師比を賜ふとある「師比」は張晏の說の如く、瑞獸の名ではなく、延篤の言の如く、即ち鐍或は鉸具の胡名である。或は胥紕(史記匈奴傳)犀毗(漢書)等に作つてゐるが、皆な同じく鮮卑の語から出でたものであると云ふ。なほ文學士白鳥庫吉君「東胡民族の起源」(史學雜誌、第十八編第四號)參照。

(14) Baldwin Brown, Arts & Crafts of our Teutonic Forefathers (London, 1910) p. 132.

(15) 支那に於ける各種の鈕飾帯のうちには、萬釘寶鈿(唐書楊素傳)萬釘寶鈿帯(唐書突厥傳)なるものがあるのは、聊か耳寄なものである。

(16) 「三國史記」(卷廿二)新羅の樂を叙したる條に「哀莊王八年奏樂、始奏思內琴、舞尺四人……、彩衣繡扇、並金鏤帶」とある。又た「新唐書」には高麗王の事ではあるが、其の服飾を叙いて「革帶皆金釦」と云つてゐる。

(17) 鉤帯の鉸具などの佩用法は、支那土耳其斯坦發見の壁畫中に明に見えてゐるものがあるのは大に參考とするに足るものがある(文獻註參照)

第五節 腰佩類 (一) 【圖版第四一―第四四】

棺の中央部に於いて金製銙帶と聯關して、十餘箇の金製飾物が、何れも西方を下にして並行の狀態を以て發見せられた事は、前に記した通りであつて、此の聳目の事實は衆人の觀察の相一致する處であるが、其の飾物相互の位置關係は、各人の報道の間に牴牾してゐる處が無いではない。併し現存の遺物に於いては、此の一揃の佩具は總計十七箇を數へることが出來、各箇の位置配列に關しては、各相違した報告の間にも亦た自ら共通點を見出すことが出來る。這種の腰部に懸繫した佩飾具は、從來昌寧、梁山古墳等に於いても類例を出しては居るが、斯の如く各種多樣の飾り物を具備し、それが一定の配列をなして歷然腰部と思はれる處に遺存したこと、特に其の凡てが銙帶金具と共に黃金を以て作られてゐる頗る華麗なるものである點に於いては、他に其の比を見ないと言つて宜しい。實に此の佩飾具の一揃へは前記の銙帶と共に、又た後述の黃金寶冠と共に、此の古墳出土品中最も人目を聳動したものであつた。今ま先づ一々の飾り物に就いて記述した後、其の配列の狀態順序に就いて考察しよう。

(1)杏•葉•形•繫•物•（圖版第一1）是は他の繫げ物から群を拔いて大形であつて、殆んご其の二倍大の長さ、卽ち全長一尺八寸六分餘、下端には長さ三寸八分の杏葉形若しくは鐸形とも稱す可き飾物を垂れて居る。是は薄い黃金板で作り、下方が稍々廣がつて弧を以て三尖端を作り、此部分に表裏には鋲留を以て帶狀の飾を附し、又は三弧帶の上邊三ヶ處に金の針金を以て圓鈴各一個を附けてある。次に杏葉形板の周緣には、下邊を除くの外、連點鏨彫りを以て二線の間に波狀線と圈點とを現し裝飾としてゐることは、轡きの金製銙帶の帶端金具の場合と同じである。なほ板の表面には二十九ヶ所に散點して、金線綟絲を以て小さい圓形の飾板を附加しあることも、金銙帶の銙板に於けると其の軌を一にしてゐる。

杏葉形飾板の上方には隋圓兩耳附舟坏狀の內窪の黃金飾十箇と、矩形の二枚合せの小片九箇とを蝶番を以て聯結し、其の最上端は鐶頭をなしゐる。此の舟坏形には周緣と中央とを合して七箇、矩形小板には中央に一箇の小圓板の加飾をなしてある事は、杏葉形飾物と同じ趣きであるが、此等は華蓐に過ぎた裝飾と云はなければならぬ。なほ矩形小板に九個の銙鋲を打つたのも、板留めの外に矢張り裝飾の意味を持たせたものである

う。

我々は此の杏葉形の飾物が果して何の形を模したものであるかを詳にしないが、たゞ已に實用を失つた裝飾のものであることは明かである。而して、馬具の杏葉飾り物が馬鐸に似てゐることが事實とすれば、是れ亦た鈴鐸形から發したのとするのが穩當かも知れない。

(2)短冊形繋飾（圖版第四四）六箇。長三寸三分（第六圖）先き廣がりの短冊形の飾物を先端に附し、其上には六箇の舟坏狀のものと矩形の板を交互に連絡してゐる處は、全く前者と同じく、其の最上端には小鐶を加へて、他物に繋ぐ便に供してある。たゞ本例に於いては此等のもの〻上に圓形板の加飾を點綴せず、矩形板は形の小さい爲めであろうか、其上にたゞ二個の實用上の鋲が打たれてあるのみである。此の短冊形のものは、或は總飾をしたものとも思はれるが、舟坏形のものは珠玉或は貝殼の形から出たものと考へられる。（殊に其の中窪の形は寧ろ貝說を興味あらしめる）兎に角中窪の舟坏形の飾片が、行歩轟曳して短冊形の飾りと共に陸離たる金色を閃映せしむるに頗る有力であつたに違ひない。全長は何れも一尺〇三四分の間にある。

（3）勾玉繫物（圖版第二一、四）二箇。共に六箇の舟坏狀片と五箇の矩形板とを交結した連條を有し、其の上端に各一箇の針金の鐶を附し、下端には主飾たる勾玉各一箇を二條の針金を以て懸垂して居る。勾玉は兩者共に鈍い弧形を呈した長手の者で、勾玉としては醜い形と云はねばならぬ。其一（1圖）は青綠色の硬玉製勾玉の頭部を薄い金葉を以て被せ、孔の部分丈け飾りが特に突起して居る。而して頭部には丁字の切目が金葉の上にも現はれ、孔と金冠の緣とには蛇腹紋を附けて居る。之に反して其二（2圖）は勾玉全部を薄い黃金を以て造り、頭部には同じく金被せを加へたもので、此の部分には支那古銅器などに屢々現れて來る樣な雙鳳の打出し模樣が施されゐる。勾玉が頸胸部の佩として用ゐられたことは、本古墳をはじめ慶州其他の古墳から金冠勾玉の出土したによつて之を證せられることは既述の通りであるが、其の腰佩中に存するものは本例を以て最初とする。なほ此等の勾玉に關しては別節に於いて再說する積りである。

（4）透彫圭形繫物（圖版第四二、4）これ亦た前諸例と同樣の舟坏形と矩形とを交結した連條の一端に、直方形の兩肩を殺いだ樣な圭形の打抜き透彫の合はせ板を附したものである。これは竪二寸三分（橫一寸八分餘）表裏共に緣を折曲げて

飾り、其の上半部には更に細い覆輪を加へてある。透彫模樣の「モチーフ」は何か獸形を模樣化したものと思はれるが、表裏二枚の板の間には、僅かの際があつて、之に何等か織布類の物質が喰み出して居つたらしく、發掘の當初にはなほ其の遺存が認められた。或は團扇等に類したものゝ柄かと考へる人もあるが、他の飾物との長さから察すると、此の挾まれた品物は、三寸以上も長く出て居つたものでは無く、たゞ大體この大さの飾物であつたらしいが、此の圭形の飾物の形の起源に就いては未だ考へ及ばない。全長九寸三分ある。（此の圭形透彫品の下に何か革製のものが存在して居つたと見え、透彫模樣が鮮に印したものが殘つて居つた。）

(5) **毛拔形繫物**（圖版第四三2）前諸品と同樣の連條の一端に、長さ四寸の下膨みの黃金製鑷子が垂下せられてある。但し本繫物に於いては舟坏形と矩形板とは共に六箇から成立つてゐる。鑷子の頭部は中央蛇腹を繞らした鈴形鈕を附し、之に二條の針金を通じて連條に結付けてある。此の鑷子の先端は幅廣く、接合面は曲りの無い一文字を成てゐるが、製作は頑丈で實用にも堪ゑ得る樣に見ゑる。(四)

(6) **魚形繫物**（圖版第四三3）魚形は長四寸一分五厘、黃金の薄板で作り、兩側に鰭各二箇を出し、鏨を以て鱗及び他の細部を連點を以て打出してある。連條は前

者と同式であるが、たゞ魚形の垂下法は矩形板から針金を以てせず、直に金具に接續する樣になつてゐる。而して魚形は誤て表裏を逆にして垂れてゐるかの樣に認められる。全長一尺一寸三分。

(7) 透彫附兩脚形繫物(圖版第四三4)同じく六箇の舟坏形と五箇の矩形板とを連絛とし、其の下に小鐶を以て透彫唐草模樣の下端が内殺ぎの兩脚をなした飾物を垂れてゐる。此の飾物は長さ四寸三分あつて、上端は中實の球形をなしてゐるが、其の體は薄板を切り出した者で、是は兩脚は「ピック」か、或は鍬などの形から出でゝ、全く裝飾的のものとなつたのかと思はれる。谷井委員が發掘せられた呂寧校洞の第八十九號墳からは、之に似た銀製の飾物が出てゐるが、それは脚部が一本になつて居る。此の場合は何か「ピック」を模したものに疑ない。

以上の外同じ連絛であるが、下端の繫げ物を失つた一箇(圖版第四三3)がある。舟坏形金具六箇と蝶番のある矩形板五箇とから成つて、上下兩端に小鐶各一個を附したもので現存全長六寸八分ある。繫げ物が如何なる者で有たか、確かにすることを得ないが、出土品中に蛇腹の裝飾を加へた短い圓筒で、上部に鐶があり、下方に何か他の物質を附けたかと思はれる黃金製品

がつたから或は之れかも知れない。なほ此の品に就いては後章更めて說明する。又た此等の諸品は孰れも舟坏形を主にした連條を以て飾り物を垂繫したものであつて、第一の杏葉形の格段に大形であるのを除いて、凡て一尺乃至一尺三寸の略ぼ相似た長さを有し、且つ製作も同工に出でてゐる所から、是等十三箇の小形品は少くとも狹義の一具を形成して居つたものとして誤が無からう。なほ起つて來る問題は此の舟坏形連條は、果して其の內窪の方を表にして居つたか、或は其の反對であつたかと云ふことである。或る人は今日朝鮮現用の此種の品に於いて內窪の方に絹の袷を張り、之を裏にして居ると云ふ所から、此等の遺品に於いてもさうであつたらうと說くが、我々は第一に大形杏葉形繫物に於いて、內窪の方に小圓形の飾を施してあること、第二に矩形部の鋲留が其の方を表にしてゐること、第三に內窪の方を裏にしては衣服に接觸して滑りの惡いこと、第四には內窪の方を表にすることによつて、始めて光線の反射の面白い功果を得られると云ふ諸理由からして、內窪の方を表にして居つたと信ずるものである。

(8) **茄子形玻璃球繫物**（圖版第三一）これは瑠璃色の長さ二寸三分の長い茄子形の

玻璃製球子を針金の網中に收めたものである。此の球子の端には綵が蛇腹となつた金製圓錐形の外被せが有つて、それに穿たれた小孔から出て居る網の針金には一々細かい切子の裝飾を施し、頭部金物連條の先端の小球を貫いて、紐鎖の鐶に連絡して居るのは、茄子形飾物の脫落を防ぐ細心な手法と思はれる。此の茄子形は今ま破碎して居るが、其の製作は頗る薄手(厚一厘)で、內部は空洞になつてある。斯の如く金網中に密閉した球子は、其中に何等かの物質を出入せしめることは出來ないから、たゞ玻璃の形狀と色澤とを賞美する爲の飾に過ぎないと考へられる。但し今日と雖も茄子形の玻璃球が珮飾として朝鮮に行はれ、內地の兒童間にも往々其の風を存する處から見れば、元は之に一種の護符的の意義があつたものであらうか。此の飾り物は四條の針金を以て連組した兵庫鎖によつて懸垂せられてゐる。此の鎖の端には半球形の合羽形を重ね、小瓔珞の飾を附し、また小鐶を具へて帶部に懸垂す可く作られてゐるが、なほ其の鎖中の四ケ處には五つの心葉形飾片を附した球形の緒締めが綴められてある。全長一尺四分五厘。

(9)**透彫筐形繋物**(圖版第四一ノ2)筐形は長二寸(幅九分、厚三分)心持ち下膨れのした細長いもの

で、周緣には少し面取りがある。筐體の下端は櫛齒狀をなして開放せられてゐるが、其の上半部には忍冬唐草的の透彫模樣を表はし、別に上部に近くと前後兩面には、栓狀の突起がある。注意す可きことは、此の筐の頂部鎖に連續せしめる爲の金具の構造が頗る頑丈な點と、透彫部の下中央には一箇の孔が表裏共に穿たれてゐることである。それで此の筐形のものは兎に角下方開口部から何等かの物體を挿入して、此孔によつて脫落を防いだものであることが分かる。然るに此の筐內に木質の殘片がなほ遺存してゐるので、是が少くとも其挿入物の一部分であつたことは明瞭である。其の果して何物であるかは容易に決定し兼ねるが、今日朝鮮に於いて婦人の佩物中矢張り透彫などの直方形の小筐があり、是は香筐であると云ふ所から推測すれば、此の遺品も或は香に關するものであるまいか。

此の飾筐と酷似して居るものは次節に述べる本古墳出土の銀製品の外、なほ昌寧校洞第八十九號墳から、同じく銀製品一箇を發見してゐる。此の筐形を繫げる兵庫鎖は、前の茄子形の場合よりも甚だ太く且つ複雜なものであり、又た上下兩端の金鐶も太い大きなものであることは、銀製品の場合と同じく注意す可き點である。鎖に附した緒締め樣の飾り玉は、上

下兩端と其の中間の三ケ處に置き、心葉形の瓔珞が加へられてゐる。全長一尺二寸三分。

(10) **印籠形繋物**(圖版第四一ノ3)これは長七寸の細長い扁平八角體の印籠形の器物で、下方に至つて稍々太くなり、上部約六分の一の長が蓋部をなしてゐる。蓋頂と器底とには飾鋲附の底があり、蓋の上下端と器底の緣には蛇腹狀の細帶を繞らしてゐるが、器體には何等の裝飾もなく、却つて清楚な感を與へる。此の印籠形のものを垂下する鎖は、前例と相似てゐるが、彼の如く一條の鎖に飾球を貫通したものでは無い。卽ち長さ一寸二分許の鎖の上下に飾球を配し、金の針金二條を以て兩者を結び付けたもので、鎖は四條、飾玉は五箇となつてゐる。而して其の下端の飾玉を通ずる條線に、別に三條の針金を綟つて繩の如くしたものを雙方に分派して、印籠形の蓋器の兩側に沿ひ、器底から約三分の一の高さの邊に至つてゐる。此の金繩は器體に於いて三箇、蓋に於いて二箇の小鐶釘を通過し、蓋を開閉しても舊位置に復して、容易に形を整へ得る樣に巧に作られてゐる。なほ此の繩は蓋の上部分岐部に於いては、其の上を細い管を以て被ひ、下端器側に於いては、別に二枚の金の薄板を穿孔し、之を二分して四條の綟れた總狀の飾りを

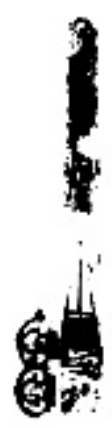
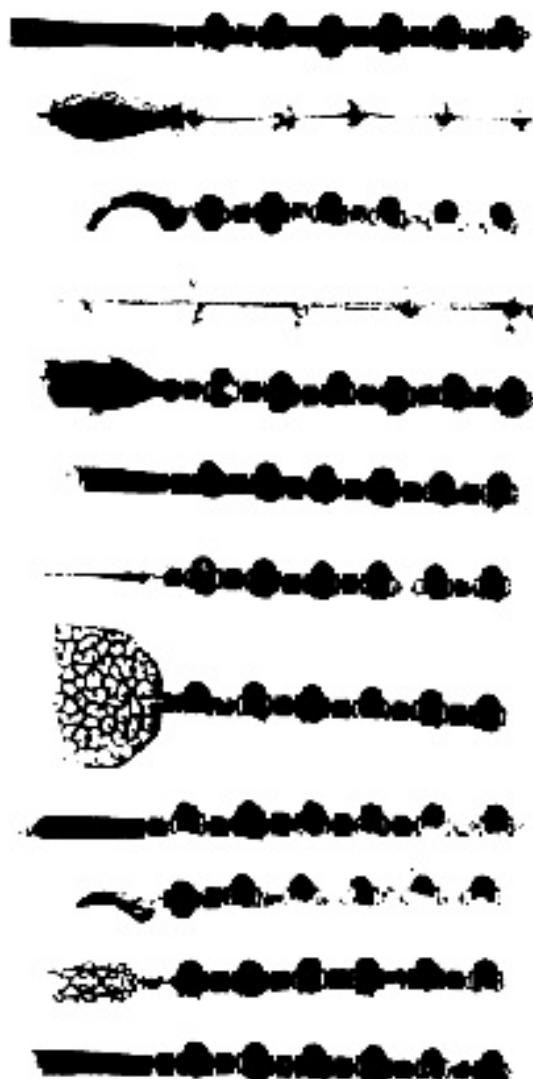
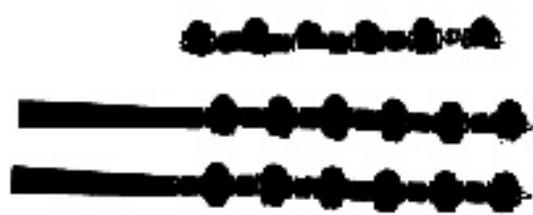
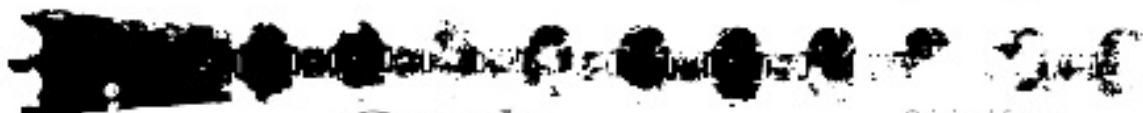
加へて裝飾してあるのは、如何にもデリケートな意匠と言はなければならない。器と蓋の內部には今なほ木質が充實して居り、蓋の下面から打つけた鋲は木質を貫いて居る。元來何者を容れた器物であるか、之を明にすることは困難であるが、矢張り後世の印籠と同じく藥の如きものを貯へる爲めに使用せられた器物の形から來たものかとも思はれるが、それにしては餘りに深く細きに過ぎる嫌はある。朝鮮の學者などのうちには、現用佩物の例から推して、之を刀子の類であろうとする人もあるが、我々は其の形狀や構造等から考へて、此の說に贊成するに躊躇する。全長一尺四寸四分五厘。

以上茄子形繫物以下の四品は、其の連條に太い細いの差はあり、連接の工合を殊にして居るものはあるが、何れも飾球を附した兵庫鎖から成立ち、一具に屬するものと考へられる。併し此等は後述の如く鬻きの舟坏狀の連條を有する諸品と共に、相交つて並列して居つたことは、此の二種の連條ある佩物を一揃として一の腰部に垂下せられて居つた事實を語るものに外ならない。又た以上兩揃の繫物は、孰れも其の連條の上端に小さい鐶か、若しくは針金を重ねて鐶狀にしたものを附著して、他物に貫かれ

諸鹿君粧畫ニ見ヘザル分三箇

諸鹿央雄君粧畫

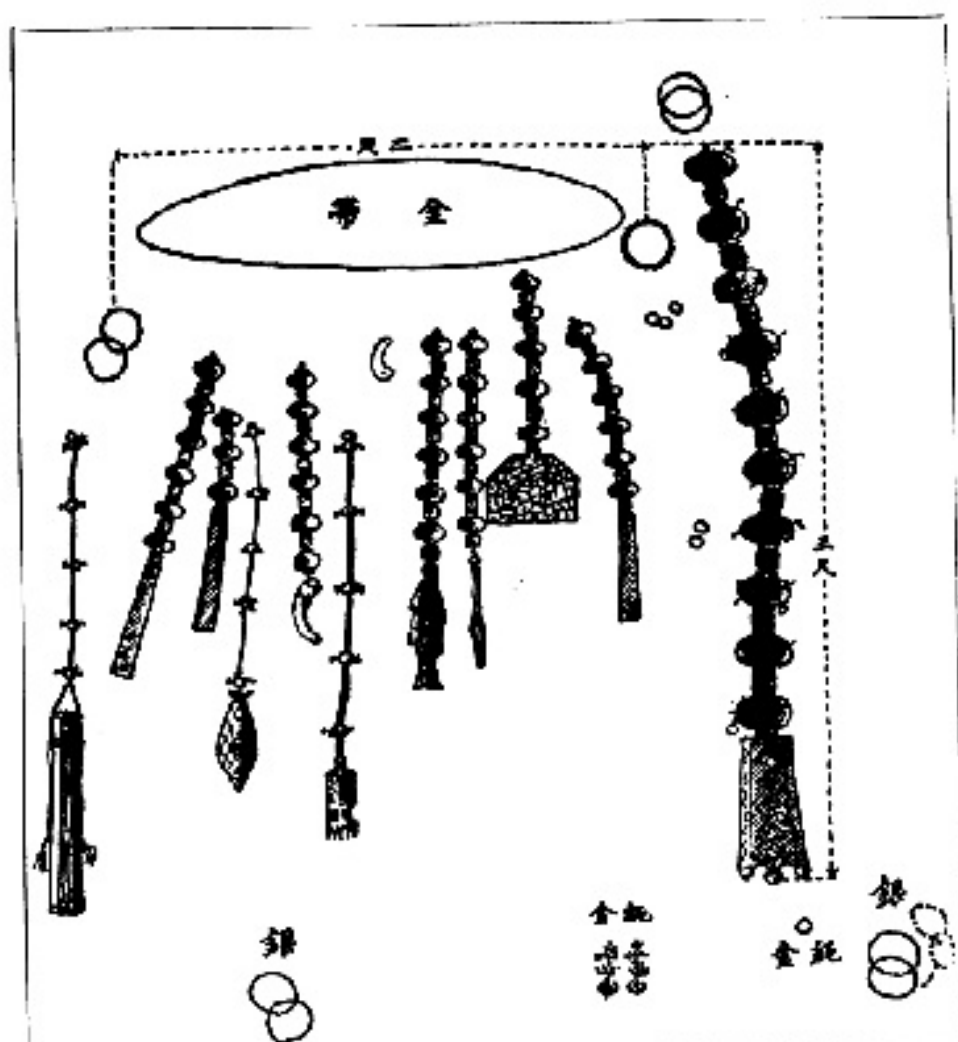
金冠塚發見金製腰珮配列想像圖

第二十六圖 (Fig. 26)

る樣になつてゐるが、是は既に述べた如く鎊帶の鐶に直接に繋げられたものでは無く、恐らくは今まで已に亡失してしまつた紐帶によつて連貫せられて居つたものであろう。

＊　＊　＊　＊　＊

扨て此等十數箇の腰佩繋げ物が、棺内被葬者の腰部に如何なる順序に配列せられて居つたかと云ふと、不幸にして我々は各種齟齬した資料を批判して考定する外はない。卽ち一は諸鹿氏が特に野島將君に囑して圖寫せしめたもの（第三十六圖）、二は岩見署長が職務上の必要から吉田巡査部長に描かしめたもの（附錄七圖b）、三は渡理慶州古蹟保存會書記の見取圖（第卅七圖a）である。此の三者が同一物を寫したに係らず、吉田氏の擧ぐる處は十五點、野島氏のは十四點、渡理氏のは十一點に過ぎないのみならず、相互の順列にも一致しないものが見え、其の上下の位置に就いても渡理氏の如く極めて不揃に現はされたものがあり、他の二者の如く上部を整齊に示したものもある。それで何れが果して實際を寫して居るかを知るに苦しむのである。

併し此等三種の見取圖の由來を考へ、諸鹿氏の說明を聞くと、渡理氏の圖は特に一々の佩物の實狀を寫すに意を用ゐた爲め、表面の著しいもの

から著手して、終に全部に亘ることを得なかつたものであつたとの事であれば、其の數に於いて缺漏はあつても、個々の佩物上下の位置は却つて此の渡理氏の圖が眞を傳へたものであると見る可く、各珮の順序に於いては、野島氏の寫生が最も據る可きものと考へられる。

金冠塚發見金製腰珮配列圖（渡理氏見取圖）

第三十七圖（イ）　(Fig. 37 a)

野島氏に從ふと、其の順序は(1)杏葉大形品を右端として、(2)短册形(3)兩脚形、(4)金製勾玉、(5)短册形、(6)圭形

金冠塚發見金製腰佩配列圖(吉田氏見取圖)

第三十七圖(ロ) (Fig. 37 b)

透形、(7)毛拔形、(8)短册形、(9)魚形(10)筐形(11)硬玉勾玉(12)茄子形(13)短册形(14)印籠形となつてゐる。吉田巡査部長の圖は之に比べると、筐形と石勾玉との位置が逆となり、兩脚形が却つて、大形杏葉形の右方に來て居るなどの相違はあるが、印籠形が左端にあることや、金勾玉から魚形に至る順序などは全く相一致し、渡理氏の見取圖も亦た特殊品の順位は此等と相似た處が多い。それで我々は是等資料によつて先づ大體佩物の順序を推察することが出來る。

次に是等多數の佩物が圖に在る樣に、被葬者の身體の前面のみに懸繫せられたものであるか否かの問題が生ずる。腰の兩側の幅は如何に廣く

見ても二尺にも達しない位であるのに、此間に、十七箇の佩物を繫げては餘りに込み合ひ、重果することを避けることは六ケ敷しい。而かも他方背面に何等の飾物が無いとすれば、其間の「コントラスト」は餘りに太しきに失する。それで今ま是等の遺物が發掘せられた際、前面背面とも固より略ぼ同一の平面に出現したであらうが、當初佩繫の場合には或る佩物は背面に方つて懸垂せられたものと見るのは決して不稽では無い。斯く考へると或は前記渡理氏の見取圖か佩物の數に於いて缺けてゐるのは、稍々下の水平面に於ける發見品を錄さなかつたものとも思はれる。而して若し此の推測が正しいとすれば、缺漏したのは何れも短册形のものであつて、特殊のものに至つては悉く表はされてゐる處は、或は後者が前面に佩繫せられ、短册形の如き單純なものが背面に繫げられたものと解せられるのである。又杏葉形の大形品一箇は特に右脇に格別の意義を具へて懸けられたのであつて、同じ例は梁山古墳發見の繫佩二具に於ても認められたのである。卽ち同古墳では、佩物中矢張り特別の大形のものが共に遺骸右側の腰部に於いて見出されてゐるのは、佩用の位置と意義とを考ふる上に注意すべき事實と考へられる。

なほ注意に値することは、是等腰珮に元と綾布片の附著して居つた亊實である。我々の初めて調査した際には、それが明に認めらたのであつて、特に硬玉勾玉と圭形繋げ物の舟坏連絛と、大形杏葉形のそれとに於いて著しきものがあり、綾絹は紅と紺との交織であることを察し得た。是は腰珮の下にあつた被葬者の衣服を徴するに最も有力なる資料でなければならぬ。

以上の諸品は特に指摘しない限り、全部赤味を帶びた良質の黃金を以て作られ、其の製作は決して粗造の假器では無く、單に葬儀にのみ用ゐられた品物とは見ることは出來ない。其の生前にも正しく佩用せられた實用の品であることは殆ど疑を容れる餘地はない。而かも今なほ何等大した破損も見ず、燦然として製作當時の美くしきと鮮きさとを保つてある。さて斯くの如き腰珮を佩用して居つた狀態は、朝鮮は固より支那古代の繪畫彫刻等に現はされたものを多く見ないのであるが、たゞ珍らしいのは唐代のものであろうが、支那土耳其斯坦の高昌 (Cho-tscho)、木頭溝 (Murtuk) 附近の遺跡に於いてグリユンエーデル及ル・コツク兩氏が發見した壁畫中の回紇人の風俗に之を認めることが出來、而かも其の珮物中には魚形

其他各種のものがあり、各人物各々趣を異にしてゐることである。(3)

併し此の壁畫の人物の佩物は、固より此の金冠塚の遺物に比して、其の數量種類等に於いて及ぶ可くもない。我々は斯くの如き多數の腰佩と、他の無數の裝飾物を身體に裝つた新羅の王者が、如何に煩褥の趣味と華麗の裝飾とを誇り、其の全財産を身體に著けて、重苦しい腰を屈め勝ちにしてゐたかを想像するを禁じ得ないと同時に、是は財産を投資する方法中、未開時代に於ける最も安全なるものとして、廣く世界に行はれてゐるものであることを認めるに於いて、大なる興味を感ずるのである。(4)

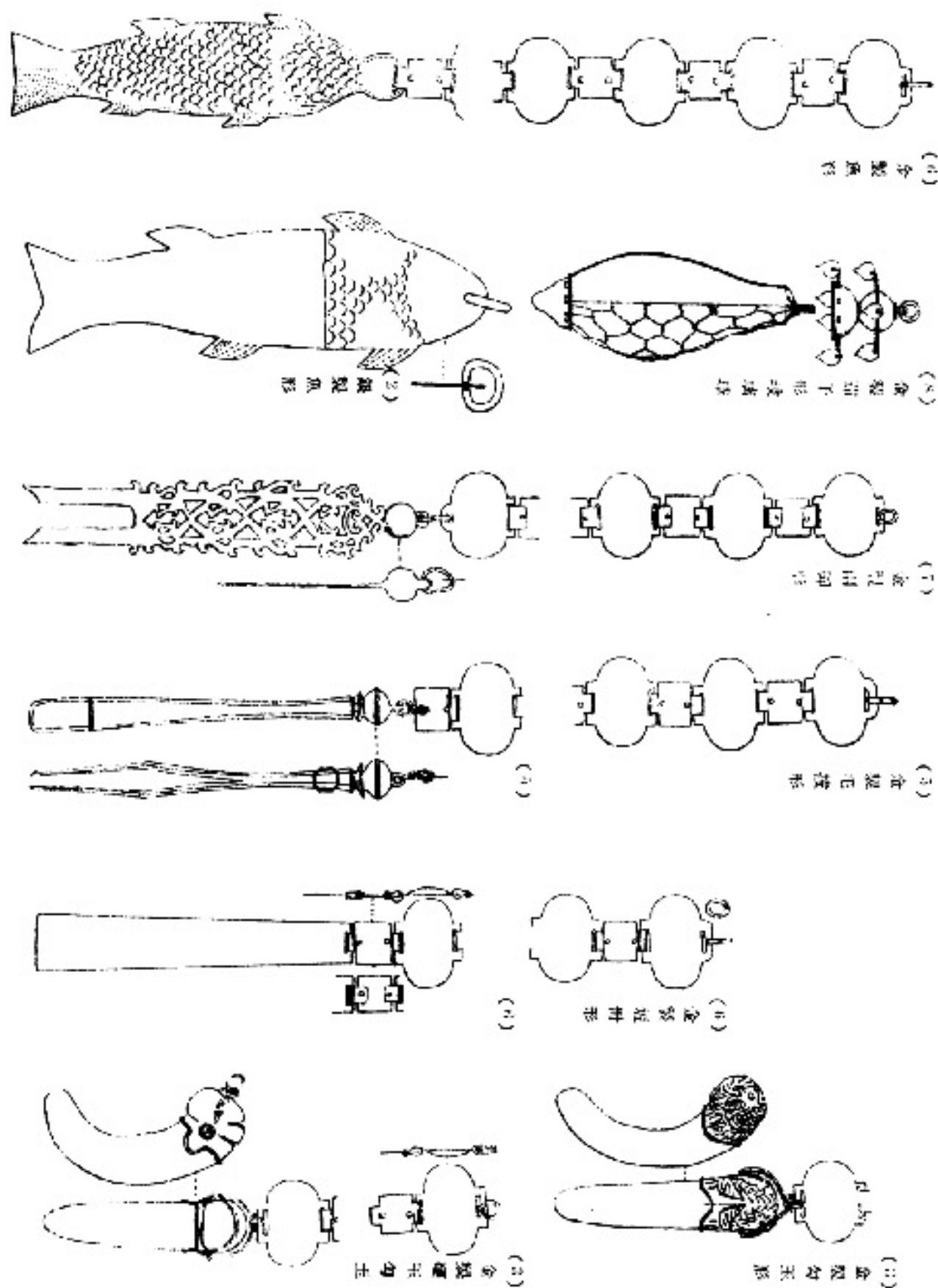
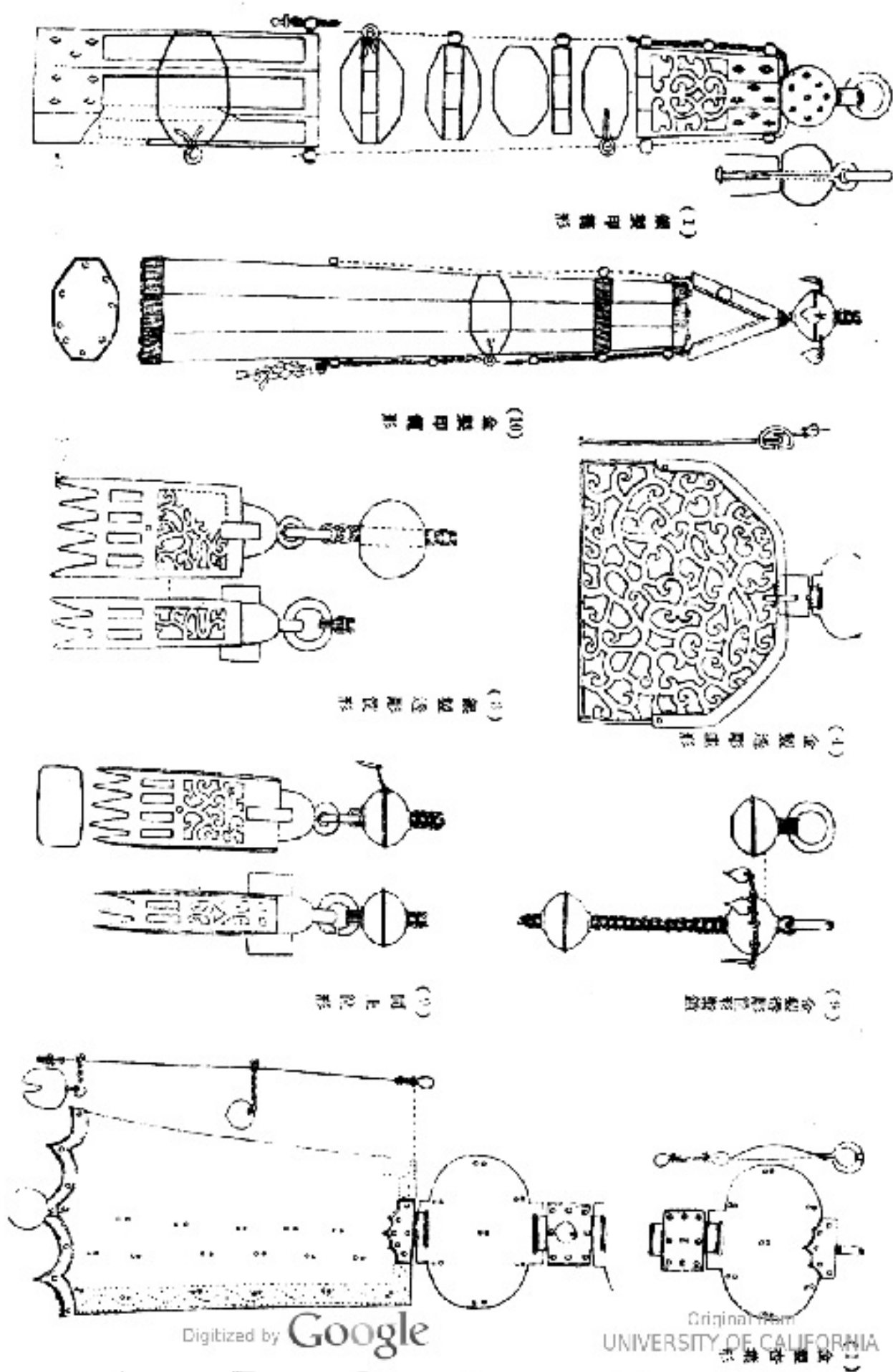
【註】

(1)此の香嚢形繋物と酷似したるものは、註(3)の支那土耳其斯坦ベセクリック發見の壁畫中の佛像の繫げ物中に見られる。

(2)これに酷似した鑷子形繫物が慶州の普門里の古墳から發見せられてゐる。金銅製で長さ三寸四分あり、鎖に依つて連環に續く樣になつてゐるが今其部を缺く。諸鹿氏の藏品である。

(3)此の壁畫は木頭溝附近のベセクリック(Bäzäklik)寺趾に於いて發見せられ、今は伯林人種學博物館に將來せられたものである。其の紳帶に各種の佩物を繋げてゐる具合は、尤も明瞭に現はされてゐる。(Grünwedel, Bericht über archäologische Arbeiten in Idikutschari. Bayr. Akademi d. Wissensch. 1916. Taf. XVI, XXI 3) なほミングオイ(Mingoi)ショルチュック(Šorčuq)の諸遺跡及びイヂクチエーリ(Idyqutšahri)附近の汗突址の壁畫にも之を現はしたものが尠くない。(Grünwedel, Alt-buddhistische Kultstätten in chinesische Turkistan. Berlin. 1912. pp. 217, 19[illegible] 321. 323) 又た高昌の摩尼教關係遺址の壁畫及び前記ベセクリックの壁畫の他の部分にも之を見ることが出來る。(Le Coq, Chotscho. Berlin. 1913. Taf. 8. 30. 38)

(4)ブッシエル氏は支那人の銅其他の實飾を述べる際に、此等は東方諸民族間に於ける貯蓄の投資の一概法(a convenient means of investment of their savings)をなしてゐるのは面白いと想ふ。(Bushell, Chinese Art. Vol II. p. 80)

第三十九圖　金冠塚發見金銀製腰佩圖　(Fig. 39)　½

第六節　腰佩類（二）　［圖版第四五、第四六］

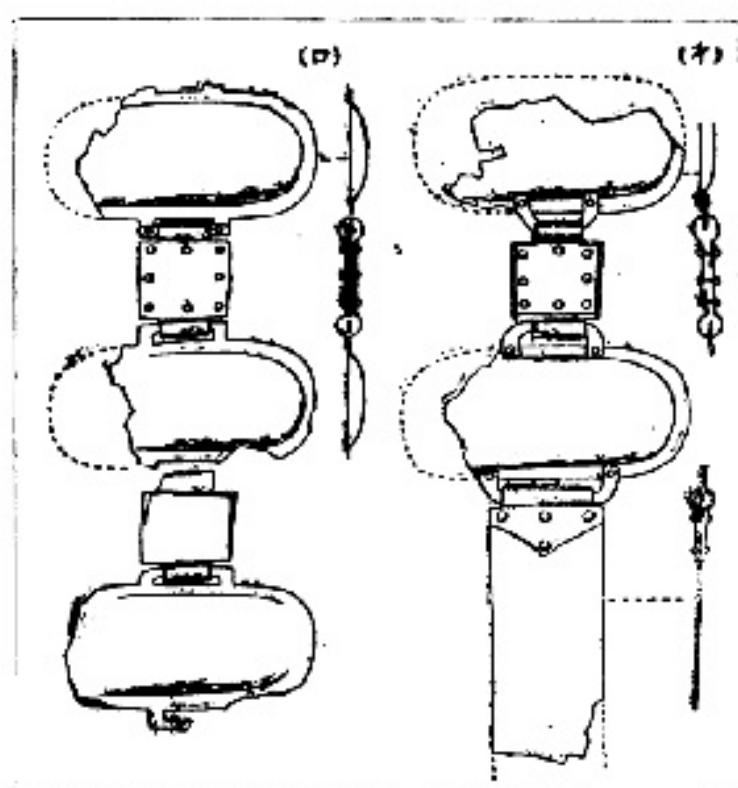
前節に我々の記述した黄金製佩飾具の外、なほ棺内から別種の銀製佩飾の殘缺が發見せられた。此等遺品の發見部位は明細を缺くが、其の一部分は棺外鐵釜の附近から出で、一部分は棺の附近から現はれたと報告せられてゐる。今ま次に其の各個に就いて略述する。

(1) **透彫銀製金具附木製印籠形繫物殘缺**（圖版第四五）是は前節の金製印籠形の繫物と同類のもので其の器體が木製であつたのが今ま無くなつて、たゞ其の銀製金具丈けが殘存してゐるものである。上部の扁平八角體の忍冬唐草透彫のある金物は固より印籠形の蓋の鞘であり、器體下半部には、各面に附した銀板に續いて底に近く鞘がある。此部には蓋鞘の上部と共に菱形の透し孔が點綴せられ、其の緣を他の物質を以て象嵌した痕が見える が、透彫唐草の模樣は無い。木製の器の上に元と嵌められた四箇の銀製筐と之を器に打ちつけた鐶釘が兩側に殘つてゐる。其の鐶釘に綴つた針金を通じてある具合等は、大體前の金製品と同巧に出でてゐるが、たゞ此の側紐の先端の飾りが「ホツク」型であることゝ、連條に接續する處が圓鐶に

なり、上邊の球狀體に圓い小透しのあることなどが殊つてゐる點である。全長約一尺、彼に比して少しく大形で、鞘の内部には矢張り木質が遺存してゐる。

(2) 魚形繫物(圖版第四五4) 長さ五寸、鱗、鰭などの細部は鏨を以て打込んで之を現はし、口部には鐶があつて連絛に附著せしむ可く作られてある。今ま尾の部分に布目の著いた痕が見ゆる。

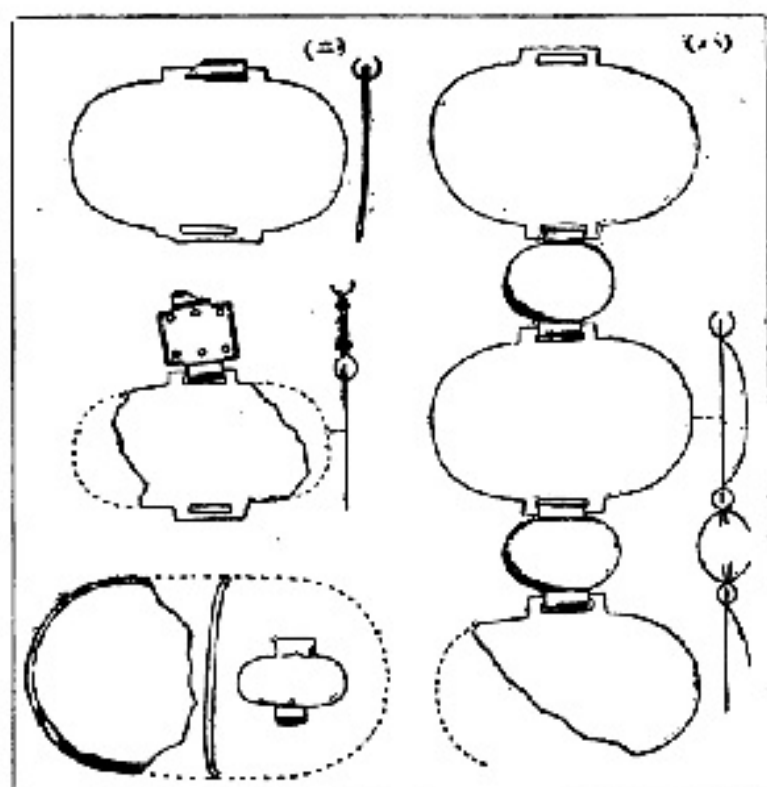
(イ)　(ロ)

第四十圖　金冠塚發見腰佩杏葉狀垂飾圖 (1/2)

(Fig. 40 a)

(3) 透彫筐形繫物(圖版第四六1) 是れ亦た大體は前の金製品と同じ造りであるが、角に面取りや膨みが無い。又た其の透彫の唐草模樣は忍冬の「モチーフ」では無く、却つて圭形繫物に於けるが如く、何か獸形から變化したものと思はれる。此點に於いては昌寧出土の同形品と全然其の軌を一にしてゐる。此の筐形は圓鐶によつて八條の線から

金冠塚發見銀製舟坏狀繫佩圖（7/8）

第四十圖 (Fig. 40 b)

成る吳廉鎖に懸垂せられ、鎖には矢羽り鍊形の飾を貫いてゐる。今ま中斷缺損して居るので、連條部の全長を明にすることが出來ないが、現存部の長さ五寸を超へる所から見れば、少くとも六七寸に達したものと考へられる。隆形の長さは二寸七分ある。

（4）舟●坏●形●連●條●殘●缺●（圖版第六〇ノ11四）十數箇、銀質は銹化して完形を認められないが、現存品は少くとも十條分に當ることが察せられ、一々の形に小異の點がある。今ま其の主なるものを數へると、（イ）舟坏形は横長く圓邊に平縁を附し、其耳部は弧狀の別片から成り、之を坏部に鋲留めにしたもの、此種の品は今ま六片を存し、もと一條をなして居つたと解せられ、其の一には短冊形の繫佩の殘缺を連ねて居る。（ロ）は舟坏部は前者と同じで

あるが、耳部が角張つてゐるもの。但し是は坏部と同一の板から打出したものと、先端の部分のみに別片を加へて鋲留めにしたものがある。現存二片、本來一條を構成して居つたものであらう。(ハ)は舟坏形前二者とは異なり、嚮きの金製品に近く、又た矩形板の代りに、同じく小形の舟坏形の板を兩面から合せた扁球形から成つてゐるもの。是は今ま長六寸と八寸位の稍々長い二條を存し、寧ろ各別の連條であつたと察せられるが、若しも之を一條であつたとすれば、恰も金製品中格別に大きい一箇に相當する長さになる。(第四十圖)

以上の外は孰れも舟坏部の小破片であるから、形を確め難い點はあるが、凡そ五種の、連條を想定することが出來る樣である。即ち一は舟坏形が内窪でなく、扁平板であること、彼の昌寧第八十九號墳出土品と相等しいもの、二は前者と同形に近いが、銀板特に薄く、且つ稍々小形なるもの一箇三は形前々者に似てゐるが、緣に至つて心持ち曲りを示したもの、四は前者の如く曲りを有し、少しく廣い式に屬するもの等である。從つて此等は皆な別箇の連條であることが推測せられる。なほ以上坏部の大きい形式のもの丶外に、別に金製品中の小形に見たと同一の小さい舟坏形金具の

殘缺も一二片存在して居つた。

(5)短冊形繋物殘缺（圖版第四六2—5）前項(イ)に擧げた連條に半ば遺存する一箇の外に主なる殘缺三箇を數へる。一は連條との接續部を失つてゐるのみで、略ぼ全形を殘存し（現存長六寸三分）銀板三枚を合せて作つたもの、厚さは二分に近い（圖6上）。二は先端の幅の廣い部分を少しく缺いてゐるが（現存長七寸一分）略ぼ全形を推測することが出來る。これは一枚の薄板から造られ、上端には連條に接する挿し込み鐶の座飾を表裏から鋲留めとしてある（圖4上）。此の飾は梁山古墳出土の短冊形に見る處と相似てゐる。なほ同じ上邊の座飾の殘缺が別に一箇（圖2上）あつて、此の方は上部の圓鐶になつてゐることが前者と相違して居る短冊形品の三は（現存長約三寸）其の一面に鍍金を施してあることが前二者と同じくない點である（圖3上）。

(6)紐・鎖・殘・缺・（圖版第四五1・2・3）三箇。一は二寸六分、二は七寸に近く、後者には先端に鐶を殘留してゐる（圖1上）。三は繋物に附著する部分の半球形座金物を存してゐるもので、鎖が前二者よりは細い。此等の兵庫鎖には處々に球形の飾が、筐形繋物の連條に於けるが如く附加せられて居つたらしいことは、其の最も長い一に痕跡を遺して居ることによつて推測することが出來る。是

等三條の鎖のうち最も長いものは、或は印籠形繫物の連條かとも思はれるが、魚形繫物には前例から推すと、舟坏形の連條が附隨して居つたと考ふ可きであるから、他の二者の繫物に相當する遺物は現存しないわけである。

以上銀製佩飾品は其の連條の形式に、舟坏形約十條と紐鎖約四種の別を存し、特に前者が殆ど皆な大形であることから考へると、是等が果して一揃の佩具を形成したものか否かに就いて疑問を生ずるのであるが、一方に於いて彼の黃金製佩飾の場合に於いて、別種の連條を有するものが、一列に繫佩せられてゐるのを如實に示されたのであるから、此等銀製諸品が一揃として、同時に佩用せられたと考へるのも全然不可能とは云へない。併し他方に於いて梁山や昌寧の古墳では、大形舟坏形連條の佩物一に對して、小形舟坏連條若しくは紐鎖のもの數箇を以て一揃とするを常とし(挿圖)、本古墳の金製品に於いても、大體に於いて矢張り此の關係を認められるから、大形舟坏連條の繫物十箇を以て、直に一揃と見るのは不穩當の嫌がある。又た現存の木材に銀質の全く銹化し去つた此種の連條がなほ若干認められるから、次に述べる出土狀態と相俟つて、元と二揃以上

の腰佩を構成して居つたとするのが寧ろ合理的と考へられる。

さて是等銀製佩飾の發見部位に就いては、金製品の場合に於けるが如く精確に知り得ないが、諸鹿氏の告ぐる處に從ふと、其の一半は第一、第二兩鐵釜の間から、金銅製透彫馬具や、銀製寶冠前立飾などの類と伴出し、他の一部特に舟坏形連條品は、棺の周圍に於いて發見せられ、中にも其の西北隅の邊に多かつたとの事である。併し如上の十數點に於いて實際其の孰れが孰れに發見せられたか、今ま充分之を判別することが出來ないのを遺憾とする。たゞ當初吾々が慶州に於いて整理の際、魚形、篦形、印籠形の三者と、舟坏形連條第三式のものとが一括として置かれてあり、是等が棺の西北隅發見品であると聞き及んだことを記して置かう。

次に是等銀製佩飾が棺内被葬者と如何なる關係を有して居つたかは一の重要なる問題である。已に金銙帶一腰、金製佩飾一具を佩繫して居つた被葬者の一人は、それ以上實際に於いて腰佩を繫げることは出來ない。鐵釜の附近に於いて發見せられたものは、黃金寶冠以外の冠や、帶銙の殘缺と共に、或は被葬者生前の持物として、現に佩用せられて居つた以外の財產を副葬したものとも見ることが出來よう。然し棺の附近に於いて出

土した品物に於いては、諸鹿氏の一說として云はれるが如き、棺の裝飾金具說が實際の遺物の示す處から認め難い以上は、之を如何に解釋す可きであらうか、此の點は他の耳飾釧其他同樣の出土狀態にあるものと併せ論ず可きであるから、之を後章に讓る。

なほ此の銀製佩飾の記述を終るに際して附言して置き度いことは、此等銀製品は其の質料の關係などから、今ま銹化破殘してゐるものが多いが、其の製作の技術と意匠とに於いては、決して金製品に比して劣るもでは無く、彼の印籠形品の如きは特に優越したものであり、大體に於いて金製品を凌駕するもののあるを認むべきことである。

* 　* 　* 　* 　* 　*

耳、唇、鼻、腕等身體直接に裝飾物を附著する以外に、腰部に裝飾物を佩することは、世界人類一般に最も普通なる現象である。其の起源は性慾を挑發する爲にせよ、或は恥羞の感情からにせよ、寒氣を防ぐ爲めにせよ、全裸體に近い野蠻人間に在つても、腰衣の類を著けないものは殆んど稀である。ストラッツ氏は衣服の系統を氣候に依つて熱帶的のものと、寒帶的のものとの二つに分ち、前者は帶(Gürtel-girdle)後者は袴(Hosen-trousers)の種類を發

生するものとしてゐるが、後者の場合にも第二次的に之を緊縛する必要から、矢張り帶の發生を豫想するのである。そこで此の腰帶に挾み若しくは之に懸垂する裝飾品が發生し、又た散佚を防ぎ携帶に便にする爲に、實用品を此處に附著することゝなる。而して此の實用品も遂には裝飾の用を兼ね、或は全く裝飾的のものとなる場合が鮮くない。此等裝飾的のものは通常之を總稱して寶飾(jewelry)と名けるが、之には護符的の迷信(superstition)に淵源するものが多いとせられてゐる。

朝鮮に於いて佩飾が已に古代に存在して居つたことを語る文獻としては、新羅の方では無いが、言語風俗に於いても共通して居つたことの多いと察せられる高句麗に於いては、銀帶を締め、左に礪、右に五子の刀を佩したと云ふことが「翰苑」に梁元帝職貢圖を援いて記してある。(1)朝鮮の風俗に重大なる影響を常に與へた支那に於いては、古くから佩飾の風のあつたことは、文獻と遺物とが兩ながら可成雄辯に之を證してゐる。固より其の佩物は「農夫佩耒耜、工匠佩斧、婦人佩鍼縷」(白虎通卷四)とあるが如く、各人其の身分職業に從つて之を殊にするものがあつたに違ひないと同時に、各人を通じて最も普遍なる佩物のあつたことも疑ひない。「禮記」の内則に、子婦が

父母舅姑に事へる時に、刀、礪、觿、燧或は綵針等の品物を佩す可きを述べてゐるのは、其特殊の佩物と、普通のものとを我々に知らしめる所がある。[illegible]其他護符的のものとして魚佩などが發生し、終には各種の佩物を一揃として、紐鎖などを以て聯絡して之を佩用するに至つたことは最も自然の事であり、唐代に「魚袋及鞊鞢七事」を文武官の佩物として規定し、「唐書」車服志に、其の七事を「佩刀、刀子、礪石、契苾、眞厥、針筒、火石袋」と擧げてゐるが如きは、北の一揃の品目を知らしめる處がある。[illegible]而して是は相互の影響もあつたことゝ思はれるが、此の風は支那本土ばかりで無く、周圍の諸民族間にも行はれたことは、亦た支邦の文獻と現在の土俗とが之を示してゐる。例へば回紇が唐代に腰佩を著けたことは、已に擧げたグリュンウエーデル氏發見の壁畫が之を證し、北方契丹民族が所謂鞊鞢帶に、弓劍帉帨算囊、刀礪の類を佩して居つた事は、宋の沈括の記して居る所で分かり、[illegible]現在滿洲西藏邊に於いても、斯の如き連鎖の一揃を胸邊などに佩する風俗が婦人の間に存してゐるのは、[illegible]全く古代からの遺風に違ひない。又た我々は之と全く同樣の佩物の連鎖「シャトレーンヌ」(chatelaine)なるものが、歐洲に於いても古くから行はれてゐることを見るのは頗る興味あることである。[illegible]

金冠塚發見の金銀製佩飾には已に我々の見る樣に、香筐、藥籠、鑷子、鉄(?)などと推定せらるる粧奩具及び日常の必要品、若しくは其の模形變形か存在すると同時に、勾玉魚形等の護符的のもの、若しくは其れから出でた純裝飾的のものが認められるのである。此のうち香筐は所謂香匳と同じく、香は元來熱帶地方の産物を主とするから、此等の地方と支那との交通が盛に行はれる樣になつた後に、之を携帶する風が發生したものと推測せられる。鑷子は固より毛髮を拔く用具であるが、支那日本朝鮮あたりでは、其の人種の特性として多毛でないから、歐洲の青銅器時代などから既に存在するが如き剃刀を非常に古い時代に認めない。寧ろ顏面無用の毛髮は鑷子を以て拔くのが普通であつたと思はれる。此等粧奩日常の具としても、日夕侍婢にかしづかれる王侯貴族には、手づから使用する必要は少く、たゞ裝飾として佩用せらるるに至つたのである。

勾玉は狩獵せられた獸類の齒牙を佩用する風から起り、單に裝飾的のものとして用ゐられる以前、若しくは同時に、他方に護符的の意義を有して居つたことは既に頸飾の條に於いて述べた處である。(1) 魚形の佩は同じく護符的の起源を有するもので、支那では古くから佩物として行はれた

ことは骨製、銅製等の遺物が三代以後存在してゐることを以て證することが出來、已に玉の雙魚佩なるものが六朝時代にもあつたらしく、漢代には雙魚が盛に裝飾の「モチーフ」として使用せられてゐることは顯著なる事實である。[9]尤も魚形の護符的佩物は支那のみならず、亞細亞の諸民族間にも廣く行はれてゐるのであるから、此の金冠塚の魚形佩の如き朝鮮のものを、直に漢土の影響として說明することは早計に失するが、他の各種の文化的關係から考察して、矢張り之を支那の佩物の感化を受けたものとするのは、必しも不穩當でないと思ふ。

我々は已に一々の記述の際に指摘した如く、此金冠塚發見の佩飾品と全く同形若しくは同種のものが、古への任那、新羅の地である慶尚南北道の各地から出てゐるのである。卽ち梁山の古墳からは、大形舟坏狀の連條に短册形の飾物を附した一箇と、同じ短册形のもの、小形品數個を配したものの二揃へが發見せられてゐるし、[10]昌寧校洞の古墳では同じく短册形飾物を有する大形品に、筺形、魚形、斗形等の繫物を配したものが二ケ處から發見せられ、[11]特に其の中の筺形品が殆んど全く同一であることは是等古墳の年代性質を考察する上に最も肝要なる一資料を供するものであ

る。慶州普門里の古墳から、金銅製の鑷子の繫物の發見せられてゐるのは前節に註記した處である。又た日本内地の古墳では、他の佩物は多く發見せられたことを聞かないが、雙魚珮が近江國水尾村の古墳及び三上山の附近から出土し、(11)明かに韓土若しくは支那の影響が認められると同時に、新羅に於いては支邦の佩物の感化が存する傍ら、寧ろ日本的なる勾玉が腰佩の繫物の一種として現はれて居ることは、頗る興味あることと云は無ければならない。

要之、金冠塚發見の腰佩は、其の繫物の種類に於いても、其の質料の點に於いても、其の一連を完存して殆んど原狀に近い出土狀態を保存して居つたものがあつた點に於いても、梁山、昌寧等の古墳出土品と同等若しくはそれ以上に考古學的價値の大なるものがあると云つて差支ない斗りでなく、朝鮮古墳否な東亞古墳發見の腰佩、シヤトレーンヌ」の最も完好美麗なる一例として特筆す可きものであらう。(12)

【註】

(1)『翰苑』蕃夷部(京都帝國大學内藤博士藏)高麗の條に「佩刀礪而見等威、金飾以明貴賤」とある註に梁元帝職貢圖を引いて「穿耳以金環上衣白衫、下白長袴、腰有銀帶、左佩礪而右佩五子刀」とある。

(2)『禮記』內則に「子事父母、佩用左佩紛帨刀礪小觿金燧、右佩玦捍管遰大觿木燧」「婦事舅姑、如事父母、左佩紛帨刀礪小觿金燧、右佩箴管線纊施縏袠大觿木燧、衿纓綦屨、以適父母舅姑之所」と見えてゐる。

（３）「唐書」（車服志）「新唐書」（車服志）等を見よ。なほ原田淑人著「支那唐代の服飾」（前出）參照。

（４）「夢溪筆談」（卷一）。其の文は既に本章第四節註（９）に引いて置いた。ゲリュンウエーデル氏發見の木頭港の壁畫に就いては前節註３）を見よ。

（５）西藏婦人が其の耳飾から懸吊する璜飾には、矛形、齒楊子、耳掻き、鋼子、毛拔等が附いてゐる。（Laufer, Notes on Turquois in the East. Chicago, 1913. Pls II. IV. 參看）滿洲婦人の佩鐶も之に類して居る。（Bushell, Chinese Art. Vol. II. Fig. 107 參看）

（６）「シャトレーンヌ」なる語は元來「城の女主」（mistress of a castle）の義であり、これ等の女子が常に城の鍵を帶にして居つた所から出でたものである。今は各種の日常化粧具を鎖を以て繫いでゐる（Bag-Belt）

（７）本章第二節註（３）參照。

（８）支那河南省殷墟發見品と傳ふるものに、骨製魚形あり、漢代の銅製魚形等もある。西比利亞、中亞等の魚形等に關しては、濱田梅原「近江國高島郡水尾村の古墳」（前出）第五章第二節に記してある。

（９）壁山古墳發見の佩飾具二種中、男子佩用のものは、六箇から成立し、大形（長二尺九寸五分）一箇、小形（各長八寸八分內外）五箇小形の一が青銅製なのを除いて、他は金銅製である。女子佩用の分は大形（長二尺五寸六分）一箇と、小形（長七寸）四箇から成り兩者共に舟底形透彫に短冊形飾を附したもので、形狀本古墳發見品と殆ど同一である。

（10）昌寧校洞古墳發見の二例の中、第八十九號墳から出た一揃は、長二尺五寸に達する大形短冊形墜物を主として、一尺內外の魚形透彫附華鬘形、鎌形等の特殊品を繫げ、何れも銅製である。

（11）近江水尾村發見品は、濱田、梅原「近江國高島郡水尾村の古墳」（前出）を、三上山附近出土品は山川七左衞門君「梅仙居藏日本出土漢式鏡圖集」第十一圖參照。なほ此の雙魚形佩物の外にたゞ一つ佩石の飾らしいものが筑後浮羽郡千年村若宮八幡社境內月岡古墳から發見せられたことが、矢野一貞「筑後將士軍談」（卷五十）に記されてゐる。卽ち第四十二圖の如く、長五寸七分、紫色の砥石の頭部を鍍金物を以てつゝみ、垂下する樣になつてゐる。

（12）蹀帶に十三鐶を附し、その一々に佩物を繫げた實物に關して唐代の文獻の存することは、王國維君の「古胡服考」（前出）によつて知つたから此處に附註する。卽ち「唐文粹」（卷七十七）內「李德裕李衞公故物記」に「有玉帶一、首末爲玉十有三、方者七、挫隅者六、每緩環附、前函者以金、傳云、環者列佩用也、公擒蕭銑時、高祖所賜於闐獻三帶其一也、又火鏡二、大觿一、小觿一、算囊二、椰盃一、並宜佩於玉帶環者、十三物、亡其五、存者有八」とある。

第四十三圖

筑前月古墳發見裝飾石圖

(Fig. 43)

(1) 西藏婦人佩飾

(2) 西藏婦人佩飾

(3) 滿洲婦人佩飾

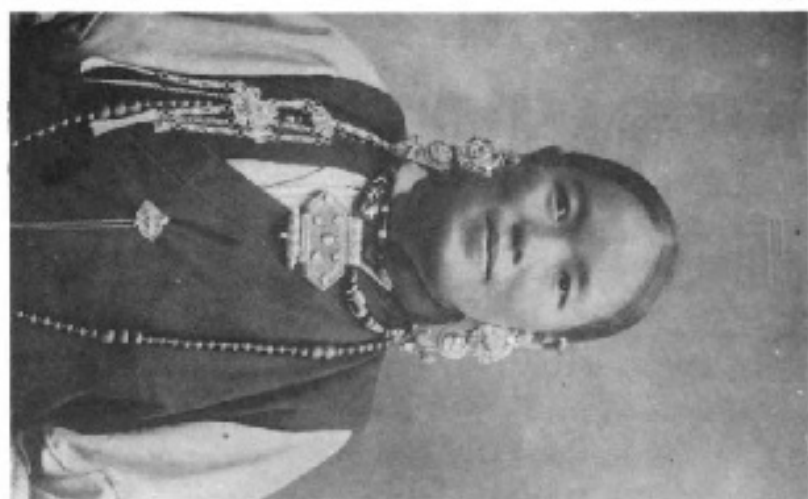
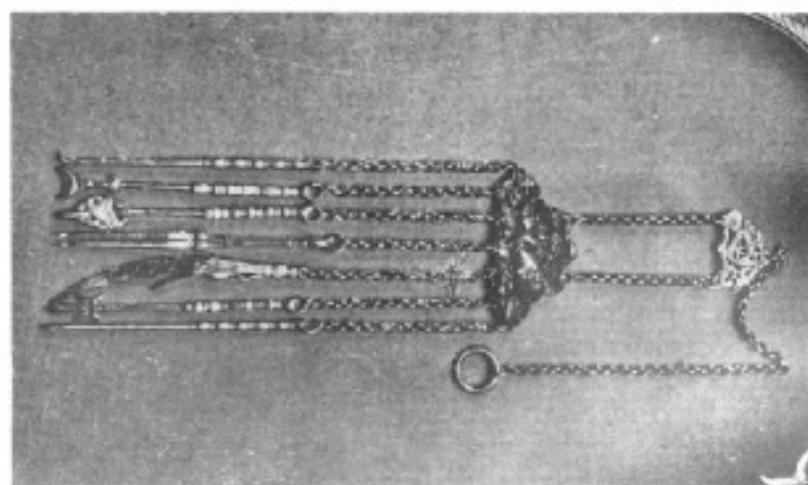
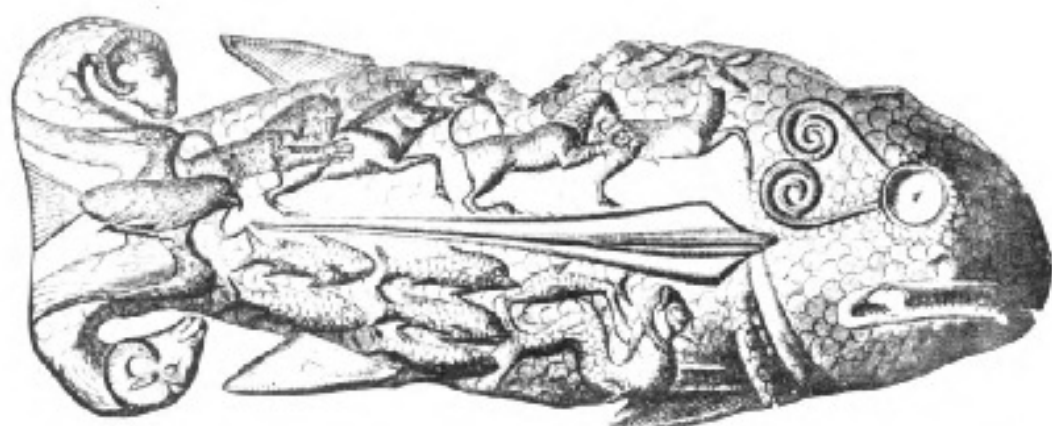
第四十一圖 (Fig. 41)

(4) 露國フェクテルスフェルド金製品

(3) 傳支那殷墟發見骨製品

(2) 近江水尾古墳金銅製品

(1) 新羅慶州古墳金製品

(Fig. 42) 第四十二圖 各國魚珮

第七節　飾履

〔圖版第四七―第五〇〕

飾履は後述の寶冠と共に裝身具中著しい遺品の一で、從來此の兩者の相伴つて出るのが、日鮮古墳に於いて常とする所である。(1)さて本古墳からは二足の飾履の發見を見たのであるが、其の出土の精確なる部位に就いては、傳ふる所充分でない。併し、兩者が木棺部であつたことは推察し得る所であつて、其の一足が少くとも、彼の黃金製冠帽と同時に同一人が著用したものであることを想定することが出來る。此等の飾履は孰れも金銅製である爲め、鏽化して破損が可成太しく、黃金製品の如く完形を見られないが、兩者とも一箇宛は履形を認め得る程度に遺存して、一は小飾附透彫履とも名く可く、他の一は花形座飾附透履とも云ふ可きものである。

(1) **小飾附透彫履**（圖版第四七、第四八ノ2第五〇ノ1―3）破損の程度稍々甚しく、一方の如きは其の大半を缺失してゐるが、他の一方は幸にも底板と外被の前半を遺存してゐるので、略ぼ全形を見ることが出來る。長さは一尺〇六分、底は一枚の薄い銅板を以て作り、左右足稍々其の形に從つて造られてゐる。其の外側は前半に圓味のある特殊の靴先きを嵌め込み、後半部は左、右、後の三枚の銅板

を、外から下方に折曲げて、底板の縁を包み、なほ交互に鋲留めを加へて外側を組立てたものである(底最廣幅三寸五分 最高二寸六分)而して底部は靴先きに於いて稍々大きく上に反つてゐること、足の這入る空處は割合に潤く、且つ其の前に當る外被の部分が少しく突起してゐる外は、後面(踵)の如きは角張つた儘で、特別の構造上の施工は無い。

此等は嚮きに梁山北亭洞の古墳で發見した男子穿用の遺品と殆んど同一の形式であるが、(2)本古墳のものは一般に製作が精巧で、特に外側に透彫りの装飾を施してある點などに於て殊つてゐる。即ち靴の尖端の一小部分を除くの外、外側の全面に亘つて、丁字形を交互に配した一種の卍字崩しとも見る可き透彫が現はされてゐる。尚この透彫の部分から底板の外面全部に亘つて割合に大きな圓い瓔珞飾(徑五分 五厘)が長い針金(長六分)を以て附加せられて居る。尤も此等の飾片は今まで殆んど皆な缺落して仕舞つてゐるが、其の針金の孔痕から推すと、底部の如きは、實に八十七箇の多數を附けて居つたことが知られるのである。現在では破碎と青緑の鏽の爲に餘り見榮はもしないが、なほ隨處に金色の鮮に殘つてゐる處があるから、如上の装飾の全かつた當初を想像すると、其の金色燦然たる華麗の外觀は

驚く可きものがあつたに相違ない。此の履の發見位置は諸鹿氏の注意を遁して居る樣であるが、大坂氏に從へば、棺内西隅腰佩具の下、恰も足部に當る可き邊にあつたと言はれて居る。若し果して然りとせば、此の飾履は黄金寶冠を戴いた被葬者の履いたものと見ることが出來るのみならず、其の製作が次ぎの靴よりも立派である點からしても、此の推定を確めるものがあると思ふ。なほ此の履の底の外面に、綾絹と布の一部が附著遺存して居つたことを附記して置かう。

(2)**花形座飾附淺履**(圖版第四九第五〇の1-6) 前者に比して形を損した處が少なく、其の一箇の如きは略ぼ全形を復原することが出來る。厚さ約五厘の金銅薄板製であつて、處々に緑鏽を見るが、なほ大部分は黄金色を留めて頗る美しいものである。左右足共に同一形で、長さ一尺一寸四分、後の方は角張り、靴先きは弧三角形狀に尖つて、八分許の反り上りになつて居る具合は、如何にも小舟の形に比す可きである。而して稍々外開きになつた外側部は、極めて淺いものであり、先端の上に反つた最も高い部分でさへ、僅かに一寸を超ゐるのみで、後ろの方などでは漸く三分位に過ぎない。又た前後兩端間の兩側は、前の方から美しい曲線を呈して、漸次低くなつて後方に及んで

ゐるが、此の間約一寸の隔りを置いて、縁に近く小孔を穿ち、其の或者に細い針金様の物質の殘つてゐるものがあるのは注意に値する。底の外面には整齊な配列をした三十一箇の花形の塡め込み飾がある。是は圓い鋲頭形を中心とし、縁に點彫りのある六葉の花瓣を表はした稍々大形（徑に分餘）の細かい細工で靴の外底裝飾としては兎に角、表面裝飾としては要領を得たものである。

兩箇とも今ま其の内側には木材が略ぼ其の全面に亘つて遺存してゐるが、破損の大きい一箇の内側には、銅の部分に直接して綾絹と麻布とを二三重に重ねた厚さ一分許りのものが可なり廣い部面に亘つて密著してゐるのが認められ、なほ底裏の花飾の間にも、同樣の綾布が附著してゐたことが、最初調査の際注意に上つた。

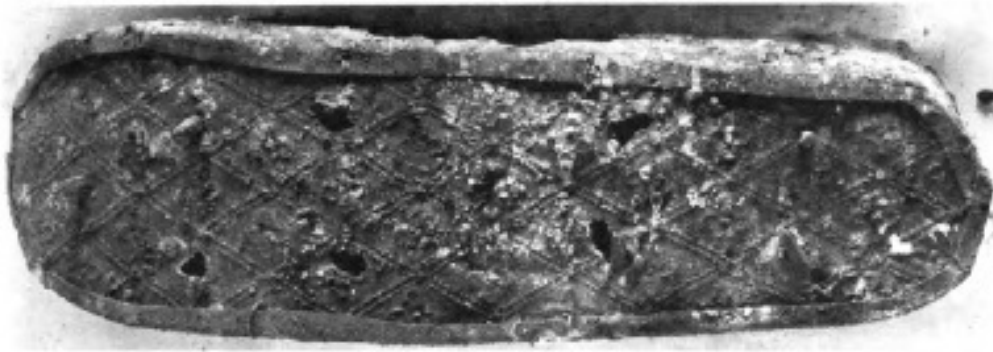
以上の如く本遺品は殆ど靴の底のみであつて、足を穿つて之を保持する部分は全く之を缺除してゐるのであるから、元來は此の金底の上に木履を塡用するか、或は布革製の部分を附加したか孰れかの方法を講じたものに相違ない。内面に遺存する木片と、外底の鋲形金具は、一見前者の造りを想像せしめるが、事實既述の如く鋲頭は單に底邊に塡め込みの裝飾

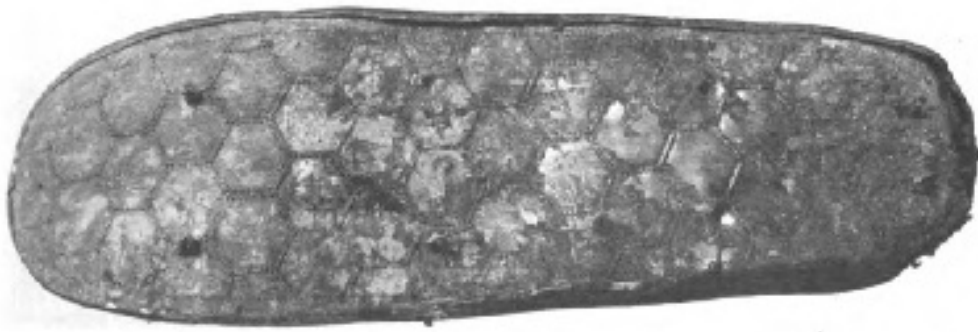
で、底内に貫通してゐないことゝ、木材の下に却つて綾布等が密着してゐる事實は、木片を以て履の一部を構成してゐたとの解釋を否定に導くものであつて足の上部を覆ふ部分が布革の類を以て造られたと見る方が穩當であらう。而して既に注意して置いた低い縁にある小孔は、其の綴付けの爲めの加工と解す可く、中に針金様の物質の遺存するのは、他物との緊縛を物語るものと云ふ可きであらう。それが果して革であつたか、布の類であつかは、今日究めることは困難であるが、内外に附著した物質から推すと、或は後者であつたかも知れない。

本淺履の發見位置は、諸鹿氏の覺書に依つて、略ぼ正確に知り得られる。卽ち是は棺の北東隅から約二尺を距つた部位から發見せられたるもので（九月廿九日午前）同時に木材を伴つたと云ふ該位置は恰も金冠の附近に相當するが其れよりも上層の水平面にあつて、土砂採掘の際に發見せられたとの事である。我々は既に前項の透彫の飾履を以て金冠著用者の穿つたものであると擬定した。然らば同じ棺部の別處にあつた此の一足の履は果して如何なるものであらうか。之は棺の西半部から出土した既記の耳飾、釧、指鐶などゝ相關聯して考察す可き問題であると信ずる。

扨て本古墳發見の飾履二種のうち、花紋座附の淺履の方は、今次はしめて見ることを得た珍らしい型であるが、前の透彫りのある方に至つては、必しも例證に乏しくない。既に指摘した慶南梁山北亭洞の古墳の男子の履いたものをはじめ、全南羅州潘南面甕棺古墳の外、谷井文學士の調査した慶南昌寧校洞の古墳群中にも少くとも二三足を發見し、近く慶北大邱達城公園の古墳からも見出されたとのことである。[3]又た單に朝鮮ばかりでなく、日本内地に於いても屢々發見せられ、かの肥後江田古墳から出た完全な一足が早くから學界の注意を惹いてゐる外には、近江水尾村、周防桑山、出雲大念寺、豐前馬ケ岳等の古墳發見の遺品がある。[4]此等の遺品は固より其間に多少の變化相違はあるが、孰れも金銅を以て作り、其の半は外底に歩搖の裝飾を附した特色を有して、同一居り系統に屬するものであることが認められる。(第十四圖)

斯の如く底部に小瓔珞の裝飾を垂下してゐる處から見ても、金屬製の靴履は日常實際に穿いたもので無いことは明かである。元來履物としての靴は、其の性質上纖維性織物や皮革の如きものを以て造るのが普通で、あつて特殊の場合に（多く溫氣に堪へる爲め）我が日本の下駄の如く、[5]或は

(1) 朝鮮全羅南道羅州潘南面塑栢古墳發見金銅飾履

(2) 肥後玉名郡江田村船山古墳發見金銅飾履

(Fig. 44) 第四十四圖

歐洲の諸國にある木靴(sabots, clogs)の如きものがあるので、[10]何に裝飾を加へられる場合にも、珠玉刺繡等を加ふるに過ぎないことは、支那の文獻を初め、[11]各國の實例が之を示してゐる。それで此の硬くして重い金屬製の資料それ自身が、既に實用品たるの性質に缺くるのであり、從つてそれは當然儀式用の飾履であつたと見る外はない。たゞ之が果して葬儀の際單に副葬の目的を以て造られたものであるか、或は又た生前の儀式にも使用せられた飾履であるかは、今なほこれを決定する確かな資料を有しない。其の製作の必しも假器的でない堅實なる點から察すると、單なる葬儀用のものとは卽斷し難い樣に見ゆるが、又た斯の如く履底に裝飾を附したものは、儀式用にも全く使用し兼ねると言はなければならない。而して此の種の金屬製飾沓が六朝時代の支那に存在したことを聞かないで、獨り南鮮日本の一部に互つて割合に多く分布して、有力者の墓と見る可き古墳から發見せられるのを見れば、是は南鮮の樣な邊陲の未開の民族間に多く見る、豪奢を表はす爲に用ゐられ、實用から遠ざかつた不自然なものとし去つた飾履と解せられるのである。

【註】

(1)註第(3)參照。なほ金銅製飾履(沓)に關しては、濱田、梅原「近江國高島郡水尾村の古墳」(前出)第五章第二節等參照。

(2)鴨山古墳(前出)出土の履は其の外形に於いて、本古墳出土品に酷似してゐるが、上部に透しなく、また瓔珞の垂下は底面のみである。この履に於いて注意を惹いたのは、出土の際内部に布で蔽ふた足骨のなほ遺存してゐた事實である。

(3)此等金屬製飾履と金屬製冠の發見地を表示すれば

全南、羅州潘南面新村古墳(谷井委員)　冠　履
慶南梁山北亭洞古墳(馬場、小川兩氏)　冠　履
同　昌寧校洞古墳(谷井委員)　冠　履
慶北、慶州皇南里古墳(關野、谷井兩委員)　冠　―
同　慶州路西里金冠塚　冠　履
同　大邱達城公園及達西古墳　冠　履

(4)日本内地に於ける金屬製冠履の發見地の主なるものは

肥後、玉名郡江田村舟山古墳　冠　履
肥前、東松浦郡鏡村四方塚　―　履
周防、佐波郡三田尻、桑山古墳　冠　―
伊豫、宇摩郡萱島村古墳　冠　―
出雲、簸川郡鹽冶村築山古墳　冠　―
伯耆、西伯郡科岡村古墳　冠　―
出雲、簸川郡今市町大念寺古墳　―　履
豐前、仲津郡馬ヶ岳古墳　―　履
上野、佐波郡上陽村古墳　冠　―
越前、吉田郡吉野村古墳　冠　―
近江、高島郡水尾村古墳　冠　履

の如くで、冠履伴出は朝鮮程に著しくは無い。

(5)日本古墳からは遺物としては金屬製履の外、石製模造品の下駄を發見する。例へば山城乙訓郡石見上里鐵山古墳、武藏荏原郡玉川村古墳のそれの如き是である。(高橋健自著「古墳發見石製模造器具の研究」)勿論此の外植物質の草鞋、其他革製の沓の如きものが、別に行はれて居つたことを考へなければならない。

(6)西方諸國では近年シリヤのビブロス(Byblos)で突起付の石棺と共に發見せられた銀製の履底の如きは珍らしい例である(Virolleaud, Découverte à Byblos d'un hypogée de la 12e dynastie Egyptienne. Syria. Tom. III. No.4)

(7)支那に於いては古く王朝貴族の履を舃(詩經豳風狼跋、疏に赤舃几々とあるが如く)と謂ひ、下駄の如きものを屐と名け、靴は主として革製のものを云つた樣である。「中華古今注」に鞋子を說いて「自古即皆有刪之屨、納履者並五色、漢有伏虎頭、始以布鞔繶、上脫下加以錦爲飾、至東晉以草木織成、即有鳳頭之履、聚雲履、五朵履、宋有重臺履、梁有笏頭履、分梢履、立鳳履、又有五色雲霞履、漢有繡鴛鴦履、昭帝令宮人登臨上殿」と云つてゐるが、時に玉履の如きものが墳墓中から出ることはあつても、未だ曾て金屬製の飾履の類の存在を示してゐる文獻を見ない樣である。鞋子に黃金が「黃金之爲飾、以銀泥以珠」とあるが如きは、其の尤も顯著な一例であるが、履の本體は金屬ではない。

7. CEREMONIAL SHOES

(Plates XLVII—L)

Two pairs of gilt bronze shoes appeared from the tomb, both in or near the inner coffin. They are much damaged, but capable of being restored fairly well.

(1) **Gilt bronze shoes with open-worked design** (Pls. XLVII., XLVIII. 2) : About 1 foot long. The toe-end is a little turned up and a T-shaped open-work design applied on the counter and front. Curious is it to see small round fringes, 87 in all, attached all over surfaces, even under the sole. Each of the pair slightly differs in shape according to the foot.

(2) **Gilt bronze shoes with floral bosses** (Pls. XLVIII. 1, XLIX.) : This is a little larger, but much shallower than the previous pair, resembling somewhat the shape of a ferry boat. It is probable, however, some soft parts were fitted originally upon the bronze parts, if we may so deduce from small holes extant along the edges. Under the sole 31 ornamental bosses in a floral design are attached. Did this pair belong to the one and the same person who wore the other example? We have to deal with this question, and other similar ones arising from other articles, in a chapter in the next volume.

* * * *

Some bronze shoes similar to the first example, though the second belongs rather to a new type, have been found in southern Korea as well as in Japan. (Fig. 44).[1] Judging from the attachment of decorative fringes even under the sole, it seems that these metal shoes were not of practical, but altogether of ceremonial use, especially of funeral purpose. Let us picture a royal personage of the Shiragi period, who wore a gorgeous crown on his head, an elaborate girdle and over-crowded waist-pendants on his hips and such heavy shoes on his feet, all made of solid gold or of gilt bronze! We can not help pitying the weariness and inconvenience of such an unfortunate personage, burdened by such sumptuous but ponderous personal ornaments!

1. Hamada & Umehara, *Ancient Sepulchre at Shōsan, cont.* Chap. V.

(6) **Fragments of chains for suspenders** (Pl. XLV. 1–3) : It is very probable that the above-mentioned pendants were employed as a set or two, though each suspender is not all quite the same. The workmanship of this silver set seems finer than the gold one, though nevertheless now in a miserable state of preservation. The question to whom this pendant belonged is difficult to answer, but it will be discussed in a later chapter.

* * * *

To wear a girdle is a natural outcome of a tropical costume though a secondary issue in a suit of arctic clothes. As the necessary articles or amulets to fasten this most convenient part of the costume, waist-pendants have been developed. In Kokuri 高句麗, north of Shiragi, where the fashion was not much different from the latter, it is stated in a Chinese literature, that the people wore waist-pendants, such as knives and sharpening-stone, in the time of the Six Dynasties.[1] Also in China herself waist-pendants were known from very remote periods and in the T'ang Dynasty certain seven articles were worn as a rule by officials.[2] Though we do not know how far our Korean waist-pendants were influenced by Chinese costume, there can be recognized certain Chinese traits on some of the ornaments, while non-Chinese characters are exhibited among them. For example, the *magatama* bead as an ornament of the pendant was quite alien to Chinese, for this bead is entirely Japanese, and Koreans used them only at times. As for a fish-shaped ornament it was very wide-spread prophylactic amulet among many peoples in Asia, and in China we see it also from very ancient times and more especially in the Han Dynasties used as a favourite decorative motif (Fig. 42).[3] The *inrō*-like cases, perhaps contained medicine, and the open-worked cases for incense, might have been of Chinese origin. In a word, our waist-pendants from the Gold Crown Tomb show the closest resemblance to those of the Ryōsan tomb, in their technique and variety, but are far more elaborate and multiplied than the latter.

---

1. See a passage quoted in the *Han-yüan* 翰苑, Vol. XXX., a Chinese compilation of the T'ang period; only this volume is extant in Japan.
2. Mr Y. Harada, *Costume of the T'ang Dynasty*, (*Journal of the Dep. of Lit., Tokyo Imp. University*. Vol. VI).
3. Hamada & Umehara, *Ancient Sepulchre at Mad-ao, Ōmi* op. cit. Chp. V. § 2.

handside as shown in the Fig. 37, though at the Ryōsan tomb where similar waist pendants occurred, the longest with rectangular plate, was in the centre. We cannot help thinking some of the pendants, most probably the ones with rectangular plates, were suspended on the back of the buried personage, if we realise that 17 such examples would be too confusing to wear in front only. One can realise from the interesting fresco paintings found by Grünwedel and Le Coq in Chinese Turkestan, how such waist-pendants were worn by the Uigur people in the T'ang period, or in the Six Dynasties, though there the kinds were limited and not like our examples. (Fig. 34, 35).[1]

6. WAIST-PENDENTS (II).

(Plates XLV—XLVI)

THERE were found also other waist-pendants in silver, near the iron kettles and somewhere in the inner coffin. They are more or less fragmentary.

(1) **Pendant with a long inrō-like shaped case** (Pl. XLV. 5) : The case was in wood and now has only its silver fittings left. The general form is very similar to the gold example, but with open-work floral design on the lid and some inlaid patterns on the bottom piece.

(2) **Pendant with a fish-shape** (Pl. XLV. 4) : Almost similar to the gold one.

(3) **Pendant with an open-work case** (Pl. XLVI. 1) : Altogether resembling the example found in the Shōnei tomb, with an open-work design derived from an animal form.

(4) **Suspenders with oval-shaped plaques** (Pl. XLVI. 6–11) : All fragmentary, but at least 10 suspenders can be reconstructed from them. There are several varieties of the size and make, some with flat plaques, instead of hollowed as usual, and others with small oval things in the place of rectangular ones, &c.

(5) **Fragments of long rectangular ornaments** (Pl. XLVI. 2–5) : A little different from the gold ones, with or without remains of suspender.

---

1. Grünwedel, *Bericht über archaeologische Arbeiten in Idiqutschäri* (München, 1906) and *Alt-buddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkistan* (Berlin, 1912) Le Coq, *Chotscho* (Berlin, 1912).

like that.

(3) **Pendants with "magatama" beads** (Pl. XLII. 1, 2) : One with a gold *magatama* or comma-shaped bead, and the other with a jade one, both crowned with gold caps.

(4) **Pendant with open-worked plates** (Pl. XLII. 4) : The plates are pierced with a schematized design, probably derived from an animal form. It seems that originally some cloth was fastened between them, protruding from the edges.

(5) **Pendant with a pincers** (Pl. XLIII. 2) : The pincers are in a solid gold.

(6) **Pendant with a fish-shape** (Pl. XLIII. 3) : The scales and other details on the fish are punched out.

(7) **Pendant with a two-feet object** (Pl. XLIII. 4) : The object has its upper part decorated with an open-work floral design. This must be a two-feet pick or a form derived from scissors.

(8) **Pendant with a glass ornamant** (Pl. XLIII. 1) : The ornament is an egg-plant fruit-like shape in dark blue glass. It is enclosed in a thin gold net and suspended by a complex chains which have five ball-like ornaments at intervals.

(9) **Pendant with an open-worked case** (Pl. XLI. 2) : One end of the case is open with a pierced design of honey-suckle pattern. Originally it contained something made of wood, suggesting to us that this was an incense case. Present-day Korean ladies wear similar objects. The chains suspending the case are thicker and more complex than in the previous example.

(10) **Pendant with a long inrō-like case** (Pl. XLI. 3) : The case is an octagonal body, suspended by thin chains on both sides. The main suspender consists of 4 strings of chains, decorated also with ball-like ornaments.

* * * *

Though the pendants above-mentioned have two different kinds of suspenders, some with oval and rectangular plaques, and others with chains, they were undoubtedly worn by one person as a set of waist-pendants, from the actual position where they were discovered. (Fig. 36). But it is evident that the longest one with *gyōyō*-like ornament came to the right end and the others to its left

mental applications were multiplied here, according to the taste of the Koreans of the ancient Shiragi period. In fact, they are over-decorated in a confusing manner, showing a barbarous taste and a decadence tendency of style. We think also such girdles were perhaps introduced by the Turkish people into China, who wanted in their nomad lives in camps to hang certain articles by the rings attached to leather girdles, though they came gradually to be mere ornamental pendants instead of real rings, as seen on the most of our examples.[1] The buckles, one of the wide-spread fittings of the belt in the world, naturally came from the same source as the girdles (Fig. 30).

5. WAIST-PENDANTS (I).

(Plates XLI—XLIV)

A set of gold waist-pendants discovered to the West of the gold belt is one of the most remarkable objects after the gold crown. They are as wonderfully well preserved as the latter, attracting the eyes of the general public. The set consists of 17 pendants of solid gold, suspending many different sorts of ornaments, in the manner of a chatelaine, and may be said to be the most magnificent specimen of the kind ever found in Korea or in China.

(1) **Pendant with a gyôyô-shaped ornament** (Pl. XLI. 1) : This is the largest and longest of all, measuring about 2 feet and 10 inches, double the size of other pendants. The suspender consists of oval and rectangular plaques, connected alternately by hinges. The pendant ornament is in a form akin to a *gyôyô* of a horse-trapping, decorated with a punched boarder design, small round fringes being attached to its flat surfaces, and three small bells depend at the lower end. We do not know what was the object imitated, if not a bell or *gyôyô*. The oval plates of the suspender might be an imitation of shell ornaments, being the concave surface on the front.

(2) **Pendants with long rectangualr ornaments** (Pl. XLIV.) : 6 examples. The long rectangular plates are probably copied from tassels, or something

---

1. See a passage in the *Mêng-ch'i pi-t'an* 夢溪筆談 by Chên Kua 沈括, where he holds a similar opinion with us and an elaborate study upon the barbarian costumes in ancient China, *Ku-hu-fu-kao* 古胡服考 by Mr Wan Kuo-wei 王國維 (The *Kuo-hsüeh-tsung-k'an* 國學叢刊. Vol. XVIII).

bosses are in the shape of a heart, having no open-work design upon it. The pendants however, are similar in some cases to former examples with honeysuckle pattern, sometimes replaced by rings, of simple or of trefoil shape.

(10)–(12) **Gilt bronze ornaments of girdles** (Pl. XL. 7–8, 10–13, 17–18) : 3 kinds, all very fragmentary, with heart-shaped bosses, and simple rings. Some of them are not certain to have been ornaments of girdles.

(13) **Silver plated bronze ornaments of a girdle** (Pl. XL. 13, 20) : The ring is in silver.

(14) **Gilt bronze ornaments of a girdle** (Pl. XL. 14, 15) : Bosses are in the shape of trefoil, with simple ring. This with the previous examples is not sure to consider as girdle ornaments.

(15) **Silver end-plate** (Pl. XLI. 16) : A detached piece.

* * * *

The girdles with gold ornaments in this tomb are no doubt the most elaborately decorated, precious in material and complete in preservation, ever found in the peninsular and in Japan.[1] Though similar girdle ornaments in silver or gilt bronze have been brought to light in these countries, they are usually fewer in number and never have additional round fringes like our example. It seems, therefore, that ornamental plaques generally were attached at intervals, not as in our example all over the girdle continuously. Heart-shaped bosses, however, were always fixed at intervals on a girdle, some 5 to 13 (Fig. 29). If we believe that all the items previously mentioned are parts of girdles, there must have been at least 14 girdles, some with open-work plaques and others with heart-shaped bosses.

Are they of Chinese origin or of Korean invention? The *K'ua-tai* 銙帶 in China of the Six Dynasties and of T'ang, were probably such girdles with ornamental plaques or bosses with rings (Fig. 33). But we have never heard of such sumptuous belts there, as exemplified by our gold girdle, for in China even an emperor's girdle had only 9 to 13 bosses, if we are to believe historical literature. So it is very probable that the general style came from China and orna-

1. A corpus of the ornamental plaques and pendants of girdles found in Korea and in Japan are given in Fig. 32.

naturally believed to have belonged to the chief person in the tomb. But what about the others? This question arises also in the case of the finger-rings which are too many to be used by a single person. Were they anklets and toe-rings, or did they belong to another person? We shall discuss this in a later chapter.

4. GIRDLES

(Plates XXXVIII—XL)

IN the middle of the coffin, to the west of the gold crown, the gold ornaments and fittings of a girdle were discovered *in situ* just as it was worn by the deceased. This conspicuous fact was witnessed by everyone at the excavation. But other girdle ornaments in silver and bronze, escaped notice or appeared sparingly scattered in the inner as well as in the outer coffin.

(1) **Gold ornaments and fittings of a girdle** (Pl. XXXVIII.): 1 set complete, in 41 pieces including a buckle and an end-plate or a tang. There is no doubt of this belonging to a girdle from its position as well as from other examples, especially those from the Ryōsan tomb. Ornamental plaques, 40 in all, are rectangular in shape, hinged down heart-formed pendants, each at one end. Both ornaments, plaque as well as pendants, have open-work design of honey-suckle pattern and with some small round pieces attached, rather too elaborately. The buckle is also in a honeysuckle-like outline, while the end-plate is decorated with punched border ornaments. Judging from the traces of cloth left under the ornamental plaques it would seem that the girdle was not made of leather. Total length measures more than 3 feet and a half, indicating this was a ceremonial girdle very loosely worn.

(2)-(5) **Silver ornaments and fittings of girdles** (Pls. XXXIX.-XL.): There are 4 sorts of ornamental pieces end pendants, probably parts of 4 girdles. The design of the open-work and the technic are more or less similar to the gold specimens, but somewhat simpler in decoration.

(6) **Gilt bronze ornament of a girdle** (Fig. 3): Only a few pieces of open work are left. The technic is similar to the previous examples.

(7)-(9) **Silver ornaments and fittings of girdles** (Pl. XL. 1-4, 9, 16) 3 different kinds consisting of 3 girdles. Here, in these examples, the ornamental

the hoop widened at the front, having a thin indented belt in the centre; secondly, a similar shape without the belt, and thirdly, the hoop without any widening, but a lattice design on it. In the latter type we see the smallest example, probably, worn on a little-finger.

(4) **Silver finger-rings** (Pl. XXXVII. 14): 3 pieces, all in the worst of conditions. The best preserved one belongs to the second type of the gold one.

* * * *

Though no finger-rings have yet been discovered in Japanese tombs, some were unearthed from those in southern Korea. At Ryōsan and Kōnanri in Keishū, they occurred even in the graves considered to be of men, indicating that in the peninsular country rings were worn by both sexes and also many pieces on each hand, just as in our practice. These Korean rings differ from those signet-rings of Western nations and if we compare their technique to ear-pendants or other personal ornaments, the decoration much simpler. In China we know that finger-rings were in use in the Han dynasties, and were called sometimes *chieh-chih* 戒指 or "warning-finger" and worn in the harems as a certain mark among court ladies. It seems very probable that the custom of wearing finger-rings had been stimulated by western people, since the intercourses between China and those countries had increased, as mentioned in history certain precious rings were presented by those peoples to the Chinese courts. Though we do not yet know how and when the Korean rings came in vogue, the Chinese influence on them cannot be denied.

As to the bracelets quite similar specimens have been come upon in other tombs in southern Korea as well as in Japan. They were also worn by both sexes and often many pieces on each arm.[1] That the indented design on the rings is considered nothing but the remnant of the natural incisions on shell-armlets, as exemplified in those found in our neolithic remains. Though bracelets were in fashion already in the Six Dynasties in China, it is not necessary to attribute them to Chinese origin, but regard them as an indigenous ornament of the country.[2] Two groups of armlets found in the central part of the coffin are

1. Dr K. Kiyono, *Shell-mound at Tsukumo* (*Report upon Archaeological Research in the Kyoto Imperial University*, Vol. V.) Chap. III

2. See Mr K. Takahashi's article in the *Kōkogaku Zasshi* or *the Journal of Archaeology*, Vol. III, No. 7.

These can be considered as formerly making up one or more necklaces and pectorals of the buried personage who possessed the wrist ornament above-mentioned. One of the *magatama* has a trace of string at the hole.

* * * *

Among the necklaces and pectorals which we have tried to reconstruct from the beads found in the tomb, at least one with a big *magatama* is most likely, since we have made use of the necklace found at Ryōsan for example. This peculiar shaped bead is very common in our Japanese tombs, but has not yet been discovered as it shown in our or other Korean tombs, used as the pendant of a necklace, though it is considered that the shape of the bead is derived from an animal tooth or claw and served as an amulet originally. From this point our specimen contributes very important material for the study of the bead.[1]

3. BRACELETS AND FINGER-RINGS

(Plates XXXV—XXXVII)

THESE were uncovered in the inner coffin at two spots, one in the central part, on both sides of the golden girdle and the other, near the south-western corner, at the ends of the gold waist-pendants. Bracelets made of gold or silver, 29 in all, and 16 finger-rings, mostly of gold. The former came out in 4 groups, showing their original positions worn by the buried person or persons, while of the latter only 2 groups were clearly noticed (Fig. 27).

(1) **Gold bracelets** (Pls. XXXV., XXXVI. 1–4) : 11 pieces, some in complete circles, others being penanular. The outer surface is indented, more broadly in the former, and more deeply in the latter type. Both occurred in mixed groups (Fig. 28).

(2) **Silver bracelets** (Pl. XXXVI. 5–10) : About 17 examples, only 4 in a fair condition and the others broken in fragments. Two types, like the gold ones, are also visible in these silver specimens, and with varied forms of indentation as well. Here, however, is added one more type without indented ornaments.

(3) **Gold finger-rings** (Pl. XXXVII. 1–13) : 14 pieces, in 3 types. First,

1. Of the beads will be described again in Chap. IV., Part II. of this report.

discovered in Korea. They are in fact too much decorated, and the filigree work, a technic introduced from the West, here reveals a sign of decadance, not so fine as some other examples.

2. NECKLACES AND PECTORALS, &c.

(Plate XXXIV)

NECKLACES and pectorals, owing to the decaying of the strings through the beads, are naturally in a condition not quite restorable their original forms. But we can reconstruct some of these, from two groups of beads in the inner coffin, one that was between the gold crown and the waist-pendants, and the other that was near the western corner of it.

(1) **Necklace with a big "magatama" bead** (Pl. XXXIV. 1–6) : The group of various kinds of beads found to the west of the crown, seems to have consisted of beads for a necklace and pectoral. They are 4 *kudatama* or cylindrical beads, 6 *kirikodama* or bi-pyramidal beads, and 11 small round beads, all in agate, 5 paste beads, and a big *magatama* or comma-shaped bead in beautiful jade. If we compare this group with a similar find at Ryōsan, where fortunately all the beads remained connected together with silver chains and strings, it will be fairly easy to restore the necklace with the *magatama* as a pectoral hanging down on the breast of the buried person (Fig. 26).

(2) **Necklaces of glass beads** : Small glass beads of an ultramarine colour, about 550 in number, discovered near the ear-pendants, are to be considered as forming one or more series of necklaces, and from their position in the coffin must have been worn round the neck of the deceased personage.

(3) There was found a series of beads near a group of silver bracelets, consisting of about 7 strings of small glass beads and a *magatama*. This comma-shaped bead is made of jade and crowned with gold leaf, like the one in the necklace found in the Fumonri tomb. The spot where our example occurred, however, suggests that this one of ours belongs to an ornamental string of beads for the wrist, and not to a necklace.

(4) Two *magatama*, one gold-coloured glass bead, one pearl bead and about 300 ultramarine glass beads occurred in the western part of the coffin.

Left only one of pair. Somewhat similar style with the first specimen, but minor decorative pieces in the shape of bamboo-leaf.

(5) **Gold pendants** (Pl. XXXIII. 5) : Though this pair lacks the ring, it is quite similar to the other ear-pendants in style. The hanging pieces on the main pendant are in the form of a halberd, and those on the smaller ones, in a bamboo-leaf shape,

Besides the above-mentioned examples there are some long pendants, which seem to be ornaments attached to the gold crown. One of them has a pendant, quite the same as the shorter one on No, 3 already described. This comes evidently from the motif of the ear-ring.

*　　*　　*　　*

The fashion of wearing ear-rings was already in vogue in the Han and Six Dynasties in China, though it seems that it was regarded rather as a custom introduced from foreign countries. In Japan, however, simple ear-rings without pendants are commonly found in ancient tombs, except in some rare cases where strong Korean influence was shown, which yielded specimens like our ear-pendants. Such ear-rings with more or less extravagant pendants occur very frequently in southern Korea, and show clearly how the people here were fond of rich or even over-rich personal ornaments.[1]

Now then in what way was such an ear-ring with a thick ornamental ring worn on the ear-lobe? As no other fittings have been found even in the Ryōsan tomb where the ornaments were found exactly as in life, this thick ring must have pearced through the lobe making a big hole, which is not uncommon in present-day savage tribes. When, however, a person sought his couch, probably the pendants with thinner rings detached from the thick rings which continued in the lobes, one in each.

As we have elsewhere discussed the subject of ear-rings, we shall not dwell upon it here.[2] One can see in the Fig. 24, to what styles our specimens belong and what is their technical merit, compared with other examples previously

1. It is interesting to see ear-pendant-like ornaments occur often on pottery vases found in Keishū (Fig. 25).
2. Hamada & Umehara, *Ancient Sepulchre at Midaus, Omi.* (*Report upon Archaeological Research in the Kyoto Imperial University.* Vol. VIII.) Chap. V. §. 1.

CHAPTER III. ORNAMENTAL OBJECTS (I)

1. EAR-PENDANTS

(Plate XXXIII)

THOUGH it is usual to find one pair of ear-pendants in one tomb, here in this Gold Crown Tomb occurred three pairs and more in the inner coffin, exhibiting unusual richness and an extravagant taste for the articles.

(1) **Gold ear-rings with two groups of pendants** (Pl. XXXIII. 1) : This pair was found *in situ*, to the west of the gold crown, where the ears of the buried person would have been. A thick ornamental ring is added, for attachment to the ear lobe, and two groups of pendants are hung from a thinner ring. The longer pendant consists of a tiny basket-like thing and a heart-shaped piece, multiplied by smaller fringes of heart-form. The same but a simpler treatment is seen on the shorter pendant. Though the decoration is very rich, the technic cannot be said to be very fine, showing least application of true filigree work (Fig. 23).

(2) **Gold ear-rings with single group of pendants** (Pl. XXXIII. 2) : Found in the western part of the coffin, has a pendant similar to the previous example, but only one group. The smaller decorative pieces are here in the shape of a halberd, instead of a heart-form, though the main piece still retains the latter shape.

(3) **Gold ear-rings with two groups of pendants** (Pl. XXXIII. 3) : The finest among our ear-pendants. This has no thick ornamental ring as in previous examples, but rather a peculiar decoration of pendants of fine taste. The longer pendant consists of some beautiful crown-like ornaments which originally seem to have contained certain beads or bean-like objects. The shorter one is quite different in shape from the former, consisting of a twin bead-like ornament in a fine filigree and a large heart-formed plate. This sort of pendants we often see among ear-rings in Korea and in Japan. The gold is of a reddish tint (Fig. 23).

(4) **Gold ear-ring with a single group of pendants** (Pl. XXXIII. 4) :

vessels until the Wei Dynasty and even in the Six Dynasties and the T'ang, fine glass vases were imported from the western countries.[1] The specimens from our Gold Crown Tomb and from the Japanese Imperial sepulchres are certainly imported wares from China and most probably from Roman or Western works. It is undoubted that these were treasures highly valued and could only be possessed by a royal family or by the richest persons in the Far Eastern countries so distant from their original home.

1. There are many passages in Chinese poems and literature of the Six Dynasties and the Tang period in which glass vessels were the subjects and tell us of their being highly valued, as the objects which came from the Western countries traversed deserts and mountains. For example, see the poem by P'an Ni 潘尼 on a *Liu-li* cup.

some boxes in Shôsôin.

Lacquered work is very old in the Far East. In the Han period it had already reached a wonderful state of developement, as may be seen by the remains of the tombs at Daidōkō-men in northern Korea. From China it was introduced into Korea and into Japan. Those works in our tomb were no doubt made in the peninsular, if we may judge from the crude ornamentation on the vessels and also from the existence of a big lacquered coffin.

Here we have to mention the find of some shell vessels in the tomb. Unfortunately they have been crushed into pieces since our first examination. But it is somewhat rectangular in form and the shells seemed to be *awabi* or sea-ears (a family of the *haliotidae*) of big size with gilt bronze edges.

5. GLASS VASES

(Plates XXII—XXIII)

AT the eastern part of the outer coffin, near the kettles were found some fragments of glass vases from which we could restore two small cups with stand. Each diverges a little in form, but both are made of an almost transparent blowing-glass with somewhat greenish-blue colour. One, the larger, is decorated with two thin snake bands of blue glass threads in zigzag, while the smaller is plain except for a raised belt, on the body.

This is the first instance where we have discovered glass vases in an ancient Korean tomb, though two Japanese discoveries are known before, from the tombs of the 5th and 6th centuries A. D. The one is a bowl with boss-like ornaments from the tomb of the Emperor Ankan (Fig. 21), and the others broken vases from that of the Emperor Nintoku. We have also some examples of the 8th century glass vases kept in Shôsôin (Fig. 22), and a cinerary urn of a Nemaro (Fig. 20). All but the last objects are considered as being without doubt importations from China, and most of them are attributed by connoisseurs to Roman or Western glass.

The history of glass in China has been much discussed by the scholars of Europe and of Japan. Though Chinese knew it already in the former Han Dynasty under the name *liu-li* 瑠璃 or *po-li* 玻璃, or probably they made small articles like beads or seals in earlier times, they could not manufacture glass

period of the dolmen-builders. In the days when our tomb was constructed, for vessels pottery was commonly used and for particular use, for example, as a water dipper, perhaps a gourd-skin served as in the Korea of to-day. But here in our Gold Crown Tomb we see a dipper of bronze with fine ornaments, many metal vases, instead of pottery ones and finally a cooking-vessel, *chao-tou*, of Chinese manufacture. These show how rich and distinguished was the buried personage, as the other articles also bear witness to it.

4. LACQUERED WOOD VESSELS

(Plates XXVIII—XXX)

LACQUERED wood vessels occurred near the iron kettles and seem very numerous, probably next to the metal vases. But unfortunately, from the delicate nature of the material, they were all in a most dilapidated condition. So we can hardly restore their original forms, except in two or three instances.

There are two pieces which seem to have been covers of some round vessels, black-lacquered, rimmed with gilt bronze and each having a ring on the top. Another low lid, also black-lacquered with three holes on the top, suggests that it had originally a metal knob. A round piece with a beautiful lotus design in red on the black-lacquered surface (Pl. XXX. 7) and some shallow dish-like things which yielded piling up one upon another, are to be noticed. One of a similar dish-like piece is lacquered outside in black and inside in red. It is interesting to compare this with those lacquered cups or pottery imitations of them found in Chinese Turkestan by Stein and in Manchuria by Hamada, in the similar system of colouring the inside and outside of vessels.[1] Of the lacquered coffin we shall treat in a later chapter.

Lacquered fragments with painted patterns have been collected abundantly, some typical specimens being shown elsewhere. Ornaments mostly consist of zigzag, lattice, some crude floral design, &c., in white, red, yellow and blue colours which seem applied with an oil called *mitsudaso* 密陀僧 (an oxide of lead) as seen on the famous Tamamushi Shrine in the Hōryū-ji Temple, and

1. See also a lacquered toilet-case shown in the scroll of Ku Kai-chi 顧愷之 in the British Museum (Fig. 19). Our modern lacquered vessels have also a similar way of colouring.

tou 鐎斗, though somewhat different from one of the Han style, an example of which may be seen in the Hōryū-ji Temple (Fig. 15). It shows a transitional form from a *chao tou* to a handled incence-burner of the T'ang period (Fig. 16). No one hesitates to ascribe this as an imported bronze from China and to be one of the most important objects to fix the date of the tomb, from its lotus and floral ornaments which prevailed in the Six Dynasties in China.

(6) **Gilt bronze bowls with cover** (Pls. XXIII. 5–7, XXIV. 6) : 16 examples, but only one in a fine condition. They are cast bronze with ringed cover. Compared to those found in the Shōnei and Funnori tomb, these seem to be rather inferior in make.

(7) **Gilt bronze large bowl with cover** (Pl. XXIV. 8) : 1 specimen in fragments. Cast bronze with somewhat flat form, with a ringed cover like the previous ones.

(8) **Silver bowls with cover** (Pl. XXIV. 7) : All 6 broken. We see a knob on the cover of the best preserved one, which is decorated with perforations like the pottery lids. Originally gilt.

(9) **Gold bowls** (Pls. XXIII. 1, 2, XXIV. 1, 3) : 6 examples, all complete. Judging from the colour it seems to contain a large quantity of silver. Flat form like the previous bowls.

(10) **Silver bowls** (Pls. XXIII. 3, 4, XXIV. 2, 4) : 5 pieces in bad condition. The form is similar to the gold ones.

(11) (12) (13) **Gilt bronze bowls with holes** (Pl. XX. 4, Fig. 17) : 5 examples in all, each with a small hole at the bottom and tiny continuous perforations near the rim. No. 13 is a little thicker in make and a trace of something attached to the outside of the bottom hole is still visible.

(14) **Gilt bronze-plated iron vessel with holes** (Fig. 17) : Similar to the previous examples, if we restore from fragments. All these vessels with holes have some traces of cloth near the rims, &c., but it is difficult to know what was the purpose of this.

* * * *

Metal vessels are very frequently found in the tombs of a later period, the Korai dynasty in Korea, and also used in abundance by present-day Koreans. In Japan, similar bronze vases sometimes occur, but seem to belong to a later

though the two ears or handles seem novel.

(3) **Gilt bronze vase in horn-shape** (Pls. XX., 1. XXI.) : On the upper part, a long plate is rivetted and the bottom was originally filled by a wooden plug and covered with a bronze plate. The lid is similar in form to that of a bronze bowl. Though this kind of vessel in bronze is rare, we know one from a Shōnei tomb (Fig. 13), and many examples in pottery from tombs near Keishū and in Japan (Fig. 7). Moreover, it is comparable with a lacquered wood specimen *kōsou* 胡樽 in Shōsōin, Imperial Repository at Nara (Fig. 13). The adaptation of animal horns for wine vessels and their imitation in other materials are very frequently come upon everywhere in the world, being exemplified in Greek rhyta or in several varieties of bronze wine vases of ancient China. But this shape of vase, on the other hand, can be considered also as derived from a water-skin.[1]

(4) **Bronze water-dipper** (Pls. XX. 3, XXII.) : An oval-shaped body with socket for a wooden handle which has now perished. The base of the socket is in a design of a lotus, and a silver covering with a certain pattern at the end of it where the handle was inserted. On the opposite side of the body is seen also a boss-like ornament which seems evidently the remnant of the handle end which traversed the body when it was a gourd-skin or a wooden vessel. This fine vessel, used for dipping water or wine, seems to be of Chinese origin, and quite a new type to be found in a Korean tomb.

(5) **Bronze cooking-vessel, "chao-tou"** (Pls. XXV.–XXVII.) : The spherical body has three legs, and dragon-head-shaped spout and a hinged lid with lotus design. The long handle coming out from a dragon-head, turned twice in a right angle and finally terminates in a honey-suckle form which also comes out from the same animal's jaws. Fine floral ornaments are engraved over the entire surface of the handle and a similar sort of design is found also on the surface of belt-like raised ridges round the body. We are informed that similar vessels were brought to light in a tomb at Shōnei[2] and in China, for example at Hsin-an 新安 in Ho-nan (Fig. 15). Evidently this is a cooking-vase called *chao-*

1. See on an alabaster relief found at the palace of Sennacherib in Assyria, some water-skins in such a shape are hung in the interior of tents (Fig. 11).
2. Near Heijō in the northern Korea has been found also an example.

the same material, but instead, a broken part of a pottery pedestal covered the mouth of each kettle. This cover has incised ornaments like the pottery lids, &c. Some tell us that each kettle was covered also by a piece of hollowed wood, but we can not believe it, or perhaps, some fallen wood of the coffins might have overapped it.

Kettles were evidently one of the earliest vessels of mankind. We find quite similar forms already on engraved stones as well as on the clay mortuary models of China in the Han yeriod. They were probably used to steam rice or other cereals, instead of boiling as we do now-a-days. The ancient Chinese called such a three-legged kettle *i* 錡, and it is interesting to know that the word for kettle, *kama*, is the same in Korean and in Japanese, as Dr Miyasaki has already pointed out.

Though iron kettles have not yet turned up in Japan, they have appeared in southern Korea, at Ryōsan, Shōnei and Fumonri tombs. In the time of the tumulus-builders, it seems that iron kettles were very precious, only used by the rich and by nobles, while common people had to be content with pottery ones. If this was the case the four iron kettles preserved in this tomb together with the gold and other treasures, must be, a display or sign of the extraordinary wealth of the buried person.

3. METAL VESSELS IN GOLD, SILVER AND BRONZE

(Plates XVII–XXVII)

METAL vessels in gold, silver and bronze were very plentiful in this tomb, there being more than 50, all discovered near the kettles. Most of them are food vessels, with forms like the common earthern ware, except a dipper and a cooking-vessel, *chao-tou*.

(1) **Bronze jar with four ears and lid** (Pls. XVII.–XIX.) : Though the lid and the bottom of the vase is broken, we can restore its entire shape. This is a cast bronze, not thin like a funeral vessel, with an elegant form.

(2) **Gilt bronze tazza with cover** (Pls. XX. 2, XXIV. 5) : Made of thin plates, the body and cover in a hemi-spherical form. The stand is perforated like that of a pottery tazza. This is evidently an imitation of a pottery vase,

vase, has another meaning, that of boar, and that the *hotogi* or *pathangi* must be a vessel made originally with a boar's skin by the Ural-Altaic race. Accepting this interesting theory on the one hand, we cannot help recognizing its intimate relation with the water-skins of Turkey, the leather "Jacks" of mediæval England, or barrel-formed vases of the West. (Fig. 9) This form of vase, however, with that of pilgrim bottles are the two most wide-spread vessels of peculiar shape in the world, and the latter seems also a varied form of a skin-bottle as our Japanese examples suggest to us (Fig. 11). Though no pilgrim-bottle came up from this tomb, we come across not rarely in Korea and most frequently in Japanese tombs.[1]

Another point to consider here is the independent lids of vessels, as found in this tomb as well as in other graves of southern Korea. We notice also that those lids which are found with appropriate vessels are often not well fitted to each other. It would therefore seem that in those days not infrequently lids were made and supplied separately from vases. This was in fact an independent vessel form and is not to be considered as a dismembered piece, if a lid occurs without any suitable vase for it.

In a word, pottery vases in this tomb belong to quite common types and manufacture, showing no sign of superiority, notwithstanding the fact that in metal vases and other items, as we shall describe, it surpasses all other sepulchres of the age and locality.

2. IRON KETTLES

(Plates XV & XVI)

FOUR kettles, the only vessels in cast iron in this tomb, discovered in the eastern part of the outer coffin. Their large size and red oxide colour, strongly attracted the eyes of the excavators so that they became the main objects to fix the orientation of other buried articles.

They are more or less broken, but have very much the same form as those used in present Korea and also our Japanese tea-kettles. The make is thick and its flattened body has a wide ridge and three short legs. No lid, however, of

1. Greek askos (ἀσκός), as it means a goat skin, is also thought to be a form derived from a skin bottle.

handle on one side of the body, but no lid. It belongs to one of the fine specimens of pottery in this tomb.

(5) **Bowls with cover** (Pl. XII. 6–8) : 13 examples. Common type with geometrical ornaments on the covers.

(6) **Tazze** (Pl. XII. 9–11) : About 7 specimens, all more or less broken. This is the type called *takatsuki* by our archæologists. The cover and bowl are similar to the previous vessels, though the lid lacks patterns. The high stand, however, is decorated with rectangular perforations.

(7) **Lids** (Pl. XII. 1–5) : About 20 specimens were found without any vessels to apply them to. The shape is quite similar to the bowls already mentioned. Geometrical ornaments incised on the surfaces consist of chevrons, circles, lattice, &c., as shown in Plate XIV.

(8) **Other specimens of hard ware** : 4 pieces of broken pedestals occurred as the covers of iron kettles, and 2 fragments of the stands of some vessels. The former will be described in the next section.

(9) **Bowls with cover in brown pottery** (Pl. X. 7–9) : 6 examples, 3 of which were in better condition. Quite a common type, like those from the tombs in southern Korea.

* * * *

The pottery vases, except the last-mentioned, all belong to the hard grey ware called *Iwaibe* in Japan and *Shiragi-yaki* in Korea, being a very popular ware in southern Korea as well as in Japan. The types are also common in both countries, there being nothing particularly striking except the barrel-shaped jars which are very numerous in this tomb. This type of vessel is still used in the peninsular called *pathangi* or *changkun*.[1] Dr. M. Miyasaki enunciated a theory that the ancient Japanese word for this vase, *hotogi*, has its origin in the Korean *pathangi* and probably with some relation with old Chinese for vase *fou* 缶 and *fu-ui* 服匿 of the Hiung-nu 匈奴 (Fig. 8).[2] Further pointed out by Dr R. Torii the facts that Mongolian or Manchurian name *botou* for this kind of

1. Gowland, *Dolmens and Burial mounds in Japan.* (*Archaeologia* 1897) p. 497
2. Drs Miyasaki's and Torii's articles in the *Shigaku-zasshi* or *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft.* Vols. XVII & XVIII, (Tokyo, 1908–9)

CHAPTER II. VASES AND VESSELS

1. POTTERY

(Plates VIII—XIV)

OUR description of the interred objects in the Gold Crown Tomb begins with the pottery vases. They are plentiful, exceeding some 80 pieces altogether, though most of them are in a fragmentary condition, destroyed by the stones and earth which came down after the wooden coffins had perished. Except one pot which was found in the western part of the outer coffin, all the others lay near the iron kettles, on the same level or a little below it. We can classify two kinds of ware, one a hard grey-coloured, and the other a soft brown pottery, of which the former is far the more numerous.

(1) **Long-necked jars** (Pls. VIII., XI. 1) : 3 specimens, all broken, but one restored almost completely. They belong to a type very common, with the neck decorated with belts and with brushed patterns. No lid occurs, although each jar has a moulded rim as though to receive it.

(2) **Barrel-shaped jars** (Pls. VIII., IX., XI. 2) : 3 examples almost complete and 6 broken. There have a barrel or straw-bag (*tawara*) shaped body and a long neck. There are two types, one a more slender and the other a more rounded body. Each type has three or four hook-like decorations under the rim. Very interesting facts showing the process of manufacturing these jars are that in the rounder type the neck was added after finishing the entire body in one piece, while in the slender type both ends of the body were filled up after the neck and sides of the body were completed. Most of the jars are provided with lids (Fig. 5).

(3) **Jars** (Pls. VIII., X., XI.) : 2 complete and 6 in fragments each differing in shape. Some have shallow dish-like lids on the mouths, which seem not specially made for these vases. The finest jar shown in Pl. VIII. 4 has four small holes in the rim for suspending the jar by a cord.

(4) **Small pot with stand** (Pls. VIII. 3, X. 10) : This has an ear-like

This shows how rich and abundant were the interred objects in the tomb, some in gold and some in silver, and often several specimens of one kind of article. This inventory, being a preliminary one, will be multiplied in its kinds and in number, when our research is completed, and if we include some already scattered objects, such as beads and other small articles. Though this find be overshadowed by some of richer quality and variety in Egypt or other countries, it will be ever remembered as the "Treasure of Keishû" in the history of archaeological discoveries in the Far East.

We have to notice, however, that notwithstanding the wealth of objects there lack certain kinds of things, for example mirrors, stone models, &c., the former are so common and the latter not infrequently found in our Japanese tombs, and also mortuary statuettes come up usually from Chinese sepulchres, of the corresponding ages. They are very important points for the study of the nature of our tomb, chronologically as well as ethnologically, and will be treated in the next part of the report.

(3)	Iron spear-heads	8
(4)	Iron arrow-heads	2
(5)	Iron adzes or axes (broken)	some
(6)	Silver and gilt bronze butt-ends	5
(7)	Bow ends	2

IV. HORSE TRAPPINGS

(1)	Bronze bells of elongated form	20
(2)	Round bronze bells	17
(3)	Ring-shaped stirrups	
	a) Gilt bronze open work with beetle wing ornaments	2 piars
	b) Gilt bronze work	1 pair
	c) Iron work	4
(4)	Gilt bronze ornaments of saddle with beetle wing ornaments, &c.	ca. 5 sets
(5)	Strap pendants "Gyôyo"	
	a) Tongue-shaped gilt bronze-plated iron work	ca. 19
	b) Gilt bronze plated iron work with open-work ornaments	ca. 24
	c) Heart-shaped pendants	1
(6)	Gilt bronze plated iron bits	some
(7)	Strap ornaments "udzu"	
	a) Flower-shaped gilt bronze specimens	ca. 100
	b) Hemi-spherical gilt bronze specimens	ca. 350
	c) Glass work specimens	ca. 9
	d) Shell work specimens	ca. 6
(8)	Buckles of straps (gilt bronze, &c.)	ca. 30
(9)	Strap ornaments of metal	some

V. MISCELLANEOUS

(1)	Silver and gilt bronze spoons	4
(2)	Metal sticks	8
(3)	Small pebbles probably for games	ca. 80
(4)	Gold thread	some
(5)	Gilt bronze needles	2
(6)	Stone weight with hole	1
(7)	Gilt bronze ball-like objects	7
(8)	Leather thongs	a few
(9)	Iron objects with queer shaped heads	4
(10)	Rectangular and cuneiform iron pigs	ca. 50
(11)	Animal claws	2
(12)	Gold boulder ornaments	a few

(10)	Open-work ornaments	4
(11)	Cruciform gold and silver ornaments	5 pairs
(12)	Gilt bronze objects of *ichimegasa*-shape	1
(13)	Gilt bronze phoenix-shaped ornament	1

II. VASES AND VESSELS

(1)	Pottery vases	
	a) Long-necked pot of hard ware	3
	b) Barrel-shaped pots of hard ware	9
	c) Pots of hard ware	15
	d) Pot with short stand of hard ware	1
	e) Bowls with lids of hard ware	12
	f) Bowls with stands of hard ware	7
	g) Lids of hard ware	200
	h) Deep bowls with lid of brown ware	6
(2)	Lacquered wood vessels (broken)	many
(3)	Glass vessels (broken)	2
(4)	Iron kettles (broken)	4
(5)	Metal vessels	
	a) Gold bowls	6
	b) Silver bowls	5
	c) Gilt bronze bowls with holes (broken)	5
	d) Gilt bronze-plated iron bowl (broken)	1
	e) Silver bowls with cover (broken)	6
	f) Gilt bronze bowls with cover (broken)	15
	g) Gilt bronze bowl with stand	1
	h) Gilt bronze horn-shaped vessel	1
	i) Bronze pot with 4 ears	1
	j) Bronze dipper	1
	k) Bronze cooking-vessel, *chō-to*	1
(6)	Shell vessels lined with gilt bronze (broken)	a few

III. ARMOUR, WEAPONS & UTENSILS

(1)	Weapons	
	a) Swords with ring-pommels	3
	b) Wooden swords with ring-pommels	5
	c) Swords	a few
	d) Small knives	a few
	e) Ring-pommels and other metal fittings of swords	14
	f) Angular-shaped pommels of swords	2
(2)	Armours	
	a) Gilt bronze armour sheets	(30 pieces) 1 set
	b) Gilt bronze fittings of armour	1 group
	c) Gilt bronze leggings	3
	d) Gilt bronze-plated iron armour sheets, &c.	some

fusing, we can yet realise that the chief person was interred in the inner coffin in full dress, furnished with the rich treasures of his lifetime, laying the head to the east, and stretching the feet to the west.

3. VARIETIES AND QUANTITY OF THE OBJECTS

THE objects discovered in the coffin, outer as well as inner, are extraordinarily rich and numerous, exceeding more than 500 items of various kinds and materials. It surpasses all similiar finds in a single sepulchre hitherto made in Korea and Japan. The following is a summary inventory of the objects:—

I. PERSONAL ORNAMENTS

(1) Various kinds of beads

a)	Stone *magatama* beads	59
b)	Stone *kudatama* beads	8
c)	Stone *kirikodama* beads	5
d)	Amber *natsumedama* beads	2
e)	Stone *marudama* beads	2
f)	Round beads of gilt bronze, glass, &c.	ca. 12,000
g)	Small beads of glass	ca. 18,000
h)	Small beads of pearl	ca. 450
i)	Glass *magatama* beads (detached from a crown)	ca. 75
j)	Gilt bronze bars used for bead attachment	ca. 50

(2) Gold and silver bracelets — 29

(3) Gold and silver finger-rings — 16

(4) Gold ear-rings with pendants — 5 pairs & a single one

(5) Crowns and head-gear

a)	Gold crown decorated with 67 jade *magatama*	1
b)	Gold head-gear (broken)	1
c)	Gilt bronze crown (broken)	3
d)	Silver ornaments of head-gear (incomplete)	2
e)	Head-gear made of bark (broken)	1

(6) Pendants of gold and other materials (supposed to be crown ornaments) — 5 pairs & a single one

(7) Gilt bronze shoes — 2 pairs

(8) Metal ornaments and fittings of girdles

a)	Gold specimens	1 set
b)	Silver specimens with rectangular plaques (incomplete)	ca. 5 sets
c)	Specimens with heart-shaped ornaments (incomplete)	ca. 8 sets

(9) Waist-pendants

a)	Gold specimens (17 items)	1 set
b)	Silver specimens (incomplete)	more than 2 sets

3. GENERAL ARRANGEMENT OF THE OBJECTS IN THE TOMB

THOUGH a detailed description will be given in the following chapters and final studies are expected for the second part of this report, it will be necessary here to give a general outline of the arrangement of the objects in the tomb for the understanding of the descriptions of the objects (Fig. 4).

There are naturally some points of discrepancy and ambiguity in the records and memoirs of the people engaged in the excavation, but the essential features are almost wholly in accord. The spot where the treasures were found is on the level of the present highway and about 60 feet west of it. It is a rectangular space 16 feet long, east to west, and 7 wide, north to south. Judging from the remains of wood, there once existed an inner and an outer coffin of the same material. The inner one was lacquered and more decorated, about 8 feet by 3 in dimension, and along its two longer sides were placed rows of iron pigs.

In the eastern part of the inner coffin an elaborate gold crown with a pair of gold ear-pendants and an immense quantity of beads were unearthed. A girdle with gold ornaments with a series of waist-pendants in gold were also come upon to the west of the crown, associated with several kinds of beads, gold or silver armlets, finger-rings, both the latter on each side of the girdle, though similiar objects appeared on the western side of the coffin, too. A pair of gilt bronze shoes, according to an eye-witness, was unearthed to the west of the girdle, and another pair somewhere in the coffin.

Many kinds of ritual objects were found in the outer coffin, such as several iron kettles in the east, with a large quantity of vases in pottery, bronze, silver and gold, including a cooking-vessel *chao-tou*, as well as glass and lacquered vessels. In the neighbourhood of the above-mentioned vessels came out other diadems, girdle ornaments of gold, silver or bronze gilt, with beads, armour, &c. Horse-trappings appeared to the south of these things, and a ring-pommeled sword near the southern wall. Of the things found in the western part of the outer coffin, we must mention many swords and beads, iron pieces of a peculiar shape, the latter in three corners of the inner coffin, and finally an isolated pot by the western wall. Some of these objects were on the different levels from the others.

Thus, though the arrangement of objects in the tomb seems somewhat con-

assume our Gold Crown Tomb to have been in the same proportion, then we should estimate its height to be 40 feet approximately (Fig. 2). Anyhow our tomb seems to belong with the Fôwô-dai mound, one of most important tumuli in the cemetery of the Shiragi period at Roseiri, the southern suburb of Keishû.

2. CIRCUMSTANCES OF THE DISCOVERY OF TREASURES

THE remaining mound of the Gold Crown Tomb suffered constantly from the attacks of the spades of the ignorant inhabitants of the neighbourhood, until the central part of it almost levelled down. Thus at the end of September, 1921, the kernel of the barrow was attacked, revealing gradually some buried objects. Mr Miyake, a policeman of Keishû, one day happened to catch sight of some Korean children collecting beads in the earth carried out from the house just in front of the mound. This was on the 24th of September. By his report Mr N. Moroga, of the Museum of Keishû, Mr H. Iwami, head of police, Mr K. Ôsaka, master of a primary school and others hastened to the site. Having realised that the circumstances were urgent and no delay could be made, they made an excavation themselves, from the 25th to the 30th, to collect all the objects which could be found lying about in the ground.

The Government-General in the meantime commissioned Dr T. Sekino and ourselves, who had just then come up to Seoul from Japan, to make an immediate investigation of the find. We all went over to Keishû at the beginning of October and made preliminary studies of the articles which were afterward transmitted to the central Museum in Seoul. We, Hamada and Umehara, were ordered to make a thorough and careful examination of all the objects discovered, the tomb, etc., and we began our task which has taken nearly a couple of years, with the kind help of the members of the Museum and others, and at last we have come almost to the end. The treasures themselves have recently been returned to Keishû, yielding to the earnest wishes of the townspeople to deposit them in a newly established local museum there (Fig. 3), opened in October, 1923, and one feels happy in looking at these treasures once again in the milieu of the old capital of Shiragi, where once the occupant of our tomb played his royal rôle in his lifetime. Measures have also now been taken for the preservation of this tomb of an ancient and unknown monarch.

records of the people who were engaged in the discovery. Before we describe the find it is necessary to know what was the condition of the sepulchre itself which had preserved such an immense quantity of treasures, and also what is its present condition.

Those who visit Keishû, the old capital of Shiragi are ever surprised to see the groups of big tumuli which stand high above the humble houses of the town, a striking contrast between the ancient and the modern of Keishû. Our Gold Crown Tomb *was* in fact one of these huge barrows in the southern suburb of the town, situated just to the west of Fôwô-dai mound 鳳凰臺, the most conspicuous and with trees on it. But in 1921 when the discovery was made, it was already a shapeless remnant of a tumulus, hidden entirely behind cottages, almost overlooked by ordinary passengers along the street. Old people, however, told us that they when proceeded from the town to the south in their day, they had to ascend a low ridge which connected the bases of two barrows, one the said Fôwô-dai and the other our Gold Crown Tomb. And it was only within a few years that our tomb lost the eastern half of the mound, cut off by the inhabitants of the neighbourhood, as the town had expanded and a highway was newly constructed.

The remaining mound is only about 20 feet high and 120 feet long, somewhat in the shape of a crescent. It shows that the inner part was constructed with boulders or river stones and clay, about 2 feet thick, covered alternately with horizontal layers of sand and earth (Fig. 1). This method of construction we come across often in such a stone-block tomb or "tsumiishi-tsuka" 積石塚 near Keishû, and it might have been very efficient to preserve a mound from slithering, as may be seen from many high conical barrows of the Shiragi period in the vicinity.

What was then the original dimensions of our tumulus? If we judge from the centre of the mound, where the treasures were found, which is about 70 feet from the western limit of the barrow, its diameter must have been at least 140 feet, and if we take account of the fact that the Fôwô-dai mound and our barrow once joined their bases at the centre of the present highway, the diameter would be 150 feet or so. The sister mound, Fôwô-dai, supposed to be synchronous with our sepulchre, being 71 feet in height for its 270 feet of diameter, if we

A ROYAL TOMB
"KINKAN-TSUKA" OR THE GOLD CROWN TOMB
AT KEISHÛ AND ITS TREASURES

(Résumé of the Japanese Text)

CHAPTER I. INTRODUCTION.

1. PRESENT STATE OF THE TOMB AND ITS ORIGINAL FORM

(Plates I—VII)

The rich treasures revealed in September of 1921 from a royal tomb at Roseiri of Keishû (Kyŏng-ju) 慶州路西里, which we may call the "Kinkan-tsuka" 金冠塚 or the Gold Crown Tomb from one of the remarkable objects found, is approached in its archæological importance, only by the tombs at Daidōkō-men near Heijō (Phyŏng-yang), excavated by Dr T. Sekino and others in 1917.[1] While the latter seem to be the sepulchres of Chinese settlers in that part of Korea, this Gold Crown Tomb belongs to a Korean noble or royal personage of the ancient Shiragi (Shinra 新羅) period,[2] with a close connection with the tombs of our Japanese ancestors. The only regret in our find is that the discovery was made by accident, and was not a planned excavation of archæologists, and consequently the necessary informations and records are not sufficient as in the former case. But fortunately enough the articles found were not much scattered and we are able to reconstruct tolerably well the essential features of the arrangement of the funeral objects since we have the reports and

---

1. Prof. Sekino, &c. *Special Report of the Service of Antiquities*. Vol. I. (1919. Keijo)
2. Traditional foundation of the ancient Shiragi dates back to 57 B. C. and the later Shiragi began in 669 A. D. when the whole peninsular was brought under its sway.

such extra rich treasures of a royal tomb of the Siragi period, which spurred us to hasten to the publication of this Report, in fervent hope that we were making a notable contribution to the science.

KÔSAKU HAMADA,
SUEJI UMEHARA,

Kyoto Imperial University,
December, 1923.

PREFACE

SEPTEMBER of 1921, when we were in Keijô (Seoul) commissioned for the service of antiquities by the Government-General of Chôsen, and about to start for our excavation work of a shell-mound at Ryôsan in the province of Southern Keishô (Kyŏng-sang), an unexpected discovery of extraordinary rich relics of a royal tomb at Keishû (Kyŏng-ju), in the province of Northern Keishô, was announced. A detailed report of it was brought back by Mr K. Ogawa who was despatched there immediately after its discovery, and we were asked, with Dr T. Sekino and others, to proceed to the site for the investigation of this new find. While Dr Sekino went thither with Messrs Ogawa, Nomori and Yamauchi directly, we joined them in Keishû a few days afterward, making a trial excavation of the shell-mound at Ryôsan. We stayed at Keishû a fortnight for the preliminary study of the find and since then, at the suggestion of Dr Sekino, &c., were commissioned to make a thorough research of the said remains which were afterward transported temporarily to the Museum in Keijô.

It took us two years to accomplish our work with the help of Mr K. Ogawa and others; and I am glad now that, finally, has come the opportunity of issuing the first part of the Report in the present form, which will be followed by the second and last part already prepared.

We have here to render our sincere thanks to the officials and private persons at Keishû, who showed us great kindness in aiding us in our research of the find and the site, especially do we thank Messrs Moroga, Boku, Ôsaka and Iwami, &c., and Dr Sekino and others who were with us there in that first investigation. Our warm acknowledgements are also due to Messrs K. Oda, S. Oda, Fujita, Koidzumi and Kanda, who encouraged and helped us in various ways, officially and privately; especially are we grateful to Mr K. Ogawa and Mr T. Oba for their drawings, and to Messrs Tano and Sawa for photographing the objects for the Report. The archæological world must be ever thankful to the gentlemen above-mentioned and to the chance of the unexpected revealing of

Fig. 41. (1) (2) Tibetan women wearing chatelaines. (After Laufer)
(3) Chatelaine of a Manchu woman. (After Bushell)

Fig. 42. (1) Fish-shaped and open-work waist-pendants from a Shónei Tomb. (Photo by Mr Yatsui)
(2) Eish-shaped bone pendant supposed to be found in the site of the Yin capital, China. (Collection of the Kyoto Imperial University)
(3) Fish-shaped pendant found in the tomb at Midzuo, Omi.
(4) Gold fish-shaped pendant found at Fettersfeld, Russia. (After Minns)

Fig. 43. Whetstone with silver fitting found in the Tsukinoöka tomb, Chikugo. (From the Shôshi-gundan)

Fig. 44. (1) Gilt bronze shoe found at Bannan-men, Rashû in Korea. (Photo by Mr Yatsui)
(2) Gilt bronze shoe found at the Yeta tomb, Higo. (Collection of the Imperial Museum of Tokyo)

ILLUSTRATIONS IN THE TEXT

CONTENTS

SPECIAL REPORT OF THE SERVICE OF ANTIQUITIES,
GOVERNMENT-GENERAL OF CHOSEN. VOLUME III.

A ROYAL TOMB
"KINKAN-TSUKA" OR THE GOLD CROWN TOMB
AT KEISHU AND ITS TREASURES

TEXT PART I

SPECIAL REPORT OF THE SERVICE
OF ANTIQUITIES. VOL. III.

A ROYAL TOMB "KINKAN-TSUKA" OR THE GOLD CROWN TOMB AT KEISHU AND ITS TREASURES

By

Dr Kosaku Hamada,
Member of the Committee for the Service of Antiquities in the Government-General of Chosen; Professor of Archaeology in the Imperial University of Kyoto

and

Sueji Umehara,
Of the Service of Antiquities in the Government-General of Chosen Assistant in the Archaeological Institute, Imperial University of Kyoto

TEXT PART I

GOVERNMENT-GENERAL OF CHOSEN

1924